

年報

平成 18 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences
公立大学法人大分県立看護科学大学

公立大学法人としてスタートしました

本学は、昨年（平成18年）4月に、公立大学法人として全国の看護系単科大学に先駆けて法人化いたしました。

法人化に伴い大学には、大学としての自律性を強化すること、効率的な大学運営を図ること、教育、研究、地域貢献等に関する成果を公表することにより第三者による評価を受けることなどが求められております。本学は、平成10年の開学時に建学の精神として、「看護学の考究」「心豊かな人材育成」「地域社会への貢献」を建学の精神として掲げ、教育・研究面の成果をあげることはもちろんですが、地域に開かれた大学、地域のみなさまに愛される大学をめざして教職員、学生が一丸となり一步一步大学の歴史を刻む努力をしてまいりましたので、比較的スムーズに法人化を迎えることができました。

法人化に伴う最大の成果は、理事会、経営審議会および教育・研究審議会に外部の委員の方々に参加していただき、多角的な視点からさまざまなご提言をいただけるようになったことだと思っております。外部の方々にご参加頂くことにより、緊張感も高まります。また、とくに地域社会のオピニオンリーダー的な方々にご参加いただいておりますので、幅広い領域の人々に大学をPRしていただく機会にもなり、感謝しております。

年報は、教育・研究・地域貢献に関する教職員の自己評価・自己点検の一環であり、これを公表することにより外部のみなさまからの間接的な評価を受けることになることと考へ、平成10年の開学時から毎年発行してまいりました。平成15年度年報からは、より多くのみなさまにみて頂くようにすること、経費節減等を考慮してホームページ上で、PDFファイルとして公開することにしております。本年からは、アニュアルミーティング（教員の研究成果の報告会）も、外部に公開させて頂くことにしました。

年報やアニュアルミーティングなどを通して、一人ひとりの教職員が自分に対する感受性を高め、自己に対して厳しくしていくことが、大学人としての使命であると常々思っております。

看護系大学が全国的に増加する中で、看護学のさらなる発展、看護の自律にむけて、本学からもたくさんの情報を発信していくつもりでおります。今後とも、法人化した本学に対して変わらぬご支援と、ご支持をいただきますようお願い申し上げます。

平成19年3月

理事長・学長 草間 朋子

1 委員会／ワーキンググループの活動

1-1 理事会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、高橋 賢一（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は6回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、中期目標についての意見及び年度計画、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改廃、予算の作成及び執行並びに決算、重要な組織の設置又は廃止、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

第2回から4回までの理事会は、経営審議会とは別に開催したが、第1回、5回及び6回の理事会は経営審議会と同時に開催した。また、第2回を除き全ての理事会に監事が出席した。

1-2 経営審議会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、高橋 賢一（以上、学内理事）、有田 眞、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）、古賀 和枝、佐藤 誠治、森 哲也、高山 龍五郎（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は6回の経営審議会を開催し、中期目標についての意見及び年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改廃に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、重要な組織の設置又は廃止、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

第2回から4回の経営審議会は、理事会とは別に開催したが、第1回、5回及び6回の経営審議会は理事会と同時に開催した。

1-3 教育研究審議会

委員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、高橋 賢一（事務局長）、三舟 求真（学外委員）、各研究室代表者、各種委員会委員長

本審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は14回の教育研究審議会を開催し、各委員会報告の後、中期目標についての意見及び年度計画に関する事項のうち大学の教育研究に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち大学の教育研究に関するもの、重要な規程の制定又は改廃に関する事項のうち大学の教育研究に関するもの、教育課程の編成に関する方針、学生の円滑な修学等を支援するために必要な助言及び指導その他の援助、学生の入学、卒業又は課程の修了その他学生の在籍に関する方針及び学位の授与に関する方針、教員の人事及び評価、教育及び研究の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

教育研究審議会の議事内容は理事会に報告した。

1-4 教授会

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、助教授、講師

教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行なうことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学、退学については教育研究審議会で審議し、教授会に報告することとしている。

本年度は5回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、優秀賞）などについて審議した。休学、復学、退学については教育研究審議会からの報告を受けた。

1-5 研究科委員会

構成員 草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、助教授、講師

本委員会の役割は、大学院の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項、学生の表彰及び懲戒などについて審議を行うことである。なお、その他在籍に関する事項のうちの、休学、復学及び退学については教育研究審議会で審議し、本委員会に報告することとしている。

本年度は6回の研究科委員会を開催し、大学院入試の合否に関する事項、修士論文の審査に関する事項、修士課程修了に関する事項などについて審議した。休学、復学及び退学については教育研究審議会からの報告を受けた。

1-6 自己評価委員会

構成員 小林 三津子、吉田 成一、赤司 千波、稲垣 敦、小西 清美、宮内 信治、三浦 始（事務局）

1) FD活動

全教員「科学研究費補助金」申請を支援するための基礎講座を、6月19日に開催した。終了直後に、参加者に対してアンケートを実施し、講習会についての課題をまとめた。看護系新人助手に対するサポートシステムとして、プリセプターシップの導入を開始した。4月3日にオリエンテーションを行い、中間期である8月と年度末の2月に該当者に対してアンケートを実施し、システムの利点や問題点を整理した。

日本看護系大学協議会FD委員会主催の講演会（テーマ：「看護系大学の使命とFD活動の座標軸」）に参加し、看護系大学としてのFD活動に関する情報や方策を得た。さらに、新たな試みとして、ミニワークショップ（テーマ：FD活動の新たな取り組みの可能性を探る—人間科学系教員による看護学実習見学の意味—）を、平成19年3月7日に開催されたアニュアルミーティング終了後、主催した。人間科学系教員3名と実習担当教員1名の計4名が各自の体験とその意味を発表し、その後、参加者による意見交換が行われた。今後の取り組みについて、各自が「何ができるか」を考える機会となった。

2) 授業評価アンケート

昨年度実施した授業評価について見直しを行った結果、評価項目や改善が各教員の裁量で行われ、基本的には個人としての授業評価であり、組織として行われなかったことが問題点として明らかとなった。そこで本年度は、調査票の作成・配布・回収・集計は全て自己評価委員会が行い、評価項目は全教員共通で、教育技術に限定して4領域とし、出席と満足度を加えた計19項目とした。評価結果はグラフにして改善点を分かり易く示し、アンケート実施後、速やかに返却し、各自が授業改善に活用できるようにした。本年度の実施対象教員は、前期19名、後期10名、計29名であった。

3) アニュアルミーティング

平成18年度アニュアルミーティングを平成19年3月7日に開催し、奨励研究6題、プロジェクト研究1題、先端研究2題、一般演題8題の計17題の発表と意見交換が行われた。なお、本年度から他領域での研究活動に対する理解を一層深めるため、1研究室1演題以上の発表を課したため、広範囲の研究発表があり、各研究室の特徴が良く現れ、活発なものとなった。

4) セクシャル・ハラスメント等の防止に関する活動

セクシャル・ハラスメント等の防止に関する規程に関わる苦情・相談の流れ図を作成し、学内Web上に掲載した。

5) 年報の編集

平成17年度年報の作成・発行を行った。平成18年度年報については、章ごとに分担して原稿を依頼し、編集を行い、完成次第、ホームページ上でも公表する予定である。なお、本年度からかねてより懸案であった、年報電子化のシステムが完成し、各担当者が直接Web入力することになった。しかし、入力時の不具合や不統一、理解不足などについて課題が残った。

FD活動については、「科学研究費補助金」申請を支援するための講習会を企画する際、参加者のニーズに即した講師や内容を検討し、多様な背景を持った教員が全員、申請できるような支援活動を行う。看護系新人助手に対するプリセプターシップについても、より効果的なサポートシステムを検討する。

授業評価アンケートについては、問題点を整理し、教員評価にも使用できるような多面的な授業評価システムを構築し、実施する。なお、授業改善については、全体としての底上げを図っていく。

1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、佐伯 圭一郎、粟屋 典子、甲斐 倫明、宮崎 文子、李 笑雨、藤内
美保、足立 暢久（事務局）

本委員会は法人化前の教育・実習小委員会と学生受入小委員会が合体し、委員会名を教育研究委員会と改めて本年度から発足した。本委員会では学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。1) 平成19年度の助産学選考に関しては、WGが中心となって、口頭試問（実技含む）による選考を行い、4月の臨時教育審議会で承認を得た。また、平成20年度から履修するダブルスクール（大学院修士）の学生について11月に選考を実施し、教育審議会で承認を得た。2) 本年度の国家試験対策に関しては、国試の補講は例年と同じく12月上旬に行い、模試については昨年よりも3回増やして国試直前まで実施した。3) 卒業研究に関しては、例年どおり2つのサポートグループを設置し、卒業研究論文集・卒業研究発表会要旨集の作成、卒業研究発表会のサポートと、次年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎Ⅰの講義のサポート（テキスト作成も含む）等の実務を行った。4) 看護実習（第1段階～第5段階）に関しては、実習全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。総合実習に関しては以下記述の総合実習WGによる活動によって更なる実習の充実を図った。4年次生を対象とした総合看護学は看護技術習得の総まとめとしての充実を図った。5) 来年度から導入予定の大分大学との遠隔授業の試行として、「アカデミック・スキル（調査法入門）」を後期より毎週水曜3限に13回にわたって試行した。19年度からは双方で遠隔講義を発信する。6) 単位互換に関しては、単位互換に関する規程案を作成した。来年度は学則別表（開講科目）の改訂を行い文科省に報告する。7) 4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定を初めとした企画を行い、全8回の講義を実施した。地域住民に対しては公開講義としたが、本年度から講習料を徴収したため、参加者は少なかった。8) 来年度から正式施行する進級試験に備え、WGがマークシートを取り入れた最終試行としての進級試験を12月19日に実施した。9) 研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、それぞれ1件、2件と6件を採択して大学の研究機関としての使命の推進を図った。10) 短期海外派遣研究員に関しては、例年どおり教員3名を米国大学に派遣し、教員の研究の活性化を図った。11) 平成18年度前期・後期の科目等履修生及び19年度の研究生の募集を行った。12) また、教育研究委員会が担当する平成18年度計画に関しては、計画に従って遂行し、ほぼ100%達成することができた。

1) 国家試験対策WG

構成員 宮崎 文子、赤司 千波、小西 清美、高波 利恵、玉置 奈保子、吉田 智子、一木
アサ子、定金 香里、小嶋 光明、高瀬 恵子、佐藤 俊美

平成17年度 of 国家試験合格率は看護師100%、保健師77.8%、助産師100%であり、保健師国家試験が全国平均を下回った。今年度は、完成年度から6年目にあたり、三職種ともに100%の合格率を目指すことを目標にかがけた。本格的な国試対策計画は9月から翌年2月の国試1週間前までとした。具体的には昨年度の反省を踏まえ、1) 直近の業者模試結果(保健師・助産師・看護師)を分析し、国試出題科目毎に学生の弱い内容(間違い箇所が多い項目)を抽出した。補講担当者に分析結果を報告し、弱点教科の補講内容を強化するよう依頼した。2) 今年度は昨年より模試を3回増やし実施した。これにより国試直前まで学生の実力を向上させることができた。3) 学内・業者模擬試験で評価基準に達しない学生に国試対策WG、責任者・副責任者が面接を行った。また、点数の悪い学生には卒論を受け持つ研究室責任者へ指導を促した。4) 毎回模試成績が悪い学生や模試を受けない学生には積極的に国試対策WG責任者が面接を行い、自己学習を強化するように促した。その結果、平成18年度の国試合格率は保健師100%（全国99%）、助産師100%（全国94.3%）、看護師97.1%（全国90.6%）と三職共に100%にはならなかったが、共に全国平均を大幅に上回った。来年度の改善点：三職共に合格率100%を目指すことである。

2) 総合実習WG

構成員 大賀 淳子、八代 利香、安部 恭子、福田 広美

本年度総合実習終了後に、学生レポート、教員意見、施設指導者意見を取りまとめ、看護系教員へフィードバックするとともに、次年度実習準備の参考にした。特に、次年度総合実習では履修学生数が大幅に増加することから、実習施設の整備に力を入れた。本年度の担当教員を介し、次年度実習受け入れの可否および受け入れ学生数の増加を依頼するとともに、あらたな実習施設の開拓を手がけた。その結果、14施設で受入学生数の増加が可能となり、新規2施設（合計42施設）を確保することができた。次年度実習にむけて、1～2月にかけて学生へのガイダンスおよびオリエンテーションを実施し、学生および教員の施設配置を行った。次年度も多くの新規教員を迎えるため、年度当初から早速開始される学生指導および施設との対応を新規教員がスムーズに実施できるよう、教員への支援を適切に行うことが課題である。

3) 実習関連WG

構成員 栗屋 典子、桜井 礼子、伊東 朋子、藤内 美保、小野 美喜、八代 利香、大賀 淳子、山下 早苗、木下 結加里、高瀬 恵子、(遠藤 千昌)

実習関連WGは、ほぼ月1回の定例会議を開催し活動を行った。主な活動としては、看護技術修得プログラム（第1段階（7月～9月）；4段階実習前の3年生を対象とした看護基本技術の実践能力を身に付けるための技術チェック、第2段階（10月～11月）；4年次生を対象に総合看護学、第3段階（2月～3月）；4年次生を対象に国家試験終了後から卒業式の間を利用した最終段階の看護技術チェック）を実施した。また、実習に関する事項について、実習ガイドブック、個人情報の取り扱いに関するガイドライン、事故対応マニュアル等の見直しを行うとともに、実習センター、及び各領域の実習施設の実習環境の整備等を行った。

4) 進級試験WG

構成員 小西 恵美子、佐伯 圭一郎、藤内 美保、吉田 成一、小野 美喜、岩崎 香子

1) 18年度活動目標

(1) 来年度の正式実施をふまえ、学生へのインフォメーションの内容・方法、配布資料、教員への出題要請の方法、試験や再試験の実施時期等を最終的に確認する。

(2) 出題問題は、看護のベースとなる人間の身体的、社会的および心理的な健康問題の基本的事項とする。

(3) 難易度の評価を行った問題をさらにプールする。

2) 計画達成状況

目標1：学生には、夏季休暇前から口頭・掲示により通知した。教員へは、メール、審議会、および個別コンタクトにより、早期に出題要請を行った。この際、出題上の留意点も具体的に提示した。来年度からの進級試験正式施行に備え、今年度はマークシートによる採点を取り入れ、トラブルがないことを確認した。以上、目標1は、ほぼよく達成できた。

目標2：得点60点未満の不合格者が多数あり、出題問題について検討する必要がある。また大学として、通常の授業を含め、学生の学習意欲を促す努力が必要と思われる。

目標3：難易度は、各問題の正答率を求める等により評価した。

5) 助産学選考WG

構成員 佐伯 圭一郎、宮崎 文子、吉留 厚子（12月まで）、林 猪都子、小西 清美（11月より）、遠藤 千晶（9月まで）、G. T. Shirley、高橋 敬

4月に、平成19年度に助産学実習の履修を許可されるものの選考作業を行い、教育研究審議会にて15名に許可が与えられた。また、平成20年度助産学実習履修許可者の選考方法を検討し、選考作業の準備を行った。

1-8 学生生活支援委員会

構成員 吉村 匠平、伊東 朋子、大賀 淳子、高橋 敬、林 猪都子、宮内 信治、原田 幸代（保健室）、坪崎 勝（教務学生G）

本委員会は学生の大学生生活を充実させるための環境を整備すること、何らかの困難を抱えている学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に、諸般の活動を展開している。委員会の分掌事項は、学生の健康管理（集団健康診断、個別相談、禁煙教育など）、学習相談（単位取得、進級）、休退学・復学相談、奨学金による経済支援、サークル・ボランティア活動支援、コンタクトグループの運営、スポーツ交流会の企画・運営、各種講演会の企画・運営、若葉祭における学生サポート、学生生活実態調査、交通安全指導（通学許可交付、事故対応など）、学年担任によるホームルーム、過年度学生支援、自治会・若葉祭支援、同窓会関連業務、コンソーシアム大分への委員派遣、部外者クレーム対応など多岐に渡っている。

本年度は、上記の活動に加え、いくつかの新しい試みを導入した。

- ・新入生宿泊研修 新入生および3年次編入学生を対象とした。
- ・オフィスアワー オフィスアワーに関する情報を集約し学内web上に掲載した。
- ・DV（ドメスティックバイオレンス）に関する講演会を実施した。
- ・各学年別に大学歌指導の機会を設けた。
- ・委員会Blogを立ち上げ、運用した。
- ・学生生活実態調査の結果を学生に公開した。
- ・全1年生を対象に個別面談を開催した。

次年度の新規事業として、健康診断時の抗体検査の実施、留学生支援、平成20年度に開催される障害者スポーツ大会へのボランティア派遣、学生の学業タスク管理業務などを予定している。次年度も、環境整備と個に応じたサポート提供を軸とした委員会運営を進める。また、学生がハラスメントなどにあった際の相談窓口が、本委員会であることについて、学生に周知徹底していく。

1-9 就職支援委員会

構成員 宮崎 文子、平野 瓦、工藤 節美、高野 政子、小西 清美、大賀 淳子、坪崎
勝、足立 暢久

平成18年度の就職支援活動の目標は、①求人情報の提供・就職先の開拓など就職を支援する委員会活動を強化する。②学生の就職活動に対しては、能力に応じた適材適所の職場選択を行う個別の相談・指導を行い、就職率100%を目指すこととした。具体的には、・県内施設就職率を50%以上とする（平成17年度実績46.3%）。・卒業生の在職する施設を積極的に訪問し、活動状況等のフォローを行う。・求人情報は随時、メールにより学生へ提供する。・就職ガイダンスを2回実施し、学生へ詳細な情報を提供する。・就職ガイダンスの招聘卒業生の人選は卒業年度や病院を広範囲にする。・学生の就職に関する教員の意識向上を各研究室レベルで推進する。・模擬面接（39名）の実施。・就職支援委員が全ての研究室を分担し、密にコミュニケーションをとり、必要に応じて個別支援をする等に力を入れた。その結果、就職・進学率（98.6%：1名国家試験不合格のため100%にならなかった）であった。来年度の改善点：大分県の就職率が39.4%で目標を下回ったことが挙げられる。

1-10 広報委員会

構成員 稲垣 敦、影山 隆之、赤司 千波、平野 亙、工藤 節美、伴 信彦、堀 潔己、高橋 賢一

1) アドミッションポリシー

入試委員会に学部および大学院のアドミッションポリシーの明文化を依頼し、学外Webに掲載した。

2) 第9回若葉祭

5月20日(日)、21日(日)に本学キャンパスで第9回若葉祭を開催し、2200名以上の参加を得た。教職員イベントの企画・調整、学生の指導を担当した。

3) オープンキャンパス

8月1日(火)にオープンキャンパスを開催し、生徒172名、保護者36名、教員等3名の参加を得た。企画・調整、広報、当日の運営を担当した。

4) チキリンばやし市民総おどり大会

8月4日(土)大分七夕まつりのチキリンばやし市民総おどり大会に、教職員及び学生42名で参加した。今年は姉妹校である韓国ソウル大学看護大学校から交換学生で来ていた学生と引率教員も参加し、交流を深めた。

5) 大学見学会

ミニオープンキャンパスを大学見学会と名称変更した。第1回(8/25)は11名、第2回(8/28)は10名の参加を得た。企画・広報、当日の大学紹介や施設案内を担当した。

6) 第1回地域ふれあい祭

県立大学活性化事業として県から補助を受け、また、第8回大分県民芸術祭の若者文化イベント開催経費の補助を受け、11月18日(土)に看護研究交流センターで「広げよう、地域の輪」というテーマで第1回地域ふれあい祭を開催した。企画・調整、広報、搬出・搬入、設営、当日の運営、後片付け、学生の指導等を担当した。

7) 大学案内ビデオ

大学PRの目的で、理念編、国際化編、施設・教育編の3種類(約各1分)からなる大学案内ビデオを作成した。企画及び制作を担当した。

8) 進学説明会

入試委員会と連携し、宮崎市(6/9)、山口市(6/15)、佐伯市(6/20)、日田市(7/12)、大分市(9/14)で開催された進学説明会に参加し、受験生と面接を行った。

9) 大学見学

大学見学の申込を受け、当日の大学紹介や施設案内を担当した：佐伯豊南高校(6/16)、竹田高校(8/2)、宇佐高校(10/4)、城南小学校ふれあい学級(10/26)、新町自治会(11/8)、豊後高田市民生委員(11/27)。

10) 模擬授業

模擬授業の申込を受け、講師依頼を担当した：竹田高校(林6/26)、大分西高校(小林11/8)、雄城台高校(桜井12/21)。

11) 写真展

若葉祭、地域ふれあい祭の写真展を開催した。撮影及び設営は高橋委員、財務グループ石井氏に依頼した。

12) 入試ポスター

入試委員会からの依頼で、入試ポスターを作成した。デザイン等を担当した。

13) メディアでの広報

OBS「かぼすタイム」で若葉祭が取り上げられ、TOS「ハロー大分」に学生が生出演して地域ふれあい祭の広報をし、TOS「ほっとはーと大分」で介護予防ボランティア研修会が放映された。総合人間学の広告を朝日新聞に掲載し、学生の出版についての記事を合同新聞に掲載した。リクルート進学ブック、Benesse「マイビジョンニュース」九州・沖縄県版等の雑誌に大学の広告に掲載した。

14) 広報用備品・消耗品の整備

掲示用ボード、祭用ハッピー、TAKIOソーラン用ハッピー、幟、記念品を揃えた。

次年度の課題

- 1) オープンキャンパスに在学生の参加を増やし、魅力的な企画を新設して参加者を増やす。
- 2) 大学イベントで研究成果を紹介するとともに、共同研究・事業を促進するための広報をする。
- 3) 地域ふれあい祭を大分市市街地で開催し、大学から離れた住民とも交流を深める。

- 4) 英文Web、英文パンフレットを全面改訂する。
- 5) 大学オリジナルグッズを作成して、大学広報に役立てる。
- 6) 学内における広報情報の流れを整備する。
- 7) 新たな広報メディアを開拓する。

1) 大学案内パンフレットWG

構成員 影山 隆之、小嶋 光明、高瀬 恵子（12月から）、玉置 奈保子、中原 基子（12月から）、三浦 始（5月まで）、山下 早苗（5月まで）、吉田 智子

前年度選定した制作業者と共に編集会議を多数回開き、卒業生への取材、学内撮影などを行って、2006年版の大学パンフレットを編集した。1月からは、2007年度版の制作に向けて業者と編集会議を開始した。

2) 英文パンフレットWG

構成員 G. T. Shirley、伊東 朋子、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ、福田 広美、八代 利香

英文パンフレットの作成を計画した。

3) 学外WebWG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、岡崎 寿子

学外Webサイトの作成（大学案内、入試・入学案内、イベント案内報告など）および管理・運営を行った。

4) 英文WebWG

構成員 G. T. Shirley、岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ、吉武 康栄

英文Webサイトの作成および管理・運営を行った。

1-11 国際交流委員会

構成員 G. T. Shirley、八代 利香、伊東 朋子、小野 順一、関根 剛、高野 政子、森清、李 笑雨（10月1日から）

国際交流委員会が平成18年度に行った活動は、以下のとおりである。

- 1) ソウル国立大学校看護大学から8名（学部学生5名、大学院生2名、教員1名）が平成18年7月30日から8月6日までの8日間、本学に滞在し、日本の医療制度、福祉制度、看護について理解を深めた。本学の学生及び教員がサポートグループとして交流に参加した。なお、本年度はソウル国立大学校看護大学から長期留学生の派遣がなかった。
- 2) 本学の大学院生1名を長期派遣学生（平成18年7月30日から8月27日まで1ヶ月）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。また、学部学生6名を短期派遣学生（平成18年8月20日から27日まで8日間）として同行教員2名と共に派遣した。滞在中、ソウル大学学生及び北京大学学生と共に学生フォーラムを開催した。
- 3) 「患者と向き合う看護を目指してーいま、看護職に求められるものー」をテーマに第8回看護国際フォーラムを大分県看護協会との共催で平成18年10月14日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。米国から1名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は215名であった。
- 4) 平成18年10月17日（火）に姉妹校である米国のケース・ウエスタン・リザーブ大学及びソウル国立大学校看護大学から教員が来学し、本学の教員と第3回国際会議としてナース・プラクティショナー（NP）に関する講義を行った。
- 5) 「大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会」を今年度は第4回国際会議として、「日本におけるNPの実現をめざして」をテーマに、韓国のカトリック大学医学部及びソウル国立大学校看護大学から講師を招聘し、平成19年3月17日（土）に開催した。

学生及び教職員の国際交流及び研究の質の向上を図るために、平成19年度に以下の事業を行う。

- 1) ソウル国立大学校看護大学から教員を招聘し、本学の教員とともに研究発表を行い、討議を行う。
- 2) 長期・短期学生派遣事業としてソウル国立大学校看護大学との学生交流の企画および運営を実施する。本年度は本学から短期6名（学部生）、長期2名（大学院生）を8月にそれぞれ1週間と1ヶ月間派遣し、教員2名が同行する。
- 3) ソウル国立大学校看護大学から7月に長期が院生、8月の中旬に短期が学部生と教授を招待し、日本の医療、福祉制度、看護について理解を深める。学生及び本学の教員がサポートグループとして交流に参加する。
- 4) 平成19年10月17-19日に開催されるソウル国立大学校看護大学の100周年記念国際学会に姉妹校として学長（招聘）の他教員5名以上を派遣する。
- 5) 平成19年10月21日（日）に第9回看護国際フォーラムを別府ビーコンプラザ国際会議場で開催する。参加者は約300名前後の規模で企画している。講師は韓国から1名、国内から2名を予定する。
- 6) NPの看護教育、看護教育制度等について国際会議を年2回開催する。

1-12 公開講座委員会

構成員 影山 隆之、小西 恵美子、G.T.Shirley、坪崎 勝、宮崎 文子、吉留 厚子、吉村 匠平

平成18年度は以下の活動を行った。

(1) 公開講座

一般市民を対象として“環境と健康”というテーマで、4回の公開講座（有料）を企画開催し、これに関する広報（新聞広告、県公報、市町村公報等）を行った。各回のテーマ（日程、講師）は、「健康とアレルギー」（10/5；市瀬）、「放射線と健康」（10/19；甲斐）、「骨の健康と生活」（11/2；岩崎）、「更年期の健康と生活・環境」（11/16；宮崎）で、会場は看護研究交流センターとした。新しい公開講座規程に基づき、受講料は1回1000円（4回通して申し込むと2800円）、65歳以上800円（4回通して申し込むと2300円）、高校生以下は無料とした。延べ参加者数は22人で、高校生の受講もあり、全回受講者1名に修了証を授与した。これらは公開講義と並んで、おおいた県民アカデミア大学の連携講座として登録した。公開講座の録画を図書館に配備し、学内で閲覧できるようにするとともに、当日の資料・教室風景等を大学Web上で公開した。

(2) 大学祭の無料公開講座等

若葉祭および地域ふれあい祭りにおいて、3種類の無料公開講座を企画開催した。各回のテーマ（日程、講師）は、「要介護にならぬうちに～お元気しゃんしゃん体操と快眠教室」（5/20、5/21の2回；稲垣、影山）、「多読教材を用いた英語学習法」（5/20、5/21の延べ4回；シャーリー、宮内、岡崎）、「こころの健康～中学生は学校で何を教わっているか」（11/18；影山）で、延べ参加者数は64人であった。また、地域ふれあい祭りにおいては、県知事をゲストに招いて学生と語り合うステージイベント「トークタイム：看護学生の明日と現在（いま）」を企画開催した。

(3) 公開講座のニーズ調査

大学周辺地区の自治会から協力を得て、大学に希望する公開講座のテーマ、開催曜日・時間帯、受講料などに関するニーズについての質問紙調査を行った。自治会の各班およびファクスを介して710通の回答を得た。要望の多いテーマは、生活習慣病予防、介護と介護予防、精神保健などであり、参加費は500円以下を希望する声が多かった。開催日程については、土日よりも平日の希望が多く、同じ曜日であれば午後より午前の希望が多かった。

(4) 大学Webページ

Webページ上に公開講座のページを設け、公開講座の予定や報告の掲示、大学に対する希望を伝えるためのメールアドレスの掲示、などの運用を始めた。本ページのURLは、http://www.oita-nhs.ac.jp/openlctr/open_c.htmである。

(5) 県民アカデミア大学講師派遣

大分県生涯学習センターから県民アカデミア大学インターネット講座に対して講師紹介の要請があり、教員2名（稲垣、岩崎）を紹介した。

(6) 教員調査

今後の公開講座運営の参考とするため、各教員が提供可能な公開講座のテーマに関する調査をイントラネットにより行った。

平成19年度の計画は以下の通りである。

(1) 公開講座

前年度の試行の結果、公開講座の平日夜間開講に対するニーズは大きくないことがわかったので、平日（または土曜）の午前中に大学キャンパスで開講することを次年度の目標とし、かつ大学周辺での希望調査に基づきテーマを検討する必要がある。また、公開講座のテーマに関する希望調査を、大学周辺自治会以外の調査フィールド（公民館利用者等）でも実施し、背景の異なる方々の要望の把握に努めることとする。

(2) 大学祭での無料公開講座

時間帯・場所の設定や広報方法を改善し、より多くの来場者が参加しやすいよう工夫する。

(3) その他

大学外とくに大分市以外の地域での出前講座など、より多様な公開講座のあり方について、検討を続ける。

1-13 図書委員会

構成員 高橋 敬、関根 剛、影山 隆之、小西 恵美子、小林 三津子、小西 清美、小野永子、牛島 聡子、中野 美佐子

委員会活動 図書委員会

よりよく、またより広く図書館を利用してもらうためには、図書館職員と教員が一体となって中期目標を実行することが大切である。

毎月1回の定例委員会を開催し、報告と議題を議事進行した。教育研究に役立つための選書が中心になるが、とくに学生の勉学や生活に参考になるような書籍の紹介を毎月1回教員に原稿を依頼し、HPに載せた。これは業務の中でも、よく目に触れる機会が多く、学生にも好評であった。

若葉際や地域ふれあい祭りの機会に、図書館紹介のポスターを掲示した。以下、委員会の進行状況を記載する。

- 1) 図書・雑誌の情報検索システムを効果的に利用するためのマニュアルを整備する（進行中）。検索のために新しくコンピュータ導入した。これによって、検索システムを効果的に利用できるようになった。
- 2) 幅広い教養を身に付けてもらうため、各種新書シリーズの購入をその都度検討し充実する（進行中）。
- 3) 図書返却期日を厳守するためのルールを設け、徹底する（進行中）。とくに、外部の者に対して再度督促し、徹底する。
- 4) 本学で開催された公開講座などを記録したビデオやDVDを貸出利用できるように整備している（進行中）。

中期目標に掲げた項目を1つ1つ実行するとともに、図書館を有意義に使用してもらうために広く広報にも力点をおく。

1-14 入試委員会

構成員 構成員は非公開としている。

本委員会では、平成18年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議した。入学試験については全学教職員の協力のもとすべて大過なく終了した。

年度計画にそって、入学試験のあり方の検討および高校訪問などによる広報を行っていく。

1-15 研究倫理・安全委員会

構成員 委員：伴 信彦、桜井 礼子、安部 眞佐子、関根 剛、藤内 美保、吉田 成一
学外委員：西 英久（大分大学）、二宮 孝富（大分大学）
事務局：戸高 晴寿（財務グループ）

当委員会では、本学の教員及び学生が行う研究について、倫理・安全面の審査を実施している。今年度は、延べ105件の研究計画について審査を行った。

また、今年度は研究計画書の様式を改定するとともに、申請者自身による基本情報のオンライン入力を取り入れることにより、審査事務を合理化した。さらに、研究者としての責務ならびに遵守すべき事項を明文化した「公立大学法人大分県立看護科学大学における研究の倫理・安全に関する指針」を整備し、2月より施行した。

1-16 情報ネットワーク委員会

構成員 佐伯 圭一郎、伊東 朋子、大賀 淳子、林 猪都子、八代 利香、吉田 成一、森 清（事務局）

情報ネットワークの実務を担当するWGを統括し、本学の情報ネットワークに関する諸問題を検討した。また、委員会としての検討はWGのリーダーを含む形で行われた。

具体的な検討としては、本学の情報セキュリティに関する原案の検討、在学生の学習や卒業生支援のためのシステムの構築に関する作業・検討などを行っている。

来年度に、1) 具体的な情報セキュリティのための部署別のガイドラインを整備する、2) 教職員のIT活用の実務能力の目標設定と評価・教育のための具体的な検討を行う、3) 本学として行われる活動に情報ネットワークとして更なる貢献を行う、ということ新たに開始する予定である。

1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満（リーダー）、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、サイボウズなど）を含めたインターネット・イントラネットの管理運営を行った。

2) WinユーザーサポートWG

構成員 中山 晃志（リーダー）、大賀 淳子、吉田 成一（教材作成室担当）、佐伯 圭一郎、森 清（経営企画グループ）

教職員用PC（Windows）および教材作成室（メディアセンターを含む）の管理（トラブル対応、ソフトウェアのバージョンアップなど）を行った。

3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明（リーダー）、伴 信彦

学内に設置してあるPC（Mac）に生じたトラブルの解決および最新のOSへのバージョンアップを行った。

4) 看護研究交流センターサポートWG

構成員 林 猪都子、八代 利香、佐伯圭一郎

看護研究交流センターの教員・学生用コンピュータ環境の保守管理を行った。

5) 看護メーリングリストWG

構成員 伊東 朋子、吉田 智子

大分県看護メーリングリストkango-mlの管理運営
本年度の新規加入登録者数は6名であった。

1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、李 笑雨、安部 眞佐子、稲垣 敦、桜井 礼子、藤内 美保、足立 暢久

(1) 現行の修士課程を2つのコースに分け、研究者教育者養成と実践者養成の2つのコースに分けることを検討した。(2) 博士課程の審査基準について検討した。(3) その他に、研究生および論文博士などについて検討し、制度化を行った。

修士課程の2つのコースの選抜方法やカリキュラムについて詳細な検討を行う必要がある。また、看護職以外の受験を促進するための方策について検討していく予定である。

1) 母性看護CNSWG

構成員 小西 清美、伴 信彦、大賀 淳子、工藤 節美、高野 政子

平成18年度専門看護師教育課程認定審査を受けるために、7月末日に申請書類を提出した。その審査結果、共通科目は可、専攻教育課程不可であった。次年度、再度申請予定。

2) 地域看護CNSWG

構成員 工藤 節美、桜井 礼子、赤司 千波、高野 政子、伴 信彦、八代 利香、足立 暢久

第1回WG会議を平成18年9月28日(木)に開催した。CNS教育分野は在宅看護とし、開講時期、申請時期等の確認と、それらに伴うWGの作業スケジュール、役割分担について検討した。なお本WGの具体的な取り組みについては、先に申請している母性看護CNSの審査結果を確認した上でスタートすることとした。

1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 桜井 礼子、林 猪都子、工藤 節美、佐伯 圭一郎、高野 政子、高橋 敬、高橋 賢一、伊藤 慎太郎、甲斐 倫明、草間 朋子（オブザーバー）

1. 地域貢献・地域交流事業に関すること

1) 看護職者を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

(1) 看護協会の事業への協力

- ・実習指導者講習会
- ・看護管理（ファーストレベル）
- ・看護力再開発カリキュラム
- ・看護研究
- ・訪問看護研修ステップⅠ
- ・訪問看護研修ステップⅡ呼吸管理
- ・リスクマネジメント

(2) 講師派遣依頼

- ・特別養護老人ホームの看護職の研修会 2名の講師派遣
- ・養護教諭の勉強会 1名の講師派遣

(3) 一般を対象とした学外での講演の講師派遣

- ・養護学校の教員対象の研修会の依頼が2件あり、延べ4名の講師派遣を行った。

2) 研究指導等

(1) 講師派遣

研究指導は施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師2名（人間科学講座から1名、看護系講座から1名）を派遣している。今年度は、当初8施設を予定したが、6施設に対して12名の講師が派遣された。また、施設からの要望により看護教育についても1名の講師が派遣された。

(2) 相談窓口開設

今年度から研究に関連して、統計的手法についての相談窓口を、看護研究交流センターで月1回開設することとした。7月からホームページに掲載、案内文を実習施設等に郵送するなどして広報を行った。今年度は2件の相談があり1件は継続した研究指導につなげた。名称を「統計・情報処理相談窓口」として、来年度以降も継続を予定している。

(3) アニュアルミーティングの公開

これまで非公開であった学内研究成果報告会を、今年度より一部（午後）公開とし、地域の看護職者等の参加をホームページ、メーリングリストで呼びかけた。その結果1名の参加者があった。

2. 国際協力・交流事業に関すること

1) JICAからの研修員の受入れ

(1) ウズベキスタン長期研修（看護教育コース） 4名

研修受け入れ期間：2006年9月14日（金）～12月15日（日）

(2) ウズベキスタン短期研修（管理者コース） 4名

研修受け入れ期間：2006年11月14日（火）～11月19日（日）

(3) ウズベキスタン通訳研修

研修受け入れ期間：2006年9月11日（月）～12月1日（金） 1名

2007年1月11日（木）～1月14日（日） 1名

2) その他の海外からの研修の受入れ

(1) 韓国 精神看護グループ13名 NPプロジェクト、精神看護学研究室と合同

研修日 12月15日（金） 13名

1月14日（日）～17日（水） 1名

3) 交流事業

(1) 地域ふれあい祭りのイベント 2006年11月18日（土）

「ウズベキスタン料理」の模擬店を企画、ウズベキ長期・短期研修員が参加した

(2) 日本看護科学学会（兵庫） 交流集会を企画

2006年12月2日（土）14時30分～16時30分

共同開催者として、石川県立看護大学、新潟大学、長野県看護大学、本学の4校で、「国際協力における人材育成」をテーマに、それぞれプレゼンを行い、その後会場の参加者とディスカッションを行った。

3. 継続教育事業に関すること

1) 卒業への研究支援・技術支援

第2回看護研究交流センターセミナーを7月22日（土）13時～16時、23講義室にて開催した。セミナーのテーマは「看護の質的研究のすすめ方」、講師は兵庫県立大学のグレッグ美鈴先生に依頼した。参加人数は、総数90名と盛況であった。

4. 知的財産・産官学連携事業に関すること

産学官交流集会に参加し情報を収集するとともに、産官学共同のためのe-seeds用教員プロフィールを作成し入力を依頼している。来年度は、これらの教員プロフィールをもとにパンフレットを作成（平成19年5月を目途に）、配布をしていく予定である。

5. 訪問看護 認定看護師コースの開設準備

2008年度の開設を目指し、2007年8月の申請を目途に準備を開始している。今後、人員の確保、カリキュラムの作成、実習施設の確保等が課題である。

研究指導の一環として、今年度より「統計・情報処理相談窓口」を開始し、2件の相談があった。今後、様々な機会を利用して相談窓口をアピールしていく必要があると考える。また、アニュアル・ミーティングの公開についても、広報する期間が短かったこともあり、来年度は自己評価委員会と早めに検討を行い広報に力を入れたいと考えている。

継続教育の一環として「看護研究交流センターセミナー」を開催したが、卒業生の参加が今年度も5名と少なかった。テーマの工夫を行うとともに、卒業生への広報について個別にアプローチするなどの方法を検討していきたい。

1) インターネットジャーナルWG

構成員 草間 朋子、甲斐 倫明、G.T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、定金 香里、高波 利恵

看護系では国内唯一の電子ジャーナルである「看護科学研究」は、よりレベルの高い国際的なジャーナルを目指すため、PubMed登録申請の準備を進めている。一方、学会大会等の各種イベントでの広報、チラシの作成、投稿規程や執筆要項の整備、編集委員会の準備と開催、第7巻第1号、第2号の審査・編集に関する実務が行われた。また、今年度は編集委員の変更があり、海外からも編集顧問を迎えた。インターネットジャーナル「看護科学研究」第7巻第1号は平成18年12月に刊行され、本学ホームページ上（http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/7_1.html）で公開されている。

1-19 衛生委員会

構成員 【1号委員】高橋 賢一【2号委員】角 匡幸【3号委員】小野 順一【4号委員】影山 隆之、坪崎 勝【オブザーバー】原田 幸代

5月に法人化後最初の衛生委員会を開催し、安全衛生管理規程及び苦情相談規程（苦情相談窓口設置）などを確認するとともに、定期健康診断等の年間計画を承認した。6月には定期健康診断に向け受診促進対策を協議するとともに、職員の健康維持等のための「健康相談窓口」を設置した。以降、定期健康診断の事後指導や休暇の取得促進などを行った。

苦情相談窓口及び健康相談窓口の周知を図るとともに、執務環境整備のため、職場巡視を徹底する必要がある。

2 学内行事の概要

2-1 学 年 暦

<i>前期</i>	<i>後期</i>
7 入学式 10 オリエンテーション 11 2～4年生次授業開始 11, 12 新入生オリエンテーション 13 1年次生授業開始 11～21 前期履修登録 12, 19 健康診断	2 後期授業開始 2～13 後期履修登録 14 看護国際フォーラム
<i>4 月</i>	<i>10 月</i>
15～ 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ (4年次生) 20, 21 若葉祭	18 地域ふれあい祭 19 特別選抜試験(推薦・社会人)
<i>5 月</i>	<i>11 月</i>
～16 地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ (4年次生) 12 前期後半授業開始 19～ 助産学実習(4年次生選択) 19 開学記念日(休講) 26～ 総合実習(4年次生)	～1 成人・老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3年次生) 4 後期後半授業開始 8 正午 卒業研究論文提出締切(4年次生) 11, 12 卒業研究発表会 23 冬季休業開始
<i>6 月</i>	<i>12 月</i>
～7 総合実習(4年次生) 11～19 初期体験実習(1年次生) 20 全学運動競技会 21 夏季休業開始	9 授業開始 9～23 基礎看護学実習(2年次生) 19 センター試験準備(1, 3, 4年次生休講) 20, 21 センター試験
<i>7 月</i>	<i>1 月</i>
1 オープンキャンパス	5～19 看護マスタ学実習(2年次生) 25 一般選抜試験(前期)および特別 選抜試験(私費外国人留学生)(休講) 下旬(予定) 看護師・保健師および助産師国家試験 28 後期授業終了
<i>8 月</i>	<i>2 月</i>
2 大学院(修士)入学試験 3 編入学, 大学院(博士)入学試験 6 授業開始 11～ 成人・老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3年次生) ～15 助産学実習(4年次生選択) 29 前期授業終了	1 春季休業開始 12 一般選抜試験(後期) 16 卒業式
<i>9 月</i>	<i>3 月</i>

2-2 オープンキャンパス

8月1日にオープンキャンパス実施（参加者211名：生徒172名、保護者36名、教員3名）、大学見学会を8月25日と8月28日に実施（高校2校、参加者約30名）、大学訪問者の対応（5件：小学校1校、自治会1件、市1件、高校2校、参加者180名）、高校出張講義2件を行った。

2-3 公開講座

一般市民を対象とする有料公開講座を全4回開催した。今年度のメインテーマは「環境と健康」で、初めての試みとして会場を看護研究交流センターに移し、夜間開講した。各回の題目（日程；講師）は、「健康とアレルギー」（10/5；市瀬）、「放射線と健康」（10/19；甲斐）、「骨の健康と生活」（11/2；岩崎）、「更年期の健康と生活・環境」（11/16；宮崎）で、おおいた県民アカデミア大学の連携講座としても登録された。新規程に基づき、受講料は1回1000円（4回通して申し込むと2800円）、65歳以上800円（同2300円）、高校生以下は無料とした。延べ参加者数は22名で、県内遠方からの受講者や高校生の受講者もみられた。全回受講者1名に修了証を授与した。

これとは別に、若葉祭で2つ、地域ふれあい祭りでも1つの無料公開講座を企画・開催した。各回のテーマ（日程；講師）は、「要介護にならぬうちに～お元気しゃんしゃん体操と快眠教室」（5/20、5/21の2回；稲垣、影山）、「多読教材を用いた英語学習法」（5/20、5/21の延べ4回；シャーリー、宮内、岡崎）、「こころの健康～中学生は学校で何を教わっているか」（11/18；影山）で、延べ参加者数は64名であった。

2-4 第8回看護国際フォーラム

平成18年10月14日（土）に第8回看護国際フォーラムを別府ビーコンプラザ国際会議場で開催し、参加者は215名であった。

第8回看護国際フォーラム

テーマ

「患者と向き合う看護を目指してーいま、看護職に求められるものー」
Client-Oriented Nursing: What is Required for the Profession

開会挨拶 草間 朋子（大分県立看護科学大学 学長）

1) 看護職の自律性と看護の実践のあり方

Carol Lynn Savrin, RN, ND, CPNP, APRN, BC, FNP

Director MSN Program,

Associate Professor, Frances Payne Bolton School of Nursing,

Case Western Reserve University

2) 韓国の保健医療制度改革と看護職のあり方

Euisook Kim, RN, MPH, MS, DNSc

Professor, Yonsei University College of Nursing

Member, Board of Directors, International Council of Nurses

3) 医療制度、介護保険制度等の改革と看護職の役割

田村 やよひ（国立看護大学校長、前厚生労働省 医政局看護課長）

総合討論 司会 赤司 千波（大分県立看護科学大学 助教授）

玉井 保子（大分県立病院）

閉会挨拶 古賀 和枝（大分県看護協会 会長）

2-5 ソウル大／看科大研究交流会（インターナショナル・ミーティング）

例年行われてきた「大分看科大/ソウル大学研究交流会」を拡大し、「高度実践看護師（NP）開発プロジェクト 第4回国際会議」を本学にて開催した。本年度は、本学におけるNP開発プロジェクトの取り組みを地域社会に知ってもらうために、大分県医師会と大分県看護協会の後援で開催し、学外からも参加者を募った。韓国から3名の講師を招き、「日本におけるNPの実現をめざして」をテーマに、情報交換と討論が行われた。

テーマ 「日本におけるNPの実現をめざして」

日時 平成19年3月17日（土）13時～17時

開会挨拶 半澤 一邦（大分県医師会 常任理事）

草間 朋子（大分県立看護科学大学 学長）

1) 「韓国の地域医療における医師と看護師のコラボレーション」

Young Seon Hong, MD カトリック大学校 医科大学 内科学科 教授

2) 「韓国における専門看護師制度の始まりと法制化」

Mi Soon Song, RN, PhD ソウル大学校 看護大学 教授

3) 「米国におけるナースプラクティショナーの活動」

Eun Young Suh, RN, PhD ソウル大学校 看護大学 教授

総論討論 司会 桜井 礼子（大分県立看護科学大学 教授）

赤司 千波（大分県立看護科学大学 助教授）

閉会挨拶 古賀 和枝（大分県看護協会 会長）

総合司会 八代 利香（大分県立看護科学大学 講師）

2-6 第2回看護研究交流センターセミナー

卒業生の継続教育の一環として、第2回のセミナーを下記の通り開催した。また、実習施設等の看護職へも参加を呼びかけた。参加者は92名で、内訳は卒業生5名、看護職43名、教員26名、大学院生6名、学部生12名であった。

テーマ 「看護の質的研究」

日時 平成18年7月22日（土）13時～16時

場所 大分県立看護科学大学 23講義室

演題 「看護の質的研究のすすめ方」

講師 グレグ 美鈴（神戸市看護大学 教授）

司会 高野 政子（大分県立看護科学大学 助教授）

工藤 節美（大分県立看護科学大学 助教授）

2-7 NPプロジェクト

構成員：林 猪都子、八代 利香、赤司 千波、工藤 節美、桜井 礼子、G. T. Shirley、高野 政子、藤内 美保、宮内 信治、甲斐 倫明、栗屋 典子、草間 朋子

無医地区で活躍できる高度な実践力を身につけた看護職（Nurse Practitioner：高度実践看護師）の養成を目指した教育プログラムを開発するために、NPプロジェクトは月1回ミーティングを行っている。今年度は、平成20年度入学生の募集に向けて共通科目と専門科目（小児、老年）の教育カリキュラムの第1次ドラフトを作成した。また、平成18年10月17日（火）に第3回 International Meeting（学内）と平成19年3月17日（土）に第4回 International Meetingを大分県医師会、大分県看護協会との共催で開催し、47名の参加者があった。そして、教員のスキルアップのために米国のケースウェスタンリザーブ大学、ペース大学に6名の教員を一ヶ月間ずつ派遣し海外研修を行った。

1) 第3回 International Meeting

テーマ：Curriculum Development: Nurse Practitioner Education in the MSN Program

開会の挨拶 草間 朋子

- 1) 林 猪都子 Nurse Practitioners in Canada :Introduction to McMaster University, Problem-Based learning
- 2) 藤内 美保 Nurse Practitioners in Canada :The Progress of Nurse Practitioners in Ontario, The Nurse Practitioner Program at McMaster University
- 3) 工藤 節美 Certified Nurse Specialist & Certified Expert Nurse in Japan
- 4) 桜井 礼子 The Reform of Medical Service system and Long-Term Care System
- 5) Misoon Song APN Certification Exam in Korea
- 6) Carol Savrin Pediatric Nurse Practitioner: Curriculum Development

討論・質疑応答

司会 八代 利香、林 猪都子

2) 第4回 International Meeting (2-5 参照)

3) 教員の海外研修

藤内 美保	平成18年9月1日(金)～10月7日(土)	ケースウェスタンリザーブ大学
林 猪都子	平成18年9月1日(金)～10月7日(土)	ケースウェスタンリザーブ大学
高野 政子	平成19年2月17日(土)～3月14日(水)	ペース大学、ケースウェスタンリザーブ大学
赤司 千波	平成19年2月17日(土)～3月14日(水)	ペース大学、ケースウェスタンリザーブ大学
桜井 礼子	平成19年2月24日(土)～3月14日(水)	ケースウェスタンリザーブ大学
工藤 節美	平成19年2月24日(土)～3月24日(土)	ケースウェスタンリザーブ大学

2-8 姉妹校学生交流

第7回 ソウル大学との学生交流

1) ソウル大学からの学生受入

受入期間 平成18年7月30日(日)～8月6日(日)

受入学生 大学院生2名, 学部生5名, 教員1名

Dr. Jeong-Eun Kim, Assistant Professor (Nursing Informatics); In-Sil Lee, Graduate Student (Nursing Informatics); Sang-Lim Lee, Graduate Student (Nursing Management); Jeong-Hwa Seo, Senior; Gee-Su Yang, Junior; Eun-Joo Kim, Junior; Hyun-Sung Noh, Junior; Na-Young Jung, Junior

教員、学生ともに実習センターに宿泊し、日本での看護実践の現場を見学した。主な訪問施設は、大分県立病院、湯布院厚生年金病院、佐伯保健所、佐伯市保健センター、生野助産院、百華苑(老健施設)である。教員によるウェルカムパーティー、学生によるカフェテリアでのお好み焼きパーティー、阿蘇観光、大分七夕まつりのチキリンばやし市民総おどり大会への参加などを通して、教員間、学生間の交流が図られた。

2) 本学からソウル大学への学生派遣

平成18年度のソウル大学派遣メンバーは、学部生15名、大学院生1名の応募者の中から、長期派遣員として大学院生1名、短期派遣員として学部生6名を選抜した。

長期派遣期間 平成18年7月30日(日)～8月27日(日)

派遣学生氏名 安倍 富美(大学院博士課程前期1年次生)

短期派遣期間 平成18年8月20日(日)～8月27日(日)

引率教員 宮崎 文子、宮内 信治

派遣学生 秋山 奈央(1年)、栗本 茂樹、首藤 良恵、橋本 絵理(2年)、小坂 朋子、工藤 寛子(3年)

長期派遣学生は、母性看護学・助産学の分野を中心課題として、主にソウル大学病院の分娩室および産科病棟・産後ケアセンター、助産院にて実習を行った。実際の現場に触れることにより、看護というものが文化背景や経済状況と密接につながっているということ、また、日韓の助産師の概念が違うことなどを体感し、認識できたようである。

今回の学生交流は、ソウル大学からの企画提案により、大分県立看護科学大学、北京大学看護学部、ソウル大学看護学部の3校合同学生交流となった。8月21日(月)午前には、学生フォーラムがソウル大学看護学部にて開催され、「Health Delivery and Nursing Education in Korea, Japan and China」のテーマの下、各大学から参加した学生が英語にて発表を行い、質疑応答など活発な議論が展開された。それぞれの国における看護教育養成制度の違いが垣間見える、興味深いフォーラムであった。

韓国での主な訪問先は、Jung-gu Community Health Center、ソウル大学病院、ソウル大学病院附属博物館、ソウル大学冠岳(Kwanak)キャンパス、ソウル大学本部国際交流センター、ソウル大学附属民族博物館、Green Hill Nursing Home(老人ホーム)、アサンメディカルセンターである。また、景勝地昌徳宮、漢河遊覧、ナミ村・春川などを訪れての観光や、韓国の伝統的な遊び「ユノリ」を楽しむなど、韓国の文化に触れるとともに、ソウル大学、北京大学の学生たちとの交流を深めた。

2-9 第9回若葉祭（大学祭）

3年次生に2年次生が加わった若葉祭実行委員会（委員長 後藤 成人）が企画・運営の中心となり、学生・教職員全員の参加により開催された。ステージイベントや模擬店のほか、恒例の健康チェック、学生と教職員のコラボイベント等、盛りだくさんの企画に、関係者の暖かいご支援をえて、成功裡に無事幕を閉じた。

日 時 平成18年5月20日（土）～21日（日）

テーマ 「春風」

参加者 2,200人

ステージイベント

実行委員プレゼンツ、腕ずもう、カラオケ、絵心DON、Mr&Msナースコンテスト、イントロどん、若手お笑いライブ（麒麟）、なまり亭、抽選会、ほか

室内イベント

健康・体力チェック、栄養相談、お茶会、体育館で遊ぼう、お元気しゃんしゃん体操（公開講座）、快眠教室（公開講座）、小児の救急法、高齢者疑似体験、沐浴・妊婦体験、救急救命法体験、入浴剤をつくろう、ほか

2-10 第1回地域ふれあい祭

2年次生の実行委員（委員長 布施 芳史）が企画・運営の中心となり、「大学（学生）と地域住民の交流を図りながら大学の特色、学生活動、地域貢献など大学をより身近なものとして理解してもらおう」ことを目的として、第1回地域ふれあい祭を開催した。学生と広瀬知事とのトークタイム、ウズベキスタン共和国の研修員によるウズベクダンス等のステージイベント、高齢者体験や公開講座等の室内イベント、各種模擬店を行った。当日は、雨にも関わらず多くの人々の参加を得、地域住民との交流を深める貴重な機会となった。

日 時 平成18年11月18日（土）10:00～16:00

テーマ 広げよう、地域の輪

場 所 大分県立看護科学大学 看護研究交流センター

参加者 地域住民 約350人

学生、教職員全員

ステージイベント

コスモス保育園の園児によるダンス、めじろんダンス、ウズベクダンス、本物のナースは誰だ、学生と知事とのトークタイム「看護大生の明日と現在」、TAKIOソーラン、骨・筋の詩、大分トリニータトークTime、ゲーム以心伝心、高倉みどりミニコンサート、南大分中学校合唱部「ア・カペラの世界」、鐵心太鼓、お楽しみ抽選会

室内イベント

妊婦体験、高齢者体験、腎臓の不思議、たばこについてのあれこれ、神経難病患者の看護体験、公開講座「心の健康～中学生は学校で何を教わっているのか」、健康・体力チェック、お茶会、進学相談、図書館紹介、大学紹介ビデオ上映

2-11 アニュアル・ミーティング

平成18年度アニュアルミーティングを平成19年3月7日に開催し、プロジェクト研究1題、先端研究2題、奨励研究5題、一般演題9題の発表と意見交換が行われた。本年度からアニュアルミーティングの一部を教職員以外にも公開した。

開催場所 21講義室

開催時間 10時40分～16時40分

司会 小西 清美、吉田 成一

1. 開会挨拶 自己評価委員会 委員長 小林 三津子

2. 演題

- 1) 小規模事業所労働者に対するヘルスプロモーションの支援のあり方 高波 利恵
- 2) 日本における「よい看護師」の変遷：過去100年の教科書の分析から 小野 美喜
- 3) 国勢調査における市区町村別男女別各歳人口の補間 中山 晃志
- 4) 乱数で作製したデジタル画像のイメージ解析と生体反応定数 高橋 敬
- 5) 生体内搔痒物質によるアトピー性皮膚炎モデルマウスの作成 定金 香里
- 6) NICUに勤務する看護師のストレス分析 中原 基子
- 7) 学生からみた「よい臨地実習指導教員」とは 玉置 奈保子
- 8) 養護学校における医療的ケアにかかわる看護師の役割 大島 操
- 9) 本学における助産師教育720時間の功罪～助産学実習を振り返って～ 高瀬 恵子
- 10) 英語多読導入とその効果：英語学習に対する学習者の意識の変化 宮内 信治
- 11) 被害者支援団体の研修システム作りについて 関根 剛
- 12) マウス白血病特異的遺伝子変異の高感度検出法の確立 伴 信彦
- 13) 培養細胞を用いた黄砂のアレルギー増悪作用機序の検討 吉田 成一
- 14) 急性期病院におけるプリセプター&サポートシステム導入3年後の評価
小林 三津子
- 15) Development of a Web Site for Depressive Symptom Management 李 笑雨
- 16) 簡易質問紙DSSは職場健診での「うつ状態」
スクリーニングに役立つか？：二次面接結果との比較 影山 隆之
- 17) 高齢者のQOLを向上させるための健康づくり：
介護予防事業のあり方及びそれに関わる人材育成に関する検討 稲垣 敦

3. 講評と閉会挨拶

大分県立看護科学大学 学長 草間 朋子

3 教育活動

3-1 平成18年度入学者選抜状況

1) 概要：選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員			
			一般選抜		特別選抜	
			前期日程	後期日程	推 薦	社会人
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	注) 若干名

注) 社会人の募集人員「若干名」は推薦の30人に含める。

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県内(率)	男(率)
特 別	推 薦	68	68	30	2.3	30	30(100.0)	2(6.7)
	社会人	7	7	2	3.5	1	1(100.0)	0(0)
	計	75	75	32	2.3	31	31(100.0)	2(6.5)
一 般	前 期	263	245	43	5.7	38	14(36.8)	6(15.8)
	後 期	334	186	14	3.3	13	1(7.7)	1(7.7)
	計	597	431	57	7.6	51	15(29.4)	7(13.7)
合 計		672	506	89	5.7	82	46(56.1)	9(11.0)

試験教科等

区 分		教 科	試験期日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成17年 11月20日(日)	平成17年 11月1日(火)～11月8日(火)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成18年 2月25日(土)	平成18年 1月30日(月)～2月7日(火)
	後 期	総合問題、面接	平成18年 3月12日(日)	

2) 特別選抜試験：

- ①推薦選抜：大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。
- ②社会人選抜：社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。
- 年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

- 3) 一般選抜試験：平成 18 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。
- なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日程	教科名	科目名	教科科目数	
前期日程	国語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4教科5科目	
	数学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、『数学Ⅱ・数学B』から1科目を選択		
	理科	『物理Ⅰ』、『化学Ⅰ』から1科目を選択 『生物Ⅰ』（必須）		
	外国語	『英語』（必須）		
後期日程	国語	『国語』（近代以降の文章）	4教科4科目	
	地理歴史 公民	『世界史A』、『世界史B』、『日本史A』 『日本史B』、『地理A』、『地理B』、 『現代社会』、『倫理』、『政治・経済』 から1科目を選択		3教科 3科目 を選択
	数学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』 『数学Ⅱ・数学B』から1科目を選択		
	理科	『物理Ⅰ』、『化学Ⅰ』、『生物Ⅰ』 から1科目を選択		
	外国語	『英語』（必須）		

3-2 平成18年度3年次編入学試験状況

概要：就業看護職者等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

募集人員

学部	学科	募集人員
看護学部	看護学科	10人

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
大学	2	2	2	-	2	2(100.0)	0
短期大学	3	3	0	-	-	-	-
専修学校	27	26	3	-	3	2(66.7)	0
合計	32	31	5	6.2	5	4(80.0)	0

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成17年9月4日(日)	平成17年 8月1日(月)～8月8日(月)

3-3 平成18年度大学院博士課程(前期)入学試験状況

概要：看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程(前期)	看護学専攻	6名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内 (率)	男 (率)
修士課程	10	10	6	1.7	6	6 (100.0)	0

試験科目等

試験科目	試 験 期 日	出 願 期 間
英 語 総合問題 面 接	平成 17 年 9 月 3 日 (土)	平成 17 年 8 月 1 日 (月) ~ 8 月 8 日 (月)

3-4 平成 18 年度大学院博士課程 (後期) 入学試験状況

概 要：より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程 (後期)	看護学専攻	2 名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内 (率)	男 (率)
博士課程	3	3	1	3.0	1	0	0

試験科目等

試験科目	試 験 期 日	出 願 期 間
総合問題 面 接	平成 17 年 9 月 4 日 (日)	平成 17 年 8 月 1 日 (月) ~ 8 月 8 日 (月)

1 教育方針

生体科学では、正常な身体の構造とその機能を系統的に理解してもらうために、あえてテキストの順番を再編成し、一般生理学の基本からスタートした。シラバスには各章の内容をキーワードで表現し、学習の指針となるように配慮した。

骨格系や筋肉、循環、神経系等は小冊子を作成し、常に参照できるように取りはからった。またそれぞれの作詞を行い覚えやすくアレンジした。この小冊子は解剖実習見学のときに役立った。

前年度と同じく「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を学生に復読本として購入させた。復習するのに効果があり、また進級試験の基盤的な認識が得られるように十分に指導した。

骨格や筋系のプラスチックモデルを繰り返し活用し、できるだけ具体的なイメージを持てるようにした。それと並行して、パワーポイントによるビジュアルな講義（分子と細胞生物学の動画）を通して、できるだけ具体的な知識を会得してもらうことを目指した。

頭蓋骨に関してはヒト、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの違いを立体折り紙で勉強してもらった。かなり興味をもってくれたようで、レポートした学生も散見された。

本年度もできる限り講義に実験を導入した。1) 赤血球の溶血現象を目で観察してもらい、それを説明してもらった。2) フィブリノーゲン溶液にトロンピンを添加し、凝固するまでの時間を腕時計で測らせた。短時間で凝固（ゲル化）するようすに感嘆の声があった。3) メビウス環を用いて、裏と面の不思議さを体験させ、シートから形成される、身体の構造の整合性を理解してもらった。できるだけ講義には、自然科学に対する興味や疑問がで易くなるように、また理解が深まるように努力した。

今年度も「シャトルカード」を導入し、講義の度ごとに情報交換した。講義内容や、効果の程度、興味をもてるかどうかを把握するのに十分に役立った。「レポートの書き方」を購入させ、レポートの書き方の指導を行った。

2 教育活動の現状と課題

前年度に比べ、今年度は比較的良く勉強する態度がみられた。「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を購入させたこと、また少ない回数の実験、パワーポイントに挿入した動画によるビジュアルな教育が役立った。

大きな課題は何と言っても時間的な制約であってテキストの内容（解剖と生理学）からすると、前期だけで理解させるには、厳しさが伴う。できるだけハイスループットで、集中型の講義が望まれるが、一方、勉学には時間的なゆとりも大切は要素であると思う。

構造機能論の基盤は骨格系である。骨格系に対する興味と理解が他の理解の導火線になるため、本年度も骨格系や筋系の名称を覚えやすくするために、変え歌と楽曲を披露した結果、興味を引き出す効果があった。

一般に、生体科学の理解に必要なリテラシーをしっかりと把握させるため、1) 骨格系や筋肉系を中心とした構造機能小冊子の充実を計る。2) 全講義内容をキーワード表として完成する。この表は関連看護系の講義と比較検討できるために、自ら勉学しながら記入できるように配慮してあるので大いに活用してほしい。

次年度はこれまでの成果を踏まえ、引き続きさまざまなことを考え実行し、その結果、勉学の効果がでることを期待したい。とくに多少の時間を割いても、問題を解かせる訓練をすること、そして、上の学年に繋がるような指導をすることが重要である。総じて興味や好奇心をいかに引き出すかが、自律的に勉学するためには特に大切であると感じている。

3 科目の教育活動

1) 生体構造機能論

1年次 前期

高橋 敬、安部 眞佐子、岩崎 香子

生体構造機能論では解剖・生理学のテキストを基盤として、60兆の細胞が織りなす身体の機能がいかに構造に依存して成り立っているのかを、そのヒエラルキー、ホメオスターシス、内部環境中心に講義した。内容を十分に理解してもらうために、生命維持にはどれだけの分子や細胞が関係しているのかを力説した。時間数が足りない点は補講などで埋め合わせたいが、できるだけコンパクトにした上で、いかに効果をあげるのかが今後の課題である。そのためにはある程度の自律した学習ができるように指導をし、好奇心や興味を引き出すことが大切である。

2) 生体代謝論

1年次 前期後半

安部 眞佐子

生体代謝の基本であるタンパク質、酵素、核酸および細胞や組織レベルの講義を行い、さらに食物と健康の意義を理解するために、栄養とその看護ケア、食事バランスなどに言及した。食育と健康づくりを通して、自分の体に入ってくる食物の科学を知ってもらうことを目的とした。

3) 生体科学演習

1年次 後期後半

高橋 敬、安部 眞佐子、岩崎 香子

栄養生化学の講義の補足（エネルギー代謝、食事摂取基準、栄養状態の評価など）と栄養ケア・マネジメントによるモニタリングを行った。カラーリングブックを利用した解剖と生理学に関する演習では、キーワード表を配付し、また問題集を与えて解かした。カラーリングブックは、解剖学と生理学を含むもので、真剣に取り組めばとても良い学習になる。出席とレポートと試験で評価した。

4) 生体科学特論

4年次 前期後半

安部 眞佐子

ヒトゲノムの構造と遺伝子情報発現の基礎を把握してもらい、個人差の原因となる遺伝子多型現象を講義した。また栄養学的諸要素、すなわち体重調節、脂質やミネラル代謝についても言及した。その他、臨床的に重要な疾患別食事療法として、消化器疾患、腎臓疾患、血液疾患について各論的な講義を行った。

5) 生体構造機能特論

2年次 前期前半

高橋 敬、岩崎 香子

基本的でアップデートなものをピックアップし、解説した。クローン生物学、老化の生物学、および再生医学については力点をおいた。クローンをよく理解することは、現代医療と生物の多様性を理解する上にもっとも基本的である。そのために、エクセルを用いてシミュレーションでできることを体験させた。出席とレポートで評価したが、とくにクローン人間や臓器移植には興味をもったようである。またこの講義では医療に関わること（人工受精、クローン人間、老化問題）を具体的に触れ、自らが考える習慣がつくように配慮した。

6) 健康科学実験 I 組織学

高橋 敬、岩崎 香子

目で見て手で触れ、観察することがもっとも基本的なものなので、ヒトやラットの組織切片を光学顕微鏡を使い、1人3種類のプレパラートを観察させ、スケッチさせた。さらに光学画像のもつ意味と、アナログ画像、デジタル画像との区別を解説した。実験を通して、小さな構造の大きな機能的な役割に感嘆し、少しでも興味をもち、理解が深まるように留意した。

7) 健康科学実験 II 血液生化学

安部 眞佐子

血糖値を自己血糖測定器を使って測定した。また、ラットの血清中のグルコースをグルコースオキシダーゼ法で測定した。さらに、ラット血清中のGOT、GPTを測定し、臓器中の活性も調べた。

4 卒業研究

- ・ 脂肪細胞の分化に伴う細胞接着性の変化
- ・ 細胞はランダム歩行するのか？
- ・ グルコーストランスポーターの発現に伴う油滴形成とウロキナーゼ(uPA)の関与
- ・ 摂食・嚥下訓練における看護師と言語聴覚士の連携について
- ・ 妊娠初期における妊婦の体重コントロールと食についての意識調査

3-5-2 生体反応学研究室

1 教育方針

生体反応学研究室では看護の基礎科学教育の一貫として、身体の基本的なメカニズム、体の変調、病態、生体内に侵入する微生物、薬物の作用等を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。生体のメカニズムや外的・内的要因に対する生体反応、各種疾病の病態を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらが2年次～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

2 教育活動の現状と課題

本研究室では生体反応論、生体反応学演習、病態特論、微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。これらの科目は1～2学年で学ぶが、学生の病気を学ぶこと意識・関心が低いためか、疾病についての理解度が低く、2～4年の実習において看護実践に結びつけられていないのが現状である。現在、看護実践を行ううえで疾病・病態を十分に理解しておくことの重要性を認識できるように、より看護の視点から講義を進めている。教育上の工夫として、生体反応学演習では、1年次後期後半～2年次前期前半にかけて行う看護疾病病態論の講義に繋げるために、病理学各論（系統別疾患）の講義を行い、看護を行う基礎となる疾病病態を理解させるのに努めた。これが実り、現在、学生が病気に興味を抱くようになり、学生自ら「びょうけん」なるサークルを立ち上げようとしている。

3 科目の教育活動

1) 生体反応論

1年次 後期

市瀬 孝道

病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い教科書（病態をカラーで図示説明されたもので、整理ノートが付いたもの）を用い、また、教科書では足りない部分をプリントとして補い講義を進めた。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

2) 生体反応学演習

1年次 後期後半

市瀬 孝道

生体反応学演習では病理学各論の講義を行い、病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患。

3) 生体微生物反応論

1年次 後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、を理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、抗生物質。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

来年度は講義内容の整理を行い、現行より少ない講義回数で行うことを決定した。

4) 感染免疫学

2年次 前期前半

吉田 成一

一年次後期に行われた生体微生物反応論をもとに、病原微生物に対する生体の防御反応について理解させることを目標に講義を行った。また、免疫学の最新の知見も併せて講義した。学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。

5) 生体薬物反応論

2年次 前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。また、重要項目は小テストにより再認識し、基礎知識の習熟を目指した。内容が多岐に渡るため、補講を行うことで対応した。また、他の科目で重複する内容を削除することで効率よい講義になるよう努めた。しかし、学習項目が多く、消化できない部分もあると思われ、来年度以降は講義回数を1.5倍とすることを決定した。

6) 病態特論

4年次 前期

市瀬 孝道

本講義は、今迄の教科書中心で病態を理解してきたものを、実際に病変臓器に触れて、病気を肉眼、顕微鏡観察することによって病気をより深く理解させることを目的に行っている。本年度は悪性中皮腫（アスベスト）、気管支喘息、悪性リンパ腫、肝癌の症例を取り上げて、病気経過中の臨床データや病理解剖所見を照らし合わせながらホルマリン固定された病変臓器と他の全ての臓器の肉眼観察を行った。更に、これらの病理組織標本の観察も行った。臨床データや全ての臓器の肉眼、病理組織標本観察によって病変部臓器のみでなく病態の全体像を把握させた

7) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

ラット静脈血およびマウス腹腔洗滌液を用い、貧血・感染症に関わる以下の検査を行った。

(1) ヘマトクリット値測定、(2) CRP検査、(3) 赤・白血球数測定、(4) 血球形態観察。学生全員が理解し容易に実施できるよう、各検査の意義・原理・手技について図、写真、見本試料を用いて説明した。血球の形態観察では、血球の見本をスケッチするのではなく、血球塗抹標本からその特徴を学生自身が捉え、好酸球、リンパ球等の血球を見つけ出すようにした。さらにこれらの検査結果から、貧血の赤血球恒数を算出し、貧血の診断を行う考察を行った。

7) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

7) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段として実験動物として用いられているラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。工夫した点としては、スムーズに解剖が進行するように、デモンストレーション時に解剖法を十分に説明し、また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較理解させた。

4 卒業研究

- ・アスベストによる肺の炎症とサイトカイン産生
- ・環境化学物質がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響について
- ・ナノカーボン粒子の胎仔期暴露が出生仔の雄性生殖機能に及ぼす影響
- ・キノコと柑橘果皮抽出物はアレルギー反応を抑制する
- ・細胞培養系における炎症性サイトカイン産生量を指標とした有害微粒子の影響評価

3-5-3 健康運動学研究室

1 教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体験して感じ、ヒト・人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年、臨地において運動処方や運動療法、運動指導が盛んになり、看護職にも運動の理解と指導能力が要求される機会が増えて来たため、それに応えられる知識および実践能力を身につけることを目指している。自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために運動習慣を身につけることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることは、将来、自分の健康管理に役立つだけでなく、これによっではじめて他者（たとえば、患者、地域住民）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育ができるようになって考えている。また、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、科学自体については教育されていない。大学では科学教育が重要であるため、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方などを学ぶ機会を取り入れている。

2 教育活動の現状と課題

本年度から、「体育1」は単に体を動かす体育実技から脱却し、生体機能を生理学的に学ぶことにも重点をおき、科目名を「身体運動科学」と変更した。「体育2」は現在および将来の健康・体力の維持・増進を指向して「健康運動」に変更した。また、「運動処方特論」は対象とする疾患や障害を広げ、科目名を「運動療法特論」に変更した。

女性の場合、大学時代は既に体力が低下する時期である。また、一人暮らしになるなど、ライフスタイルが変わる学生も多い。さらに、大学に入ると体育の時間も減り、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加が著しい。そこで、1年次には年度始めと終わりに体力測定を実施し、1年間の自分の体力や身体組成の変化を自分で調べることにより、自身の身体状況を自覚させた。そして、身体運動科学では、この身体状況が変化する理由を生理学的に講義し、理論とその実際を感じさせるよう試みた。一方、健康運動では、種々のニュースポーツを体験させ、体を動かす楽しさを体験させ、福祉レクリエーションについて考えさせている。2年次の健康運動論では、健康や体力と運動の関係を解説し、健康運動学演習では、日常生活を記録したり、日常生活の問題点を洗い出し、改善策を立てさせている。3年次の運動療法特論では、運動による疾病の予防や治療についてより専門的に解説し、4年次の運動指導特論では、種々の人々を対象とした運動やレクリエーションを体験させ、指導のポイントを教授した。大学院修士課程の健康増進科学特論でも、種々のME機器を用いた健康測定や評価を体験し、レポートにまとめさせた。以上のように、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、体験から指導へ、経験から理論へ、過去から未来へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れで、体験と科学的知見に基づいた教育を進めるよう努力する。

3 科目の教育活動

1) 身体運動科学（体育I）

1年次

吉武 康栄

単純に体を動かすのではなく、自分の身体機能を論理的に理解した上で動作を起こす、また他者に対して運動の重要性を論理的に説明し実践できる、ということをも目的とし講義と実技を組み合わせ授業を進めた。具体的には、エネルギー供給系→効果的なダイエット法→実践、神経・筋→ストレッチによる柔軟性向上、筋力トレーニングによる筋肥大の仕組み→実践、という具合に、できるだけ系統立てて授業を行うよう努めた。

2) 健康運動（体育II）

1年次

稲垣 敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションを実施し、運動量の確保にも十分に配慮した。一方で、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、レクリエーションの高齢者や障害者における重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

来年度は、各自の体力測定の結果を教材として有効利用するように努める。

3) 健康運動論

2年次 前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

来年度は、話し方を変え、学生とのコミュニケーションも増やして、ダイナミックな授業にするよう努力する。

4) 健康運動学演習

2年次 後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、筋力・パワー、平衡性、エネルギー消費量等の測定実習も行った。

選択科目であるが、例年、受講生が多いので、実習の効率を高めて一人当たりの実習時間を増やすよう努力する。

5) 運動療法特論（運動処方特論）

3年次 後期後半

稲垣 敦

概論では、運動処方についても講義し、各論では運動処方にとどめず、広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が89名と多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

来年度は自分のための運動処方箋・運動メニューの作成とその実施を取り入れる予定である。

6) 運動指導特論

4年次 前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子

精神障害者の運動表現療法、妊婦体操、子供のレクリエーション、高齢者のレクリエーション、ヨガ、肩こり・腰痛体操、介護予防運動、ネイチャーゲームなどの指導法について講義し、実習した。

今後も看護職に役に立つ内容を吟味し、相応しい運動を取り入れてゆく。

7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、レポートを一人で作成できるように説明を加えたレポート用紙を準備した。運動指導を想定して、指導者として注意すべき点を含めて説明した。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

7) 健康科学実験 X 心電図の成り立ちと心拍変動解析

吉武 康栄

看護の現場でも頻繁に接することが多い心電図測定を行った。まず、心電図の成り立ちについて電気生理学的視点から理解できるよう講義を行った。続いて、学生全員が電極を装着し、自身の心電図波形をリアルタイムで確認した。さらに、生活習慣病外来で用いられることが多い心拍変動による自律神経活動評価を行った。

最終的には2年後の卒業論文作成を念頭に置き、できるだけ論理的な文章が構築できるよう講義を行い、この実験内容や結果についてレポートを記述させた。

4 卒業研究

- ・ 学童期における運動習慣の有無が心臓自律神経活動動態に及ぼす影響
- ・ 岩盤浴がエネルギー代謝に及ぼす影響
- ・ 温泉ウォーキング時のエネルギー代謝

3-5-4 人間関係学研究室

1 教育方針

人に関する深い理解を基盤として、人の喜びや苦しみを分かち合える豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 認識装置としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得（「人のこころの仕組み」）、2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得（「人間関係学」）、3) 人間関係の形成方法についての理解（「コミュニケーション論」）、4) 対人援助技術の習得（「行動療法論」「人間関係学演習」「心理アセスメント論」）、5) 看護と関わる心理学的知識についての理解（「人間関係学」「行動療法論」「心理アセスメント論」）、6) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ（非常勤担当科目）（「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「人間と社会」「法学入門」「経済学入門」「大分の歴史と文化」「文化人類学入門」）。

講義にあたっては、個々の心理現象を看護実践と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

2 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標、人のこころの基本的な知識の習得、集団・個人との人間関係の理解、対人援助技術の理解、についてはこれまで同様である。本研究室の課題としては、授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータを教育活動の改善へと結びつけること、他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を進めること、の二点である。

3 科目の教育活動

1) 人のこころの仕組み

1年次 前期

吉村 匠平

認識装置としての人の機能の特徴、2年前期「人間行動論」の理解に必要な学習心理学の知識、人の発達のプロセス等について、小実験・VTR視聴などを併用し講義を進めた。昨年来の課題である、授業時間の厳守、パワーポイントファイルを用いた講義内容の復習については、十分に達成することができた。しかしながら、防衛機制の講義中の位置づけについては依然として曖昧なままであった。次年度以降の改善点としたい。

2) コミュニケーション論

1年次 前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に、3回のグループエクササイズ、手話、行動観察の方法とまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。昨年度からプロセスレコードの解説と作成の体験を導入している本科目の教育目標は、従来と同様、看護実践において必要不可欠なコミュニケーションの基礎を理解し身につけることにある。具体的には、相手の発信している情報に気づくこと、受け取った情報を自分がどのように理解しているのかを知る(自己を振り返る)、相手に対して情報を発信すること。そして、コミュニケーションは情報の受信-理解-発信(フィードバック)の繰り返しから成立していることを体験的に理解することである。また、改善点については、(1)グループエクササイズを1回の体験とせず体験を深めるために、従来は口頭で解説していた内容を、文書資料として配付し読ませる方法を継続した。エクササイズと理解(資料熟読)によって講義にメリハリが生まれる効果は今年においても有効であったと思われ、継続していく。(2)今年から、宿泊オリエンテーションにおいて、グループエクササイズを導入したので、仲間作りの要素は宿泊オリエンテーション中心に実施したので、余裕のある時間をとることができた。(3)行動観察については、十分な観察計画をたてられないグループも散見されるようになってきたように感じられる。そのため、今後は、より具体的な観察計画を事前に示した上で、「実践する」ことをメインに行わせる必要があると考えられる。

3) 人間関係学

1年次 後期

吉村 匠平

心理学における「性格」理解のあり方として、客観的理解を目指す「実体論」と人間関係の中での理解を目指す「関係論」について説明した。また、ケアを必要としている人との関係を作る上で援助職者に必要とされる基本的な態度として、ロジャースの3条件を取り上げた。知識の暗記に留まらず、知識の運用ができるようにするため、心理テスト体験、客観形式の問題演習、VTRを用いたケース検討を行った。

4) カウンセリング論

2年次 前期

関根 剛、吉村 匠平

講義前半を吉村、後半を関根が担当した。講義前半では発達心理学領域を取り上げた。乳幼児期の言語発達、身体運動機能の発達のアウトライン、発達障がい（ダウン症、ADHD、自閉症、障がい観、反応性愛着障がい）について講義した。発達障がいに関しては、障がい像の個人差が大きいことを繰り返し確認しながら、必要最低限な障がいの特徴を知識として完全に覚えることを求めた。後半は、代表的なカウンセリング理論を中心に解説を行うと共に、看護師が家族へのアプローチを行うことを具体的に知ってもらうために、臨床の看護師を招いて話を聞く機会を引き続き設けた。今年からは、養護教諭のための内容として、不登校、非行児童生徒への対応方法、犯罪や災害被害者への危機介入などについての内容を取り入れた。

5) 人間行動論

2年次 前期前半

関根 剛

今年の講義も、昨年とほぼ同様の展開であった。すなわち、学習心理学の原理を応用して人の行動を変化させるための考え方の基礎と技法について7回にわたり解説した。その際には、他人の行動に影響を与える上での倫理についての第1回目の講義を必ず受講することを条件とした。行動分析学・学習心理学の観点から、人間の行動理解および効果的な行動変容の技法について学び、行動療法的なアプローチについて基本的理解をもつことを教育目標としている。他の心理療法やコミュニケーション的な人間理解とは異なり、徹底した科学的視点からの人間行動理解を行うので、理解を積み上げる必要がある。そのため、講義においても、例題を設けながら理解を進めているスタイルをとった。昨年の改善点の結果、講義内容に認知行動療法を組み込むことで、近年のうつ病への対応や自分自身の行動変容について学習させることができた。対応する患者の幅が広がっていくことを考え、生活習慣の変容とうつ病などへの対応など、対象を明確にして、スキルを説明していくことを、来年は検討したい。

6) 人間関係学演習

2年次 後期前半

関根 剛

カウンセリングスキルを身につけるためのロールプレイを中心に8回の演習を実施した。展開は、昨年通り、ロールプレイにあたっては、毎回異なる想定状況を複数作成して実施した。想定状況は健康問題、日常的な人間関係、不快な出来事のほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など、多彩なものを用意している。ロールプレイは、教室や演習室に分かれ、互いの声で邪魔をしないような環境とし、最初は8名グループ、次に4人グループでロールプレイを行い、教員2名が各グループを回りながら、応対に対して助言指導を行っていった。昨年度同様、クライアント役に電話相談等のボランティアを行っている方の協力を得て、学外の方とロールプレイを行ない、今年は、2回のべ14名のボランティアの協力を得た。学生の感想などからは、日常、接する事が少ない外部の方とのロールプレイは、新鮮で有意義であったとの回答が多かった。

また、昨年に引き続き、カウンセリングスキルの獲得をより確実なものとするために、ロールプレイ内容をテープレコーダーに録音をして、その中の適当なものを逐語レポートとして随時、提出するように求めた。提出されたレポートは、応答に対して具体的に添削を行って返却をした。また、レポートは採点の上で返却をしており、よりよい評価を受けたい者は何回でも再提出をしてよいとするシステムも昨年と同様に継続した。78人の受講生に対して、214通のやり取りがあり、再提出を利用した者がのべ30名ほどいた。

改善点としては、(1) 授業目標の達成度評価として第2、第3段階実習の成果を参考にする点については進んでおらず、課題として検討したい。(2) テープレコーダー利用については、2人に1台となりレポート作成にも余裕をもたせることができた。(3) 本年度は、患者役のボランティアの日程と人数を増やすことができた。かつ、相談についての基礎技能を持っているボランティアをお願いしたため、より効果的なロールプレイとすることができた。(4) 学生がばらばらの部屋でロールプレイを行うことの弊害については、来年度から時間枠の変更が可能となったため、全体にロールプレイの指示とコメントをすることが可能となった。(5) これに対応して、広い場所でのロールプレイの録音となると他者の声が大きくなりすぎる可能性があるため、ヘッドセットを購入して、鮮明な録音が可能となるように機器を準備した。

7) 心理アセスメント

2年次 後期前半

吉村 匠平

自分自身を対象として様々な視点からアセスメントを行い、その結果を他者の前でプレゼンテーション(自己開示)させた。課題内容は、自分で選択した絵本の読み聞かせ、標準化された心理テストを自分自身に実施・解釈し、それをプレゼンテーションする、自分自身についてのアンケートを自作し、それを実施・集計・解釈・プレゼンテーションする、の3つである。多くの受講者が「発表準備が大変だった」と回答する反面、「自分を振り返る機会になった」「看護教育という視点から考えて意味のある活動だった」とも回答していた。シラバス上で「事前の準備、自己開示」が要求されることを明記していたためか、初回のオリエンテーションの受講者が20名、実際の受講者が10名であった。次年度以降の課題として、講義内容を事前に周知し、受講者の拡大を目指したい。

4 卒業研究

- ・不快臭が作業能率に与える影響
- ・看護系大学における「デス・エデュケーション」の実態 -シラバスを用いて-
- ・患者から見た病室形態の相違 -個室・個室的多床室・従来型多床室の比較から-
- ・学生が臨床実習中に体験した否定的感情の分析 -カード式投影法を用いて-

1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学全般に関係する講義および演習を担当している。環境有害因子の健康影響・リスクとその予防となるリスク管理について基本的な事項と考え方を中心に講義を行った。また、放射線の医療利用や健康影響・安全に関する講義と健康科学実験、およびMEの原理や安全に関する講義も担当した。これらは、看護系大学の看護の基盤教育としては他の大学では行われていない科目であるが、将来、保健・医療に関わる者が基礎として学ぶべき基本的な知識として身につくように配慮した講義・演習を行った。

2 教育活動の現状と課題

学生は基本的に環境問題への関心が高い。しかし、一方で看護を学ぶこととの関係が理解できないために、講義への関心も低くなりがちである。この点を配慮して、看護職を目指す学生が環境保健や放射線などの問題をなぜ理解しなければならないかを教える努力をしている。例えば、講義の冒頭に新聞で話題となっている社会的問題を紹介し、看護職の社会的役割として期待されていることを話すようにしている。学生の看護のイメージが病める人へのケアであることから、ヘルスプロモーションや健康管理といったことも看護職の仕事であることを理解させることで環境保健や放射線の講義へのモチベーションがあがると考えられる。講義終了後には講義の感想を書かせ、次の講義への課題とするようにしている。

3 科目の教育活動

1) 環境保健学概論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

毎回、講義内容をまとめたハンドアウトあるいはスライドのコピーを配布し、環境保健学のキーワードがわかるように配慮した。多くの専門用語がでてきて理解しにくいという指摘を受けて、できるだけ基本的考え方と基本概念を中心に講義では話すようにした。とくに健康影響としてはがんとそのリスクに焦点をあてた。講義の内容は次の通りである。(1) 環境問題の歴史、(2) 大気汚染・水質汚濁と健康、(3) 地球環境問題、(4) 健康・環境影響と環境リスク論、(5) リスクアセスメントと環境基準、(6) 環境疫学、(7) 人における発がん、(8) がんの生物学、(9) 環境化学物質による発がん、(10) がん以外の健康影響、(11) 化学物質の安全性試験、(12) 環境リスク対策、(13) 環境リスク心理学、(14) リスクコミュニケーション、(15) 試験とその解説

2) MEの原理と安全管理

1年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、梅木 正純 (学外講師)

医療機器の原理と機能について学び、医療における役割と安全性のための基本的事項を理解する。とくに、安全性については電気の基礎から安全管理についてまでをカバーしている。生命維持に関するME機器の臨床での現状を理解してもらうために、学外講師(臨床工学技士)を招き、臨床におけるMEの安全管理の重要性を認識させる工夫をしている。講義の内容は次の通りである。(1) 医療機器の概要、(2) 電磁気に関する基礎知識、(3) X線診断装置-CTの原理、(4) 超音波診断装置およびMRI、(5) 生命維持に関係するME機器の原理、(6) 生命維持に関係するME機器の臨床、(7) ME機器の安全管理、(8) 試験とその解説

3) 生活環境論

2年次 前期前半

伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境と廃棄物についての基本的事項を解説し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健のあり方を論じた。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE問題、温熱環境と気圧、上水道と下水道、騒音・振動・悪臭、室内汚染。授業評価の結果は概ね良好であったが、ポイントがわかりにくいという声があったため、以後はその日の講義内容のまとめを最後に示すように改善した。

4) 放射線健康科学

2年次 後期前半

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線の健康影響とその安全管理のあり方を理解させるために、放射線の物理、生物、医学まで広汎な知識をコンパクトに要点を講義した。多くの学生から、健康科学実験(放射線)とこの講義を通して、放射線の健康影響について理解できたと評価を受けている。講義内容は次の通りである。(1) 放射線影響と放射線防護の歴史、(2) 放射線とは何か、(3) 放射性同位元素と放射能、(4) 身近な放射線・放射線源、(5) 放射線と物質との相互作用、(6) 放射線の線量、(7) 放射線の生体応答-DNA損傷と突然変異、(8) 放射線の生体応答-染色体異常と細胞死、(9) 放射線の健康影響(確定的影響)、(10) 放射線の健康影響(確率的影響)、(11) 放射線リスクの評価とその不確かさ、(12) 安全の考え方と放射線防護基準、(13) 患者のための放射線防護、(14) UV・電磁界の健康影響、(15) 試験とその解説

5) 環境保健学演習

2年次 後期後半

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3つの課題を与え、その課題をレポートにまとめるための作業を教員が支援するやり方で演習を行った。課題は、コンピュータを利用した計算が中心で、エクセル計算やグラフ作成などを通して統計的な考え方を理解させるように配慮している。環境保健の定量的側面の理解を促進するための演習となるように配慮した。課題は次の通りである。(1) メダカの死亡数分布によるデータのバラツキを調べるシミュレーション、(2) 化学物質の毒性試験から得られる環境基準値のもつ不確かさと実験データのバラツキ、(3) 生命表を用いて平均余命の計算

6) 環境リスク論

3年次 後期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。講義内容は次の通りである。環境リスク論とは、食品安全とリスク、環境ホルモンのリスク、鳥インフルエンザのリスク、地球温暖化のリスク、化学物質の発がんリスク、生態リスク。

7) 環境倫理学

4年次 前期後半

甲斐 倫明

環境倫理は生命倫理に比べて学生の関心が低い。そのために、生殖医療などの現代の生命倫理に関する事例をあげながら生命倫理の考え方を理解させることを講義の中で行った。このようにして環境倫理の考え方の特徴が生命倫理と対比的に理解させることで興味深く学べるように配慮した。講義の内容は次の通りである。(1) 環境倫理学とは、(2) 現代の環境問題と倫理、(3) 人間中心主義と生命中心主義、(4) 自然の生存権の問題、(5) 世代間倫理の問題、(6) 地球全体主義

8) 健康科学実験 VI 放射線

小嶋 光明

本実習では、日常生活で被ばくしているバックグラウンド放射線と、医療の現場で一般的に用いられている診療用X線装置の散乱線を定量的に測定し、その存在と量を理解した。さらに、本実習を通して放射線防護のあり方について学んだ。

8) 健康科学実験 VII 空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

本実験では、私たちの生活に欠かすことのできない空気と水に注目した簡易な測定を通して、環境の質について考えさせる。水質汚染については、水道水、生活排水、河川水という水の流れを考え、それぞれの水質を調べる。室内空気汚染については、室内の化学物質の濃度が機械測定で低くても測定可能な人間の嗅覚を用いて室内空気の汚染の程度を測定する。本実験から私たちの生活環境の質に対する関心を高め考えることができた。

8) 健康科学実験 VIII 染色体異常

伴 信彦

正常染色体の標本と、放射線によって誘発した異常染色体の標本を顕鏡し、染色体の構造的異常について学んだ。また、ダウン症候群の核型分析と慢性骨髄性白血病細胞の標本写真の観察を通して、疾病と染色体異常の関係について考察した。

4 卒業研究

- ・マンモグラフィによる乳癌検診のリスクベネフィット分析
- ・BRCA1/2遺伝子突然変異による放射線誘発乳癌リスクの増加に関する理論的検討
- ・CT colonographyを用いた大腸癌検診導入を想定したリスクベネフィット分析
- ・胎児被ばくに起因する小児がんの増加を報告したオックスフォード調査の不確かさ分析
- ・マウス造血細胞の分化に伴う放射線誘発染色体異常の感受性変化に関する検討
- ・放射線誘発細胞形態変化の発生過程における中心体複製異常の寄与の検討

3-5-6 健康情報科学研究室

1 教育方針

保健統計・疫学、情報処理の領域を学習することにより、健康に関する情報収集・判断・発信といった科学的根拠に基づいた看護に必須の能力の修得をねらいとしている。特に、コンピュータおよびネットワークの活用は、当研究室の担当科目に限らず、本学における学修のツール、看護職としての基本的スキルとして必須のものであり、実践的な能力を獲得できるよう配慮している。

必修科目では保健師・看護師として必要十分な能力水準を目標とし、基本的な内容を単に知識として覚えるのではなく、理解して身につけるよう指導している。選択科目ではさらに高度なテーマについて取り扱い、学生の将来の目標にあわせた高度な情報処理能力の養成を目指している。

2 教育活動の現状と課題

インターネットの活用を中心とした情報処理のスキルについて、学生の基礎技術は向上しているが、ITC技術以前の基礎的能力である言語的能力、数学的能力、論理的な判断力については、どちらからといえば低下傾向にある。この点をふまえた講義資料や演習の課題設定などを行い、健康情報処理演習においては3名の教員で40名強の学生にきめ細かい対応を心がけている。

本年は、健康情報処理演習の開講を前期に前倒しにすること実施し、他の科目の学習において情報処理能力を活用できることを目指したが、初期体験実習の情報収集、プレゼンテーションなどについて特に効果を感じることができた。しかし、保健統計や統計学など必修科目が1年次に完了するカリキュラムにおいて、実際に学んだことがどのように役立つのかを実感できるようにつとめなければ、3～4年次の演習・実習でこれらの能力が必要となるときまでに、学習の効果が薄れてしまう傾向に歯止めをかけることが困難であるという点については、学生の保健統計・疫学領域に関する関心の評価をみても、いまだ不十分と評価している。

単なる暗記ではなく、応用する力を高めるための具体的な場面を想定した例題をさらに活用して、学生に当該領域の意義を理解できるようにさらに配慮していきたい。また4年次の選択科目において、これまでの学習の復習と総まとめをコンパクトに組み込んで、総仕上げとしたい。

3 科目の教育活動

1) 健康情報学

1年次 前期

佐伯 圭一郎

人口統計、疾病情報や保健情報など、様々な健康情報に関して、情報の発生源から、評価の方法までを体系的に学習した。単に様々な統計指標を理解するだけでなく、それらの数値から情報を読みとり、思考する能力を養った。ここで学んだ内容がどのように看護実践の場面で活用されるのか、という点を1年生に理解させるために、1年次の後期科目も含んだ保健統計・疫学、情報処理の全体の流れを初回に講義し、全体の実例を適宜提示している。基本的な内容に重点を絞り、基礎の理解を十分にし、まずは保健統計を読みとれるという点について具体的な例を多用しながら講義を進めている。

2) 生物統計学

1年次 後期

佐伯 圭一郎、中山 晃志

基本的な統計学の知識を実際の調査・研究の場面と関連づけながら、情報収集と分析の技法について学んだ。特に、統計的な方法論の考え方に重点を置き、統計情報の適切な解釈能力を高めることを目指した。数式は最小限にとどめ、演習もパソコンでソフトウェアによる統計処理を行い、結果を解釈することを中心としている。

基本的な事項の反復を十分に行い、保健師国家試験の出題範囲をカバーするとともに、2年次の各論を取り扱う選択科目との連続性を考慮している。

3) 健康情報処理演習

1年次 前期後半・後期

佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための知識と技術を学んだ。また、インターネットをコミュニケーションや情報収集に役立てる技法を習得した。内容は、ネットワークの利用（WWW、メール）、ワードプロセッサ、ホームページ作成、表計算、プレゼンテーション、統計データの分析、医療における情報システムに関する講義である。

基本的なコンピュータ操作に戸惑う学生はみられないが、演習において具体的な課題達成においては、情報処理の技能に比べて、取り扱う情報への理解が不十分というアンバランスが問題となる面もあり、演習時の個別のチェック・指導を強化していきたい。来年度へ向けては、ワンスルーの演習だけでなく、課題提出や小レポートなどを組み合わせて、いっそうの学習の定着をはかりたい。

4) 応用情報処理学

2年次 前期後半

佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

選択科目ではあるが、実質的にはほぼすべての学生が受講している。必修科目である生物統計学および健康情報処理演習との連続性を高め、生物統計学各論と統計解析の演習を行っている。具体的な看護・医療領域の具体的な例題を提示して、一部高度なトピックも含み、8回中2回の統計ソフトウェアを利用する演習と講義を連携させて、生物統計学の実践能力の向上をはかっている。

統計学の各論の例題として、看護分野に近い具体的例題を扱っているが、2年次ではまだ専門領域のデータ自体にも理解が不十分な面があり、演習課題の設定にはさらに検討を加えたい。また、講義資料は電子化して配布しているが、実際に学生が必要性を実感する4年次に利用が容易となるように、体系的な冊子としてまとめたい。

5) 実務情報処理学

4年次 前期後半

佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

健康情報処理演習で学んだ情報処理能力を看護婦・保健婦の実務の場を想定した具体的事例を通じて、さらに高度なものへと高めることを目標としている。

今年度も、プレゼンテーションや印刷物のデザインについて、外部から商業デザイナーの講師を招き、演習と講評という形式の内容も組み込み、比較的少数の履修者である点をいかして教育的効果を高めることができたと考える。

4 卒業研究

- ・大分県の人工妊娠中絶実施率はなぜ高いのか
- ・筋萎縮性側索硬化症における24時間心電図を用いた自律神経機能評価の試み
- ・入院患者の看護師に対する「遠慮」の分析
- ・若年女性の喫煙率の経年変化と背景に関する研究

3-5-7 言語学研究室

1 教育方針

言語活動の四技能 (Speaking, Listening, Reading, Writing) をバランスよく伸ばすことを目指す。将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くように、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませる。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施する。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施する。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカーの教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習する。1年生の講義の内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年の講義の内容は、看護英語である。各話題3-4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。よって、教室での活動をもとにいかに関教室外での学習を継続させることができるか、すなわち学生への英語学習の動機付け、学習意欲の維持、学習活動の継続をいかに実現していくか、さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な英語学習へのきっかけ作りをいかに構築していくか、といったことが課題である。昨年に引き続き本年度も、コンピューターを用いたウェブ学習システム (CALLシステム) によるTOEIC対策のための英語学習と、学習期間前後のTOEIC IPを導入・実施した。今回は、学習期間を前期と後期の2回設定した。今年から1年生の前期必修科目講義にCALLシステムをとり入れ、システム導入の一環として、1年次生全員にTOEIC IP試験を受験させた。受講した学生は熱心に取り組み、結果として学生の学習成果に向上が見られた。英語多読については、内容の紹介と普及を図るため、若葉祭とオープンキャンパスにて公開講座を実施した。若葉祭については5月20日 (土)、21日 (日) 両日、午前・午後それぞれにて2セッションずつ合計4回、オープンキャンパスでは8月1日 (火) 午前・午後にて1セッションずつ合計2回、実際に多読要教材を来訪者に公開し、英語多読を体験してもらった。11月18日 (日) に行われた地域ふれあい祭では、言語学研究室の教育活動を紹介するパネルを作成し、看護研究交流センターに展示した。

3 科目の教育活動

1) 英語I-A1

1年次 前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読については、食料、環境、科学などをテーマとして、個別に具体的な内容の英文テキストに取り組んだ。日常生活を営む上では気がつかないが、実は自分自身にとって非常に身近でかつ深刻な問題に意識を向けることは大切である。そうした重要な主題も比較的平易な英文で表現できることを、英文テキストの暗唱をすることにより体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均137,000語。最も多く読んだ学生の語数は224,000語。

2) 英語I-A2

1年次 後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。万病の元凶のひとつに高血圧が上げられる。血圧の定義付け、血圧に関係のある医療専門用語をはじめ、高血圧の原因とそれによって起こる症状、さらには予防や治療に関する知識まで、高血圧というひとつの症状に特化して英文テキストに取り組んだ。一課の文章全体をパラグラフごとに暗唱することで、英文テキストの構成の特徴が体感できたと考える。多読による総読書量は通年で一人平均172,000語。最も多く読んだ学生の語数は317,000語。

3) 英語I-B1

1年次 前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

4) 英語I-B2

1年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

5) 英語II-A1

2年次 前期

宮内 信治

講読内容として、人間の精神活動の中核である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。音声・音韻的な視点から、英語の個々の音や単語ではなく、その総体としての英文の音の流れに着目し、その流れの中で自然に発生する音の変化に焦点を当てた。また、英文を読む際の音韻的特徴について、その音の流れを視覚的に捉えることができるような演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。音の英語らしさを具体的に捉えることに新鮮味を感じたようである。多読による総読書量は、一年次からの通算で前期終了時一人平均223,000語。最も多く読んだ学生の語数は751,000語。

6) 英語II-A2

2年次 後期

宮内 信治

講読においては、自らの辛かった体験について「書く」ことによる病氣治癒の知見や、ヒトゲノム計画の発展とそれに伴う問題についての英文テキストに取り組んだ。また、ナイチンゲールが自らの看護観を述べた英文にも触れた。英語のイントネーションに特化した表記方法の特徴や意味について理解した後、その表記法を用いた英文テキストを繰り返し音読み音の流れを確認した。暗唱課題により、学生自らが英語らしい音の流れを再現できるようになった。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均253,000語。最も多く読んだ学生の語数は785,000語。

7) 英語II-B1

2年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

8) 英語II-B2

2年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

9) 英語III-A

3年次 前期

Gerald T. Shirley、宮内 信治

(Speaking, Listening) 日常会話で用いる基本的英語の訓練を継続する。クラス全体を数グループに分け、それぞれのグループの中でひとつのテーマを決めて互いに話させる。

(講読) 医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させた。

原則として講読と会話を前半と後半に分けてどちらも受講できるようにした。今後はこの科目を自由選択科目として設定することが望まれる。

10) 英語III-B

3年次 前期

Gerald T. Shirley、宮内 信治

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on nursing topics were used in class to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

4 卒業研究

- ・小児看護における家族とのコミュニケーションの実態調査：看護師の認識
- ・手話通訳者の視点からみた聴覚障害者に対する医療機関側の対応の実態
- ・臨床看護師・看護学生の沈黙に対する意識調査と分析
- ・看護学生を対象としたアロマセラピーのストレス軽減効果の分析

3-5-8 基礎看護学研究室

1 教育方針

看護学の導入部分として、看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに、援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。具体的な教育目標と該当する科目は（1）看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動を理解する（「看護学入門」）、（2）看護情報とは何か、看護と情報科学や情報システムとの関連を理解する（「看護情報学概論」）、（3）日常生活の援助技術及び医療に伴う看護技術の基礎を理解する（「生活援助論」）、（4）個人、家族、地域社会のヘルスニーズを満たすための方法論である看護過程について理解する（「臨床看護総論」）、（5）看護の対象を総合的に把握し、健康問題を明らかにするまでの過程を理解する（「基礎看護学演習」）、（6）入院患者に接しながら、看護の対象の生活環境や心身の状態をふまえ、日常生活の援助の方法を理解する（「基礎看護学実習」）、（7）遺伝学の基礎及び看護者として遺伝病や遺伝子診断に関わる問題解決能力を習得する（「看護と遺伝」）等である。

講義・演習・実習を行うにあたっては、上記科目の学習進度にそって具体的な看護実践に関連づけたり、一人ひとりの学生の理解度や興味・関心について考慮しながら教授している。

2 教育活動の現状と課題

自らの看護に対する興味や関心を高め、看護を展開する場合の基本的な援助技術を修得することに重点をおいている。また、1・2年次での生活援助論では、3・4年次に実施している看護技術修得プログラムについて説明し、その導入としての動機づけも行っている。昨年度の課題であった、看護学実習室での演習指導に関する担当教員によるばらつきについては、事前打ち合わせやデモンストレーションの確認を十分に行い、演習終了後には毎回、簡単なアンケートを実施し、指摘された事項については改善に努めた。また、基礎看護学演習ではグループワークを行っているため、個々の学生の習得状況にかなり差があったことが問題であったが、今年度は、段階的にグループの人数を増やすことで（小グループ、中グループ、大グループ）、全員の参加を促進した。

3 科目の教育活動

1) 看護学入門

1年次 前期・後期前半

小林 三津子

初学者であり、抽象的な知識や理論だけでは看護に対する興味・関心を深めることができないため、できるだけ具体的な事例や基礎看護学実習でのエピソードなどを提示し、自らに問いかけるような課題を与えた。また、4月の最初の授業で、「私の“看護”とは」という小レポートを課し、主体的に考える機会を意図的に作った。さらに、現役の臨床看護師による「患者に近づくためのアプローチ～自暴自棄になっている患者との関わりを通して～」というテーマで特別講義を行い、より実践に基づいた看護を考える機会を設けた。

2) 看護情報学概論

1年次 後期後半

小林 三津子

看護については初学者のため、情報とは何か、という身近な問題から、看護に関連づけて考えられるように授業を組み立て、看護実践に生かすための看護情報学のあり方について、自らが主体的に考えられるように教授した。なお、筆記試験後には、答案用紙返却時に解説を行い、正確かつ確実に知識を習得する機会を設けた。

3) 生活援助論

1年次 前期後半・後期前半・2年次 前期前半

伊東 朋子、吉田 智子、甲斐 博美、小野 さと子

日常生活における基本的ニーズを充足させるために生活過程、生命維持、診断治療に関わる技術項目を上記の日程で実施した。学生が十分に学べるように2人1組でベッド1台を使用しての演習形態で展開した。学生がより判り易く理解できるように、デモンストレーションでは実施者と解説者を分けたり、理解しやすい模型なども作成し、演習内容を工夫した。学生に1回の授業が終了する毎に演習内容に関する簡単なアンケートを実施し、その結果を授業の反省・振り返り及び、次の授業の工夫のために活用した。実技試験については十分練習ができるような試験日程を提示し、試験準備を行わせた。また現在、進行中の看護技術修得プログラムの各段階への導入としての動機づけを行い、看護実践能力の向上を目指した授業の展開にも心がけた。

4) 臨床看護総論

2年次 前期後半

小林 三津子、伊東 朋子

看護実践を展開するための基本的な問題解決技法である「看護過程」について、できるだけ平易に具体性を持たせて展開し、ビデオなどの視聴覚教材も用いて、基本的な5つのステップについて教授した。

5) 基礎看護学演習

2年次 後期前半

小林 三津子、伊東 朋子

昨年までは、学生が看護学実習で遭遇しやすい2つの事例をペーパーでのみ提示したが、患者像がイメージしにくかったため、今年度はビデオ教材を利用した。ペーパーで把握後、ビデオを視聴し、その後にアセスメント、看護問題の抽出、計画立案までを課した。学生は10グループに分かれて演習を行い、その後、資料を用いて発表を行うようにし、グループワークの内容を共有できるように配慮した。なお、学生のグループワークの参加度に個人差が大きいことが昨年度の課題であったため、今年度は、段階的にグループの人数を増やすことで（小グループ、中グループ、大グループ）、全員が参加できるように改善した。

6) 基礎看護学実習

2年次 後期後半

小林 三津子、小西 恵美子、伊東 朋子、藤内 美保、吉田 智子、甲斐 博美、小野 さと子、安部 恭子、玉置 奈保子、小野 美喜、松尾 恭子、福田 広美、井伊 暢美、高波 利恵、朝見 和佳、山下 早苗、中原 基子、田村 充子

患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めてのため、学内オリエンテーションでは、実習施設である県立病院及び赤十字病院の看護部長より、看護職として大切にしている事や看護学生・看護師時代のエピソードなどについての講義を依頼し、実習に対する動機づけを行った。また、2施設14病棟での実習がより効果的に展開できるように、グループ編成については、学生の個別性や担当教員の指導経験を考慮し、よりグループダイナミクスが活かされるようなグループ配置を行った。結果として、実習目標の達成度は極めて高かった。なお、赤十字病院では看護アセスメント学実習終了後に、6グループ全体の合同カンファレンスを開催しており、共有化が図られた。

7) 看護と遺伝

2年次 前期後半

佐渡 敏彦、吉河 康二

非常勤講師による専門の講義や臨床での実践例を詳解し、毎回、簡単な練習問題をだし、レポート提出を求め、必ず返却時には解説を行い、理解の程度を確認・促進した。

4 卒業研究

- ・回復期リハビリ病棟における連携
 - －「できるADL」と「しているADL」を近づけるために－
- ・患者が感じる術後の“まさか”と思う体験
 - －病棟看護師が行う術前オリエンテーションに焦点を当てて－
- ・夏季におけるY式足浴法のリラクゼーション効果と体幹部皮膚温への波及
- ・熟練看護師による端座位への介助動作の分析
 - －体格の異なる対象に注目して－
- ・熟練看護師が患者との関わりの中で感じる“異和感”とその後の行動

1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護学の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的・心理的・社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。主にフィジカルな部分を中心としており、主要な疾病の理解や病態の理解に加え、これらの知識をもとにどのような方法で健康問題をアセスメントするか具体的な方法論を教授している。

2 教育活動の現状と課題

フィジカルな部分を重点におき、対象の健康問題をアセスメントするための能力を高めるには、疾病や病態などの基本的・専門的な知識が必要である。人間科学講座での生体科学、生体反応学などの知識を想起させ、さらに成人・老人看護学へつなげられるための内容を教授するように配慮し、教授している。

3 科目の教育活動

1) 看護疾病病態論Ⅰ

1年次 後期後半

小西 恵美子、藤内 美保

看護疾病病態論Ⅰは、循環器系、呼吸器系、血液造血器系、腎、代謝・内分泌系の疾患を教授した。各系統の解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。可能な限り図式して理解を得やすいように配慮した。教科書は生体科学や成人老年看護学の研究室でも使用している系統看護学講座シリーズに変更し、学生の理解が得られやすいようにした。後期後半の3ヶ月間、週に4コマのペースで専門的な内容が膨大となり混乱しやすいため、各系統別の講義が終了するごとに中間試験を計5回実施するとともに最終の総合試験を実施した。また看護アセスメント学実習では病態関連図を記載させるため、病態関連図の資料を配布し授業で説明している。

2) 看護疾病病態論Ⅱ

2年次 前期前半

小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子、玉置 奈保子

看護疾病病態論Ⅱは、筋骨格系、脳・神経系、消化器系、アレルギー疾患、自己免疫疾患、感染症、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の疾患を教授した。教科書は系統看護学講座シリーズとし、生体科学や成人老年看護学と一貫性をもたせられるように配慮した。また専門性の高い疾患（耳鼻咽喉科、眼科）については、これまで県立病院の医師に依頼していたが、今年から本学教員が実施し看護として必要な事柄を教授するようになった。

3) 看護アセスメント方法論

2年次 前期後半

小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子、玉置 奈保子

看護アセスメント方法論は、フィジカルアセスメントの基礎知識、健康歴聴取、全身状態の観察、消化器系、循環器系、呼吸器系、感覚・運動系、脳・神経系の患者のアセスメントを中心に教授した。3コマ連続の講義で前半は病態の説明、後半は学内実習室でフィジカルイグザミネーションとした。3人の教員で80人の学生を指導するにはきめ細かな指導が困難であるため、フィジカルイグザミネーションのデモンストレーションでポイントを強調するように配慮するとともに、学内実習の終了時にまとめを行い、学生全員の理解が深まるよう工夫している。また臨床現場で遭遇しやすい事例を提示し、2グループが同様の事例を検討する演習を行った。発表では演習したプロセスの違いが見えやすく、学生の気づきも大きい。最後に病態に関する筆記試験を実施した。

4) 看護アセスメント学実習

2年次 後期後半

小西 恵美子、小林 三津子、伊東 朋子、藤内 美保、吉田 智子、甲斐 博美、小野 さと子、安部 恭子、玉置 奈保子、小野 美喜、松尾 恭子、福田 広美、井伊 暢美、高波 利恵、朝見 和佳、山下 早苗、中原 基子、田村 充子

看護アセスメント学実習においては、県立病院8病棟と大分赤十字病院6病棟の計14病棟に学生5～6名を配置し、患者1名～2名を受け持たせ、アセスメントのプロセスを学ぶための実習を行った。実習記録について詳しくオリエンテーションをしてほしいという担当教員からの要望もあり、今年は見本事例を提示しながら学生オリエンテーション時に実習記録の説明を行なった。学生および担当教員との共通理解が得られてよかったとの声があった。また今年度は、実習の様子を見学したいと人間科学系の教員から積極的な要請があり、6名の教員が県立病院・大分赤十字病院の実習に参加した。参加した人間科学系教員や学生はもちろん、担当教員にも非常によい影響があった。実習目標の到達は、全員実習目標を到達し、学生は積極的に学ぶ姿勢があり、情報がとれない、アセスメントができないといった担当教員の声は昨年よりも少なかった。実習終了後に、担当教員および実習に参加した人間科学系の教員を含めて意見交換を行い、実習指導の戸惑いや工夫などについて活発な意見が出され、来年度の実習指導にも反映できる有意義なものであった。また県立病院および日赤の実習指導者からも大変熱心な指導が得られている。

4 卒業研究

- ・花粉症時期における花粉症患者の感じるディストレスの先行研究との比較
- ・放射線治療におけるスキンマーク：ケーススタディによるインフォメーションパッケージの作成
- ・「最期の言葉」に対する家族の思い：対処行動と思いの変化までのプロセスをたどって
- ・看護学生からみた「よい助産師」：臨地実習を通して
- ・看護学生からみた「よい看護師」：臨地実習を通して

1 教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力と援助技術を身につけることを目的にしており、そのために概論、援助論、演習、実習の各教科を設定している。特に、学生が実務について接する対象の多くが成人期・老年期にある人々であることから、成人・老年看護学の学習は非常に重要な位置づけにあるという認識で、それぞれの科目展開を行うことを心がけている。そして、臨地実習において必要となる技術をより確実なものとするために可能な限り学内実習を組み込むことに配慮している。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学の学習範囲は非常に広範である。幅広い年齢層の対象理解や、多様な疾患とそれぞれの治療法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例や実際の医療・看護器具の提示をして学生の関心を高め、印象に残るように工夫している。

援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別ごとに急性期と慢性期に必要な看護援助について教授しているが、それぞれ2コマほどで進めている場合が多く、学生が欠席するとその部分の学習が欠けることになる。そこで欠席者にはその講義内容に関連するテーマを与え、ハンドアウトの資料やテキストで自己学習させ、レポートを提出させている。

3 科目の教育活動

1) 成人看護学概論

2年次 前期前半

栗屋 典子

概論においては、一連の成人・老年看護学を学ぶための基礎となる内容として、成人期・老年期における身体的・心理的・社会的特徴や、健康問題の特徴などを教授した。

2) 老年看護学概論

2年次 前期前半

栗屋 典子

概論においては、一連の成人・老年看護学を学ぶための基礎となる内容として、成人期・老年期における身体的・心理的・社会的特徴や、健康問題の特徴などを教授した。

3) 成人・老年看護援助論Ⅰ・Ⅱ

2年次 後期

赤司 千波、小野 美喜、松尾 恭子、福田 広美、井伊 暢美

成人・老年看護援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別ごとの健康問題をもつ対象者について、急性期と慢性期に必要な看護援助について教授した。学生からの意見を勘案し、講義媒体の工夫をして講義した。援助技術については、確実な技術修得を目的とし、クラスを2グループに分割し、同一内容で2回ずつ学内実習を実施した。本年度も、3事例に対する患者指導を小グループごとの計画立案・実施、ロール・プレイ形式の発表を取り入れたことで、個別的な患者（家族を含む）指導の必要性やその方法について教授できたと考える。

4) 成人・老年看護学演習

3年次 前期後半

赤司 千波、小野 美喜、松尾 恭子、福田 広美、井伊 暢美、栗屋 典子

演習においては、臨地実習で看護過程をスムーズに展開し、看護実践できるように、ペーパーペイシェントを用いた事例による看護過程の展開を、講義、自己学習、グループワークによって指導を行った。講義では、事例を用いた看護過程の展開について教授し、自己学習では、グループごとに担当教員による個人面接や課題の提出によって個別的な指導を行った。また、演習最終日には、各グループの事例に対する看護過程の展開の発表をディベート形式で行い、異なる視点による看護過程の展開があることなどを学ぶ場を設けた。、展開の困難な学生に対しては個別指導を行った。

5) 成人看護学実習

3年次 前期後半～後期前半

赤司 千波、小野 美喜、安部 恭子、小野 さと子、吉田 智子、松尾 恭子、甲斐 博美、玉置 奈保子、福田 広美、高波 利恵、朝見 和佳、井伊 暢美、栗屋 典子

6) 老年看護学実習Ⅰ

3年次 前期後半～後期前半

赤司 千波、小野 美喜、安部 恭子、小野 さと子、吉田 智子、松尾 恭子、
甲斐 博美、玉置 奈保子、福田 広美、高波 利恵、朝見 和佳、井伊 暢美、
栗屋 典子

昨年度より実習病院の病棟編成が変更となったことから、これまで成人・老年看護学実習に使用していた10病棟が9病棟となっているが、その一方で今年度は実習学生数が90名となっているため、1病棟に5名の配置を余儀なくされた。

実習は担当教員と臨床側の実習指導者の指導のもと、学生に1～2名の対象者を受け持たせ、看護実践を体験させた。現在、急性期と慢性期を3週間ずつ体験させているが、急性期と慢性期とも入院期間の短縮が進み、3週間継続して担当できるケースが少なくなっている。

また、援助技術の確実な習得と拡充を図るために、これまでも臨床側と検討を重ねてきたが、本年度も再度拡充に向けての協議を行い、一人で実践できる、指導者とともに実施する、見学する技術を整理し、実習マニュアルを修正した。学生は受け持ち対象者に限らずこれらの援助技術について指導者あるいは教員の指導の下で積極的に実践や見学を行った。今年度は新任の指導者が多いことから、臨床側の希望で、実習に先んじて、本学の教育課程、特に実習教育における臨床の役割について説明を行った。例年の課題であるカンファレンスの時間短縮については、いくらかの改善はあるが、今後も双方で努力する必要がある。

7) 老年看護学実習Ⅱ

4年次 前期前半

赤司 千波、小野 美喜、松尾 恭子、福田 広美、井伊 暢美、栗屋 典子

介護老人福祉施設、介護老人保健施設において、入所者の生活支援を通して対象者を理解し、これらの施設における看護専門職の役割と課題を学ぶことを目的に、各施設9～11名の配置で実習を行った。施設ごとの実習体験から得た課題や疑問については、実習最終日に学内で討論・検討する場をもち、共有を図った。今年度は施設側の都合で、介護老人保健施設1施設の変更を行った。

4 卒業研究

- ・乳がん手術後患者の術式によるQOLの変化とソーシャルサポートの検討
- ・中途障害児の家族への障害受容を促すために必要な看護援助とそれを困難にする要因
- ・男性看護師が女性患者に対して羞恥心をとまなうケアを提供する際の配慮
- ・遅延性意識障害児をもつ母親が認識するタッチの有用性
- ・看護学生が受け持つことへの同意書に署名した患者の実習開始時と終了時の思い
- ・ターミナル期のがん患者への告知を悩む家族の思い

1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことを目的とする。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう指導している。

2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に小児看護学概論で小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学び、学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の特性を認識するように工夫している。3年次前期・後期の講義、学内演習、実習を通して、学生は多くの小児に関する専門的知識を学ぶ。学んだ専門的知識を実習で実践し、看護場面に知識を応用することは容易なことではないだろう。学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近は少子化で兄弟姉妹も少なく、小児が周囲にいない、また接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生の評価アンケートでは概ね「満足あるいは普通」であり、欠席も少なく意欲的に参加していた。

小児看護学の学習内容の定着については、本年度も3回の分散型試験を行い重要項目の意識づけを工夫し、再試験を実施してフォローした。次年度はテキストの改訂もあったので、講義の資料を変更する。

3 科目の教育活動

1) 小児看護学概論

2年次 前期前半

高野 政子

小児看護の特質と概要を理解することを最終的な目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。

1) 小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2) 世界の子ども健康と医療、3) 子ども観の変遷と子どもの権利、4) 日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5) 小児の成長と発達総論、6) 小児の形態・機能的発達、7) 心理的・社会的・言語的発達である。最終回には、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

2) 発達と援助論

3年次 前期前半

高野 政子、山下 早苗、中原 基子

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と保健を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1) 小児期の主要な発達理論、2) 小児各期の発達アセスメント、3) 乳児期、幼児期の保育理論と技術、4) 学童期、思春期の保健と看護、5) 病気の子どもと家族、6) 小児の健康障害と看護、7) 障害のある子どもと療養生活の援助、8) 親子関係に問題のある場合の看護ほか。実習は昨年同様に、総合病院の小児病棟と療育施設の2施設で実施した。学内での技術演習は、大学院生の協力を得て6名で指導した。指導内容の要点は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、グループワークで実施した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

3) 小児看護援助論

3年次 前期後半

高野 政子、山下 早苗、中原 基子、大島 操

前半は、小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。

後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで看護過程を検討しまとめ発表する。2つのグループワークを行ったが、学生は積極的な参加を求められる。次年度も学生個々の事例展開も求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する予定である。この場合は個人ワークの力をどのように評価するかが課題である。

4) 小児看護学実習

3年次 後期前半

高野 政子、山下 早苗、中原 基子、大島 操

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生10人で6グループ(合計60人)、別府発達医療センターに学生5人で6グループ(合計30人)の配置で、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、約1/3の学生は実習中に2人の受け持ちを経験した。1人の子どもを継続できた場合に学生には看護に工夫がみられたが、複数の子どもの受け持った学生は看護実践まで至らないということに指導側に課題となった。保育所実習によって、子どもの理解やコミュニケーションに慣れた後に病院実習を行うようしている。これにより、病気を持つ子どもと家族への関わりがスムーズであった。

本年度より外来実習を半日の短い時間ではあったが、外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定や日常生活援助、処置などには積極的に取り組むよう指導された結果、検温(98%)、呼吸音聴取(92%)、心音聴取(84%)、血圧測定(71%)、清拭(65%)、食事介助など小児看護技術を実施できた。実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習態度には、自主性に欠けているや消極的であったという指摘や、事前学習の不足から観察項目についても不足していたという指摘があった。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

4 卒業研究

- ・ 小児看護師のタッチに対する認識と実態
- ・ 小児がんと診断されてから現在までの家族関係の変化
- ・ NICUに勤務する新卒看護師のストレス分析

3-5-12 母性看護学・助産学研究室

1 教育方針

母性看護学・助産学は、専門看護学講座の4科目群の中の1科目群に位置している。母性看護学では、女性のライフサイクル及びマタニティサイクルにある母性各期・新生児の健康現象に対する援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。母性看護学の実習は周産期に重点を置いて展開している。

助産学選択履修者については、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で、実習中分娩の取り扱いについて、助産師又は医師の監督の下に学生一人につき、正期産を10回程度直接取り扱うことが定められている。本学では9例以上を目安とすることを基本的考え方としている。助産師教育は、卒業時点までにどこまでできることが望ましいかを基本にすえ、最小限、社会ニーズの変化に対応でき、母子の安全性(正常・異常の区別)が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。しかし、現在おこなわれている4年制大学の教育環境下では、実習期間(8週間)内では分娩介助10例程度が守れず、夏休みを利用して10例に達するという現状である。また、妊娠期の実習期間が取れない等の問題点を抱えており、助産学選択科目としての課題は大きい。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論を、実習で実践し理論と実際を結びつけることを目標としているが、今年度は、運良く正常分娩を4名を除く全学生(69名)に見学させることができた。それに応じて全学生に褥婦の看護の実習展開ができたが、看護過程展開に関する参考文献検索等の自主的学習姿勢に学生間の差が見られた。改善点としては、更なる個別指導の重視に心がけたい。今年度の助産学専攻者は17名である。助産学教育は先ず、3年次から母性看護学援助論と同時並行で、助産学概論、助産診断・技術学1、2、3の講義が開始されている。3年次野9月末から12月まで第4段階実習(母性看護の実習)を終え、また、1月から3月まで助産診断・技術学1、2、3講義が継続して行われている。4年次の4月から5月中旬まで助産診断・技術学IV(助産過程、及び分娩介助演習)が組み込まれている。平成18年度の助産学実習は13名であり、実習期間が固定(学部)しているため昨年のやり方を踏襲した。助産過程演習(16時間)ではテキストに準じた情報の枠組みを作成しペーパーペーセントで2事例を展開し、助産学実習で活用した。しかし、6単位の実習期間では1人で安全性の判断をし、実施できるところまでは無理であり、目標をどこに置くかが大変難しい。また、分娩介助を10例程度(9例以上)取り上げるために実習期間が夏休み休暇に19日間延長したこと等、学部の助産学教育が非常に過密であることは例年と同じく大きな課題である。今年度は学生数が昨年より4名増えたため実習病院を1箇所増加した。1学生の分娩介助数は9例4名・10例7名・11例2名であり昨年より10例以上が増えた。平均9.7例で文部省に報告した。母性看護学実習も助産学実習も少子化の影響が大きく、実習効果は実習調整の努力が問われる現状である。

3 科目の教育活動

1) 母性看護学概論

2年次 前期

宮崎 文子、林 猪都子

母性看護学の基本概念として、人間の性と生殖（種族保存）の側面から女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点をおき、母性看護の役割と重要性について系統的に教授した。実施状況は次のとおりである。1. 母性とは・母性看護とは（倫理面の強化）、2. 母性看護の変遷、3. 人間の性と生殖の概念と意義、4. リプロダクティブヘルス・ライツの概念、セクシャリティー、5. 家族関係の理論とサポートシステム、6. 母性看護の理論と実際、7. 胎児の成長・発達（母子の歯科保健を含む）、8. 母性愛着行動と母子関係、9. 思春期の特徴とその対応、10. 家族計画と受胎調節、11. 人工妊娠中絶の諸問題、不妊症、12. 更年期・老年期の特徴とその対応、13. 母性の環境と諸問題（労働・環境汚染・文化）、14. 母子保健に関する諸制度である。評価は、講義中1回、終了後1回の2回である。講義終了後全体の授業評価を行った。その結果、出席状況は4.75（5点満点）、講義満足度8点（10点満点）で大変興味を示して望んだ。

本年度の改善点：昨年と同様試験は2回行ったが、母性看護の内容は学生自身であり極力学生参加型の授業となるように、質問形式の授業展開を今年も心がけた。今後の課題としては、社会変化に対応した教授内容の精選と判断力・思考力に重点を置いた教授法の継続検討である。

2) 母性病態論

2年次 後期

肥田木 孜、谷口 一郎、吉留 厚子、宇津宮 隆史、堀永 孚郎、上野 佳子、戸高 佐枝子

母性のライフサイクルにそった主要疾患についての病態・生理、症状、治療、看護への視点から講義をすすめた。対象とした疾患名は次のとおりである。月経異常の鑑別診断、無月経、思春期貧血、子宮内膜症、子宮癌、STD、異常妊娠、異常分娩、異常産褥、閉経症候群と治療、不妊症と治療、胎児・新生児の異常である。近年、不妊症に関して検査・治療がめざましく進歩していることを鑑み、今年度より不妊症についての授業の充実を図った。特に不妊の病態のみに焦点を当てず、不妊症の患者の心理について、臨床現場で担当している臨床心理士からの講義は興味深いものであった。

3) 母性看護援助論 I

2年次 後期後半

吉留 厚子

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。母性看護の対象は母子のみではなく家族を含むことを認識し、妊娠から分娩の生理的变化について教授した。授業の基本方針として、前回の授業で教授した内容について、授業の最初に、学生と質疑応答を行い確認作業を進めていくように前年より努めた。特に、分娩における児頭の回旋等の話やプリントの図だけでは理解し難い内容は、模型を頻回に利用して、目でみて学生がよりわかりやすいようにした。予定である。学生による評価にて出席率は高く講義内容が身につけていることが分かった。

4) 母性看護援助論Ⅱ

3年次 前期前半

吉留 厚子、渡辺 しおり、武石 美智代

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。異常分娩、正常産褥、異常産褥、新生児の看護について教授した。学生に授業内容について興味を持たせるために、特に異常分娩や異常産褥について事例を提示しながら授業を進め、実習にも役立たせるために産褥期の看護は実習先のタイムテーブルを示すようにした。前回の授業の内容について確認したほうが、より授業の内容の理解に効果的であると思われた場合には、授業の開始に学生と質疑応答を行った。

5) 臨床母性看護総論

3年次 前期前半

吉留 厚子、関屋 伸子、遠藤 千晶、高瀬 恵子

母性看護学実習で実施する母性看護特有の援助の実際を教員の指導のもとで演習した。実習直前に自己学習で沐浴を実施させたので、母性看護学実習で役立った。また、母性看護の特色のある症例をもとに看護過程のペーパートレーニングを行い、母性看護実習の実践で応用できるように教授した。学生は母性看護技術についての習得に積極性がみられた。看護過程の展開についても比較的对象をとらえる視点ができていた。

6) 助産学概論

3年次 前期

宮崎 文子、吉留 厚子

助産および助産の基本概念について、歴史的変遷から概説し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性について、更に助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。内容は助産の理念（哲学）が全ての科目に浸透し、ケアの満足度を決定づけるため特に助産モデルの映像化、事例を通して帰納法的解説を強調した。具体的な教授項目は次に示すとおりである。1. 助産学の構成、2. 助産の理念（哲学）・意義・対象、3. 助産の原理原則、4. 助産の歴史とあり方、5. 助産風俗、6. 母子保健の動向と諸制度、7. 助産師の職性と業務（諸外国と日本）8. 助産師教育（諸外国と日本）、9. 助産学を構成する理論・助産過程の基本、10. 助産師と倫理、11. 諸外国の助産師活動、12. ICM（国際助産師連盟）の活動、13. 日本の助産師の現状と課題、14. 助産学と研究。評価は試験1回と課題レポートである。学生の出席状況は100%であり、講義内容には大変興味を持って参加した。

本年度の改善点：助産哲学の強調、他は昨年同様課題を与えレポートを課し、文献検索・思考力の訓練の強化を図った。今後の課題は情報化時代の講義内容の精選である。

7) 助産診断・技術学Ⅰ

3年次

林 猪都子、戸高 佐枝子

助産診断に基づいて、助産を実践するための基本的な知識と技術を理解するために、妊娠期、分娩期の助産診断、援助技術、保健指導についての講義と演習を行った。妊娠期の確定診断、時期診断、経過診断の内容に加え、妊娠期の超音波診断ができるように、妊婦に依頼して胎児の計測を実際に行った。分娩期は分娩経過診断ができるために、分娩経過と児頭回旋、内診所見の関係が理解できるように骨盤模型や内診モデルを使用して講義を行った。今年度は、ヨガ体操を外部講師に依頼して新しい知識を伝授した。昨年度の反省であった「授業に使用する教科書の提示」を事前に行った。

8) 助産診断・技術学Ⅱ

3年次

小西 清美、高瀬 恵子

思春期、マタニティサイクル、更年期の時期における女性の内分泌の変動に伴う自律神経の変化や助産ケアのEBNについて強調した。産褥と新生児の生理・病態については、ビデオ学習で理解を深めさせた。乳房管理・母乳哺育支援は講義時間を増やし、ビデオ学習や演習を行った。出生直後の新生児の取り扱い、新生児の蘇生、計測は、モデル人形を用いて、全ての学生が体験した。産褥期の退院指導では、グループで事例を通して、指導計画案、パンフレット、指導案を作成し提出するとともに、ロールプレイにて発表させた。本年度から保健指導のロールプレイによる発表を行ったが、指導方法（指導内容、指導場所、指導教材、媒体等）について、色々な視点から意見交換があった。

9) 助産診断・技術学Ⅲ

3年次

松本 英雄、飯田 浩一、佐藤 昌司、馬場 真澄、豊福 一輝、軸丸 三枝子、林下 千宙、宇津宮 隆志

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と異常及び新生児医療について、それぞれの専門とする医師によって講義された。学生全員とも皆出席で、熱心に講義を聞いていた。成績の結果は、200点満点中平均144点で、欠点はいなかった。

10) 助産診断・技術学Ⅳ

4年次 前期前半

林 猪都子、小西 清美、関屋 伸子、遠藤 千晶、高瀬 恵子

分娩期の助産診断の講義と症例を用いて、入院時から分娩経過の予測と助産診断が行えるように、助産過程の展開を行い、実際に助産学実習で活用できるように教授した。「助産診断システム研究会」の助産診断の概念枠組みを用いて、時期診断、状態適応診断、経過予測診断が行えるように、1事例をグループ学習で展開し、1事例を個人課題として取り組んだ。今年度は、グループ人数を3～4名にして効果的な学習ができるように配慮した。グループ学習での事例展開の内容解説を最終日に行い学生の学習理解を深めた。

分娩介助の演習では、側面介助法(1日4コマ)、正面介助法(1日4コマ)の2通りの介助法を習得させている。演習方法では、1コマ目は、分娩介助の方法を解説し、教員がデモンストレーションを行った後、残りの3コマの演習は、直接介助、間接介助、新生児の役割などを決めて、教員の指導のもとで全員が最初から最後までの一連の流れを実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、次の段階では助言なしで一通りの分娩介助技術が行えることを目標に、分娩介助評価表を用いて、5回以上の直接介助を実施した。技術の評価は、グループの他者評価、教員が技術チェックを行った。2種類の方法を指導しているので、学生の反応としては、「正面介助が介助者の姿勢に無理がなく、会陰部の観察がしやすい」、「演習の中で産婦への声かけが学べた」という感想が多かった。今後も継続して行いたい。

11) 地域助産活動論

4年次 後期

宮崎 文子、小西 清美、戸高 佐枝子

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理の歴史的変遷、開業権を持つ専門職業としての概括的な知識・考え方および地域助産活動論に必要な理論(経営管理)について教授した。

講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意している。

改善策は、特に助産師の自律・自立の視点から助産所の経営管理の中でマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。課題としては、今年度は経営管理の理解を深めるためには助産所実習との関連性を強化し、助産所実習期間(1週間の延長)を希望実習で補充した。

12) 母性看護学実習

3年次 後期

高瀬恵子、関屋 信子、宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美、南 智子(2ヶ月)、緒方 生久美(1ヶ月)

母性看護学実習の実習施設は2施設である。今年度は、施設毎に1グループ6名～9名の学生と1～2名の担当教員という組み合わせで、のべ12週間(1人の学生2週間)の実習を行った。

実習は学生に1名の妊産褥婦を受け持つように配慮し、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開の実際を体験学習させた。そして、幸運にも今年度は4名をのぞくすべての学生が分娩見学実習が出来、生命誕生の場面を通して自己を振り返ることで母性看護の概念を認識できた実習となったと思われる。また母性各期の保健指導もそれぞれが工夫(パンフレット作成)して、その取り組みが出来た。

実習施設と学生数(実習延べ期間12週間)

大分県立病院4階東病棟、産科外来(学生数54名)

堀永産婦人科医院(学生数36名)

13) 助産学実習

4年次 前期

高瀬 恵子、関屋 伸子、宮崎 文子、林 猪都子、吉留 厚子、小西 清美、梅野 貴恵（15日）、緒方 生久美

助産学実習（6週間＋総合実習2単位含む）においては、妊娠中から産後までの家族を含めた継続的な援助および、安全で安楽な「いいお産」が出来る助産能力を身につけるための実践実習である。

本年度の助産学専攻学生は13名である。実習施設は、分娩状況からみて以下の7施設で学生、担当教員、専任教員の組み合わせで指導に当たった。少子化が急速に進行する現状での分娩介助10例程度（規定：9例以上）は助産学実習の課題である。今年度は昨年度より学生数が4名増加したので実習施設を1箇所増やした。それでも実習期間中の分娩件数不足が予測されたため夜間実習を余儀なくした。分娩介助数は学生の希望実習（夏休み19日間）により9例4名、10例7名、11例2名であった。昨年の反省から臨床では助産師の自律が発揮されていない現状から、それを補うため助産院実習（自律モデルの見学）期間を1週間延長実習にした。また、産褥期の記録物の簡易化を図った。しかし、大幅な記録物提出の遅れは見られなかったが、分娩進行におけるアセスメントがまだまだ弱い傾向にあり、今後の課題である。

<実習施設と学生数>

- 1) 大分県立病院4階東病棟（1学生母体搬送・帝王切開受け持ち1例含む）、産科外来で1学生8日間のべ2週間：学生数13名、及び分娩介助を中心とした実習2名（6日間）。
- 2) 独立行政法人国立病院機構別府医療センター：分娩介助を中心とした実習2名（6週間）。
- 3) 堀永産婦人科医院（6週間）：学生数5名
- 4) くまがい産婦人科医院（6週間）：学生数4名
- 5) 生野助産院（1学生2日間）：学生数13名
- 6) 渡辺助産院（1学生2日間）：学生数13名
- 7) 友成助産院（1学生1日間）：学生13名

4 卒業研究

- ・性周期における不定愁訴と作業負担の検討
- ・産褥期入院中における褥婦の睡眠の経日的変化
- ・母親との育児方法の相違における祖母の対応
- ・月経痛に対するカイロ貼付の効果の検討—主観的・生理的評価を用いて
- ・助産師としての自律への個人的要因の検討—開業助産師と勤務助産師の比較より—
- ・家族との育児方法の相違における母親の対応
- ・分娩第1期における産婦の身体活動量の検討

1 教育方針

学生が卒後の進路にかかわらず「人のこころの健康に関する援助」に役立てることができるような、視点・知識・技術・態度を培うことを目標に、2つの講義と演習・実習を一連の流れとして構成することを意図している。特に、精神疾患やこれを有する人に対する偏見は学生の間にも少なくないことから、できるだけこうした偏見を払拭することを、重要な目標の一つとしている。また精神看護学実習は、精神科医療の場において行うものではあるが、精神科病棟以外の「生活の場」に目を向けること、精神科医療以外の場でもこころの健康に配慮することを、学生に対して強調している。同時に、精神科医療の現場で学生が体験したことが、長く心の傷となったり新たな偏見の種となったりしないよう、注意を払っている。

2 教育活動の現状と課題

看護学において精神看護学は、一つの専門的領域であると同時に看護学の共通・基本領域でもある。そこで教育の目標として、a) 学生の精神障害（者）に対する偏見を是正すること、b) 社会情勢に適合し、かつ学生にとってインパクトのある内容・方法を工夫すること、c) 学生が興味と関心を持って自律的に学ぶ契機となるよう配慮すること、d) 授業の前後や途中で学生の関心・希望・理解度等の把握に努め結果を随時授業内容にフィードバックすること、の4点を掲げた。いずれも一定の成果をあげてはいるが、さらに次の点に重点を置いて改善を図ってゆく必要がある。主としてb、cとの関連では、講義内容をいっそう精選し、順序性にも検討を重ねること。特に、“精神看護・精神保健に携わるとはどういうことか”という具体的なイメージを、実践経験の少ない学生にも効果的に伝え、“だからこの授業が必要なのだ”と納得させる工夫。実習との関連では、事前に基礎的な看護技術の習得を確認することと、学生の価値観や社会常識の変容をふまえた学内教育を行うこと、さらに実習において受け持ち患者への看護を受け持ち看護師とともに振り返る機会の徹底。

3 科目の教育活動

1) 精神看護学概論

2年次

影山 隆之

毎年改訂しているオリジナルテキストに基づき、a) 心の健康について理解するために重要な諸モデル、b) 精神看護のアセスメントに必要な症状と状態像の知識、c) 主な精神疾患の疾病論、d) 精神保健看護の歴史、の四領域について講義した。テキスト内容の重複を見直し、理解の助けになる事例・例題の記述を改善した。学生が精神看護に興味を持ち、精神障害者に対する偏見を払拭できるよう、音楽やビデオで芸術作品や当事者の生活を提示した。毎回の授業時間内に、学習内容に関連した小レポート（記名式）を提出してもらい、授業の後半の内容に即興的に活用した。これは次回までに朱入れして返却し、学生の疑問や理解不十分な点に応答するようにした。また、小レポートとは別に、自由な質問・要望（無記名式）を授業終了時に提出してもらい、授業改善の参考にした。評価のための筆記試験は、2回に分けて実施した。

学生からのコメントによれば、精神障害者自身が出演するビデオを見たことが、偏見・不安の払拭に大きな効果をあげたようであった。テキスト以外にも具体的な事例を多く紹介したことが、精神看護という領域への理解の助けになった、という声も多かった。しかし同時に、本科目前半で学んだモデル（考え方）の有効性や応用可能性を、この学年ではまだ想像し難いようだったので、授業の順序性について今後検討する必要がある。個々の精神疾患についての理解の不足が3年次の実習で露呈する学生が見られることから、この点についてはコンパクトでわかりやすい教授に努めた。試験を二度に分けたことは学生に好評であり、かつ中間試験で不振であった学生の危機感（学習動機）を高めることもできた。授業前半で学生の興味関心をいっそう喚起するために、内容の順序性を再検討することと、テキスト内容の精選が、今後の課題としてあげられる。

2) 精神看護援助論

3年次 前期前半

大賀 淳子

前段階（精神看護学概論）で学んだ基本的知識を踏まえ、次段階（精神看護学実習）につなげる役割を果たすために、実習で（さらには卒業後）出会う可能性が高い疾患に焦点をあてた。昨年度から取り入れた毎講義のまとめ（関連する国家試験問題の解答）を本年度も継続し、教員による添削、学生のコメントのフィードバックを毎回繰り返し、教員と学生および学生間のコミュニケーション促進を図った。

今年度の新たな取り組みとして、実習病院看護師による、「精神科におけるチーム医療」についての実践例に基づくプレゼンテーションおよび学生とのディスカッションの場を設けた。同時に、事前に届けておいた学生の質問への実習病院看護師集団からの回答もいただいた。二つめは、毎回の講義で参考資料を回覧し、講義後の個人学習へつながることを期待した。三つめは、筆記試験に加え、口頭試問（講義で解いた国家試験問題-状況設定問題-）を導入したことである。

学生による授業評価の結果では、講義方法に関しては概ね良い評価結果であったが、内容が多すぎるという前年同様の評価があり、引き続いての課題である。また、数名の学生が精神看護学実習終了後のレポートで述べていた“援助論講義だけでは「精神看護に携わる者に必要な能力」の具体的なイメージを持たず、精神看護学実習で看護師に身近に触れる体験を経てはじめて可能になった“という言葉を教訓とし、精神科CNS、リエゾン看護師、精神科認定看護師などの役割について扱うことにより、精神看護特有の技術、知識のイメージ化を図っていく予定である。なお、口頭試問に対する学生の評価は多様であったが、講義担当者としては、専門的知識に基づく状況判断の過程を自分の言葉で表現する力を試すことの意義を実感できた。次年度は試験方法の改善を図ったうえで、口頭試問を継続する予定である。

3) 精神看護学演習

3年次 前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、田村 充子

前段階の精神看護学概論および援助論を土台とし、コミュニケーション、事例の理解、看護計画の立案・展開能力を高めるために、実践で出会う可能性の高い事例や場面を想定しながら演習をすすめた。

コミュニケーションについての体験学習では、気まずい場面、気がかりな場面などのシナリオを基にしたロールプレイを行い、「聴く」という経験と「聴いてもらう」経験を通して、インタビューの大切さと難しさを共有した。

事例の理解についての学習では、精神科領域でのアセスメントの視点の広さ、医療・保健・福祉からの多角的で長期的な視点を養えるよう、ワークノートのガイドラインに沿った個人ワークを実施した。

グループワークでは、6人ずつ15グループに分け、事例の解釈と目標の設定、看護計画の立案に取り組んだ。特に事例の解釈のプロセスを丁寧に辿らせるために、教員は活発なディスカッションを促し、多様な着眼点を引き出すように関わった。さらに多様な視点を共有できるように、演習の最終日は事例検討会を行い、情報の解釈の視点や援助の方向性をめぐるグループ間の議論が活発となった。ここから生じた疑問を次の実習で引き続き考えることが大切であり、動機付けとして効果的であったと考える。

毎回の学生のリアクションペーパーには記名・提出に自由度をもたせたことで、より率直なコメントが集められた。記名のあるレポートには、朱入れをして返却した。次年度の課題は、学生がイメージしにくい実習では高頻度に出会うケースを、より具体的・多角的に解釈できる進め方の検討である。

4) 精神看護学実習

3年次 後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、田村 充子、木下 結加里、一木 アサ子

例年同様、大分丘の上病院において、3つの病棟（ストレスケア・思春期、急性期、療養）、および外来、デイケアの各部門での実習を通して、精神科医療施設での看護だけでなく社会の中での精神看護の役割について学習させた。本年度より、実習にあたって次の2点に関する誓約書を病院へ提出した；「本学学生および教員は、実習期間中に知り得た利用者および施設に関する情報を、実習中・実習終了後も、第三者に故意または過失によって遺漏しない。」「本学は、看護学実習に臨むにあたり、あらかじめ基礎的な知識・技術を学生に教育する。」。本年度は実習生の人数が多く、学生控え室を有効に使用するために、机・椅子を撤去して畳敷きに変えた。

学生が実習最終日に提出したファイナルレポートの「大学・病院への要望」欄に記述された内容から、主なものを抜粋する。i) 学生控え室を畳敷きに変えたことに対して、肯定意見が多かった。しかし、男子学生の更衣室の確保ができておらず、不便さを指摘されており、病院と相談して改善策を練る必要がある。ii) デイケア実習の機会を全員に保証してほしいという要望が、デイケア実習を経験できた学生からも寄せられていた。iii) 特に後半のグループは、第1週目にも帰学日を設けてほしいという要望が多かった。iv) 施設指導者の指導に関しては、ほとんどが肯定的記述であった。

一方、実習終了後に行った実習反省会場で臨床指導者から寄せられた主な意見も抜粋する。i) 学生間の情報交換や学生同士で協力しあう姿勢が乏しい。ii) 実習病棟決定を学生同士で行うことにより、グループに明らかな偏りがみられたケースがあった。iii) 基礎看護技術の未熟さを感じた。iv) 礼儀に欠ける学生に対し、スタッフは何度も注意しなければならず、疲れを感じた。v) 大学全体でモラル、人間的資質を高める教育が必要なのではないか。

今後の課題として、次の3点をあげる。i) 学生の価値観の変容、常識のなさなどへの対応については、まず学内での教育のあり方を再考する必要がある。さらには臨床側とも連携して、実習教育のあり方を工夫する。ii) 受け持ち患者への看護を受け持ち看護師とともに振り返る機会を持つことを徹底する。iii) 看護技術の修得については、学内での指導をさらに充実させる必要がある。

4 卒業研究

- ・療養環境中のサウンドスケープによる入院患者の快／不快の経験ー独立施設型ホスピスと他の療養環境との比較
- ・精神科デイケア利用者における軽登山の効果
- ・精神科看護師が異性の患者に関わる時の配慮と理解・共感の難しさ
- ・認知症高齢者の在宅介護において主介護者が他の家族に求める支援

3-5-14 保健管理学研究室

1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術の習得を目的として、学生自らが考え実践することを重んじた教育プログラムを組み立てている。1年次は、健康という概念を理解するとともに、講義と実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多種多様な健康ニーズを学び、2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習を通して実践に必要なノウハウを体験的に習得することを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容を検討している。また、他の講義や実習との結びつきを考えて、1年次、2年次では基礎的知識を、3年次ではより実践に視点をあてた保健活動が理解できるよう、講義・演習の内容を組み立てている。3年次の演習で、具体的な事例検討を通して実践能力を養うとともに、4年次の地域看護学実習に持参して活用できる資料の作成など、課題の構成に配慮したことはその一環である。しかし、1年次、2年次で学習した内容が、3年次以降の講義・演習にうまく結びついていない状況があり、いかに学生が具体的に実践をイメージし理解しながら知識を獲得していけるよう教授していくかが課題である。

3 科目の教育活動

1) 健康論

1年次 前期

草間 朋子、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

健康の概念と健康に対する考え方の歴史の変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。

担当（講義回数）と概要

草間 朋子（1）大分県立看護科学大学における教育方針、

桜井 礼子（5）看護の視点から健康を考える、ライフサイクルと健康、健康づくりと健康日本21の展開、健康と運動、喫煙、飲酒、こころの健康

平野 互（2）疾病構造とライフスタイル、健康度の評価、

高波 利恵（1）健康と環境

朝見 和佳（1）健康と栄養

坪山 明寛（1）看護職の役割と感性

宮崎 文子、高野 政子、粟屋 典子、影山 隆之、工藤 節美、八代 利香：各専門分野における健康課題と看護職の関わり

2) 保健福祉システム論

1年次 後期

平野 互

まず「権利」について論じたのちに、憲法に謳われた基本的人権である生存権を実現するための制度的保障すなわち社会保険、社会福祉、国家扶助および保健・医療を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。少子高齢化の進行に並行する社会保障制度の変革時期にあり、今後の動向を含めた関連法規や制度の変化を、可能な限り体系的に理解できるよう整理するとともに、国家試験の出題傾向にも対応できるよう講義を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要な事業評価とリスクマネジメントや、個人情報保護など今日に医療者に求められる基本事項を論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

学生の授業評価からは、膨大な情報量への対処に苦勞する学生も一部いることが示唆されたものの、おおむね学生が講義の意図を理解し、少なくとも権利や社会保障制度に対する関心を高めて、制度の枠組に対する理解ができたことが伺えた。しかしながら、講義に出席する学生が固定化する傾向は続いており、初期の講義で学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るための工夫をする必要があると考えられる。

3) 保健活動論

3年次 前期後半・後期前半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践ができるよう演習を行った。

担当（講義回数）と概要

桜井 礼子（8）：看護職の活動と法令、地域保健活動、救急医療と災害看護活動、学校保健

平野 互（2）：健康教育の進め方

高波 利恵（4）：産業保健活動

内田 勝彦（1）：保健所の役割と活動の実際（宇佐豊後高田県民保健福祉センター所長）

日本赤十字社（4）：救急救命処置の基礎（講義1，実技演習3）

4) 看護の倫理

3年次 前期前半

平野 互、小西 恵美子

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、5時限の講義と3時限の事例演習を行った。講義は、「Profession と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「患者の権利」の4回を平野、「看護職の責任と倫理規定」を小西が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに、志願者を募ってスモール・グループによる発表・討議を9題行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

5) 保健管理学演習

3年次 後期後半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から健康問題について多面的に検討し、問題解決能力を養うことを目指した。演習は、地域、学校、産業における保健活動のあり方の実際を学ぶために、具体的な事例を用いて、それぞれの健康問題を明確化し、どのような支援を行うか、小グループに分かれてグループワークを行った。また、保健活動の根拠法、社会制度や社会資源の活用について理解するために、事例を展開するために必要な事項に関して学生一人ひとりに課題を提示し、レポートにまとめ、学生間で共有する資料を作成した。最後に発表会で各事例についてロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、他のグループの学びを共有するとともに、ディスカッションを通してより深い考察ができるような場とした。

6) 初期体験実習 Early Exposure

1年次 前半

朝見 和佳、安部 恭子、井伊 暢美、一木 アサ子、大賀 淳子、大島 操、小野 さと子、甲斐 仁美、甲斐 博美、木下 結加里、工藤 節美、高波 利恵、玉置 奈保子、田村 充子、中原 基子、福田 広美、松尾 恭子、八代 利香、山下 早苗、吉田 智子、平野 互、桜井 礼子

初期体験実習は、3日間の施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解することを目指している。さらに、施設実習後に学内でのカンファレンス、発表会を通して、各施設での学びを共有し、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。初期体験実習は学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員に密に係わってもらいながら実習をすすめている。今年度は、実習施設として大分労働衛生管理センター、大分県立新生養護学校、佐賀関病院を加えている。

実習施設：20ヶ所

事業所：九州電力株式会社、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所

保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター

健診機関：大分労働衛生管理センター、大分県地域成人病検診センター

学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター

病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、大分赤十字病院、湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、瀏野病院、介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、介護老人保健施設 健寿荘、介護老人保健施設 陽光苑、特別養護老人ホーム 百華苑
地域保健：大分市、佐賀関病院

4 卒業研究

- ・高齢者のための腹筋の筋力トレーニングとその評価方法の検討
- ・高齢者のための上腕三頭筋トレーニング方法の検討
- ・高齢者のウェスト周囲径と肥満指標（体脂肪率、BMI）との関係
- ・高齢者における運動継続の動機付けに関わる心理的要因の研究
- ・広汎性発達障害児の生活障害に関する実態調査
- ・小規模事業所労働者の生活習慣の実態と主観的健康観の関連

1 教育方針

個人、集団、地域へと視点を広げ、地域を包括的に捉えた看護活動を行うために必要な基本的な考え方、援助方法を身につけることを目的に、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論I、地域生活援助論II、地域看護学実習の科目を設けている。特に、講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習内容や実習方法等を工夫している。

2 教育活動の現状と課題

実習の場において、個人、集団、地域を対象とした看護展開ができるよう、学内演習では、実習場面を意識した課題を取り入れている。例えば、実習直前の演習では、地域の健康問題を踏まえた活動内容を理解できるよう、実際の実習地域の既存資料をもとに、地域看護診断を行った。また、個人を対象とした援助では、ペーパーペイシエントを用いた看護過程の展開、家庭訪問場面におけるロールプレイ、入浴、移動の基本的看護技術を取り入れ、地域における看護活動の視点や、具体的な援助技術について理解できるよう工夫した。実習終了後には、今後の演習内容を検討するため、訪問看護ステーションで体験した看護技術の項目や実施頻度について調査を実施した。今後も、社会や地域の動向に合わせて、常に、教育内容を検討する必要がある。

3 科目の教育活動

1) 地域看護学概論

2年次 後期前半

工藤 節美

地域における個人や家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視した地域看護学の基本的事項について講義した。主な内容としては、地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルス・プロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人と家族、集団と地域）、地域看護の変遷、大分県の地域看護活動である。資料やパワーポイントを活用して、学生の理解を深め、個人、集団、地域へと視点を広げるための工夫を行った。

2) 家族看護学概論

3年次 前期前半

工藤 節美

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に、家族看護過程の演習では、「家族を一つのユニット」として捉えて援助する意義や方法を理解させるために、ロールプレイによるカルガリー家族アセスメント・介入モデルに基づいた家族インタビューを取り入れ、具体的な体験を通して学びが深まるよう工夫した。

3) 在宅看護論

3年次 後期後半

工藤 節美、木下 結加里、一木 アサ子、大島 操、河野 智美

疾病や障害をもちながら在宅療養する人々とその家族に対する看護を行うために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、在宅看護の概念、在宅看護の活動の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、生活支援の方法、医療依存度の高い人のケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際、在宅看護過程の演習である。在宅看護過程の演習では、グループワークの方法を用いて、在宅療養を行っている療養者の事例（ペーパーペイシエント）に対する具体的な看護計画を立案した。さらに、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際では、大分県看護協会訪問看護ステーションで活動している看護師を講師として招き、具体的な活動内容や今後の課題等について学びを深めさせた。

4) 地域生活援助論I

4年次 後期後半

工藤 節美、江藤 真紀、木下 結加里、一木 アサ子、大島 操、廣田 裕子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習を行った。主な内容としては、地域看護活動の展開、地域看護活動の展開の演習、健康相談と家庭訪問、地域看護活動とヘルスプロモーション、母子保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、感染症保健活動の演習、精神保健活動、障害者保健活動、地区組織化活動における保健師の役割、災害看護活動、市町村の保健師活動である。特に、地域看護活動の展開の演習では、大分県内の某町を事例として用い地域看護診断を行わせ、既存資料の分析、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を学ばせた。感染症保健活動の演習では、結核患者の事例（ペーパーペイシエント）を用いて看護過程の展開を行い、問題解決のための具体的な支援方法について学ばせた。また、感染症保健活動の演習では、まとめの時間を設けて演習内容の評価をフィードバックすることで学びが深まるよう工夫した。さらに、地域看護活動とヘルスプロモーションでは県内の公衆衛生に携わる医師を、市町村の保健師活動では県内の町保健師を講師として招き、ヘルスプロモーションの理念に基づいた地域看護活動の実際について学びを深めさせた。今後は、法改正や保健事業の見直し等によりますます複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解させるための授業内容の検討が必要である。

教育方法については、学生の理解を深めてさせるためにパワーポイント、ビデオや資料は活用した結果、「具体的な活動のイメージができた」等の感想があった。今後も、授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の精選（質・量）と効果的な活用方法について検討していきま

5) 地域生活援助論II

4年次 前期前半

工藤 節美、木下 結加里、一木 アサ子、大島 操、高波 利恵、朝見 和佳

地域看護学実習前の演習として位置づけ、既存資料を用い実習地域の地域看護診断の実施と、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導、高齢者の入浴介助等のロールプレイを行った。各々の演習はグループワークを中心に進め、教員が各グループを巡回し、学生の理解度、技術習得状況に応じてきめ細かな指導を行った。特に、既存資料を用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導に反映させていただく資料とする等、地域看護学実習との有機的な連動に努めた。

6) 地域看護学実習

4年次 前期

朝見 和佳、安部 恭子、一木 アサ子、大島 操、甲斐 仁美、木下 結加里、工藤 節美、桜井 礼子、田村 充子、高波 利恵、玉置 奈保子、中原 基子、平野 亙、八代 利香、山下 早苗、吉田 智子

大分県下全域の県民保健福祉センター（保健支所を含む）及び保健所14、市町23、訪問看護ステーション25の施設に、それぞれ学生を2～5名配置して1～2週間の実習を行った。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職が実習場で直接的な指導を行い、担当教員は各施設を巡回して、中間及び終了カンファレンス指導、記録指導、実習施設や指導者との調整等を行った。実習内容は、市町と訪問看護ステーションではそれぞれ少なくとも1名の対象者への訪問指導、また市町では地区視診と集団を対象とした健康教育を体験することとした。今後は、保健所の再編や機能強化、法改正や保健事業の見直し等の社会の変化や保健医療福祉システムを踏まえ実習内容や実習形態の工夫が必要である。

4 卒業研究

- ・ 介護予防活動にかかわるボランティアに対する研修内容の検討
 - － 老人サロン協力者の経験年数と介護予防活動への関心に着目して－
- ・ 保育所を利用する保護者が期待する行政保健師の役割
 - － 3歳児健康診査以降の子どもをもつ保護者のニーズから－
- ・ 文献にみる介護保険制度導入後の在宅高齢者虐待の課題

3-5-16 国際看護学研究室

1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, develop an understanding of global health issues and strategies; realize roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses. Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out. Two elective courses for post-graduate students, one each for master's and doctorate, are open.

Faculty members;

Baccalaureate courses;

Lee So Woo, RN, PhD, Professor,

Yatsushiro Rika, RN, PhD, Assistant Professor

Post-graduate courses;

Lee So Woo, RN, PhD, Professor,

Sakurai Reiko, RN, PhD Candidate, Professor,

Yatsushiro Rika, RN, PhD, Assistant Professor

2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities;
Texts, presentations and Q and A are carried out in English.

To promote the understandings, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual presentations, followed by tests on the previous texts one week after each presentation.

English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study;

For the Seminar, detailed-orientation programs; on the themes of self-studies, references, method of presentations, and locus of group-studies were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-studies and choice of the themes are assigned to the students, for the autonomy of the class-leader.

Active and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students;

Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

3 科目の教育活動

1) 国際看護学概論

2年次 後期前半

李 笑雨、八代 利香

Objectives and contents;

1. to develop an understanding of the concept of, and, to define international health and international nursing.
2. to describe the background, course and trends of international cooperation in, and globalization of, health care.
3. to understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. to develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. to develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation to the course
2. Introduction of international nursing
3. Trends of international nursing and health
4. Preparation for international nursing
5. Global health issues, challenges and strategies
6. International Health Networks; World Health Organization
7. International nursing networks; International Council of Nurses
8. Wrap-up, evaluation of the course

2) 國際看護比較論

3年次 後期後半

李 笑雨、八代 利香

Objectives:

1. to develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. to develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. to develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Orientation to the course and overview of international nursing
2. Concepts related to international nursing and international health
3. Culture and global health strategies
4. Human resources; planning and development for global health and nursing
5. International relief organizations; activities during war and disasters (JICA)
6. International relief organizations; activities during war and disasters (IFRC)
7. Global Nursing Workforce; status, issues and strategies (10.14.2006)
8. Wrap-up, evaluation of the course

Evaluation;

Written test on the course content

Written Reports submitted by the students of the 8th International Nursing Forum

3) 国際看護学演習

3年次 後期後半

李 笑雨、八代 利香

Objectives of the Course:

1. to develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. to develop understanding of the system of, and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. to develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group studies and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard aid and equipment for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4-5, according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Human resources for health or/and nursing of a nation
- IV. Impact and context of aids of JICA

Evaluation;

Group-work; contents (reports), participation, presentations in the class room (verbal, visual aids)

4 卒業研究

- ・日本と韓国における看護師の患者に対する陰性感情と対処
- ・看護学生の国際看護・国際保健に対する認識－1年生と4年生の比較－
- ・大学生の月経に対するイメージとセルフケア－日本と韓国の比較－

3-5-17 共通科目

1) 自然科学の基礎

1年次 前期

甲斐 倫明、品川 佳満、吉田 成一、岩崎 香子、定金 香里、佐伯 圭一郎、中山 晃志

人間科学講座の教員で分担講義を行った。入学直後の全体の学力を調べるための試験を行い、講義レベルの参考にした。講義内容は次の通りである。(1) 20世紀の自然観革命、(2) なぜ、天気予報の単位は変わったか(SI単位系)、(3) 熱と圧力、(4) 情報とは何か、(5) 化学の基礎、(6) 有機化合物の構造、(7) 有機化合物の反応性-1、(8) 有機化合物の反応性-2、(9) 生命の誕生と遺伝子の起源、(10) 生物の多様性と進化、(11) 体細胞分裂とDNAの複製、(12) 配偶子形成と個体発生、(13) 確率の基本-1、(14) 確率の基本-2、(15) 数学における2つの重要な記号、(16) 微分・積分法の話

2) 健康科学実験

2年次 後期

1) 組織学実習(担当者:岩崎 香子、高橋 敬)、2) 血液生化学実験(担当者:安部 眞佐子)、3) 血液検査(担当者:定金 香里)、4) 基礎微生物学実習(担当者:吉田 成一)、5) ラットの解剖(担当者:市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里)、6) 室内空気汚染と水質汚染(担当:甲斐 倫明)、7) 放射線(担当:小嶋 光明)、8) 染色体異常(担当者:伴 信彦)、9) 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定(当者:稲垣 敦)、10) 心電図の成り立ちと心拍解析(担当者:吉武 康栄)

本健康科学実験では、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、10テーマからなる実験を行った。

3) 総合人間学

4年次 後期前半

栗屋 典子(学長補佐)

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師のものの見方や考え方を通して、人間として、また医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を出して参加を促している。

4) 総合実習

4年次 前期後半

栗屋 典子(学長補佐)

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第4段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設(部署)には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育・実習小委員会所管の総合実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担している。学生は配置決定後の2月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行った。実習に際して担当教員は学生に同伴はしないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の37施設の協力を得て実習を行った。

5) 看護研究の基礎 I

3年次 後期後半

栗屋 典子 (学長補佐)

本科目は、卒業研究の意義や論文作成までの一連の過程で必要とされる基本的な考え方、基本的知識や技術を習得することを目的としている。講義は2日間集中して行った。

講義のテーマと講師は以下の通りである。

1日目

- | | |
|----------------|-------|
| 1) 卒業研究の意義 | 藤内 美保 |
| 2) 研究の倫理と安全 | 関根 剛 |
| 3) 実験研究の進め方の基礎 | 定金 香里 |
| 4) 調査研究の進め方の基礎 | 高波 利恵 |

2日目

- | | |
|-------------------|--------|
| 5) 文献検索の方法・文献の入手法 | 大賀 淳子 |
| 6) データ解析の基礎 | 品川 佳満 |
| 7) 文献研究の進め方の基礎 | 小嶋 光明 |
| 8) 論文のまとめ方・発表の方法 | 小西 恵美子 |

6) 看護研究の基礎 II (原著購読)

4年次 前期～後期前半

栗屋 典子 (学長補佐)

本科目は卒業研究に関連する原著、原書を検索、選択、講読し、専門論文の大意を把握し、研究を行う上での論理的な展開法を学ぶことを目的としている。学生は研究期間内に3編の論文についてまとめ、それぞれの研究室で行う抄読会で発表した。

7) 看護研究の基礎 II (総合看護学)

4年次 後期前半

栗屋 典子、桜井 礼子、伊東 朋子、藤内 美保、大賀 淳子、八代 利香、小野 美喜、山下 早苗、木下 結加里

本科目は看護基礎教育の総仕上げとして位置づけ、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことを目的としている。

具体的には、成人・老年、母性、小児、在宅、精神など専門領域から示された課題事例を2グループずつに割り当て、それぞれがグループワークを通してアセスメントすると共に、看護技術のロール・プレイを行い、その発表に対する他グループおよび教員からの質疑に回答する、という方法で行った。

3-6 大学院における教育活動

3-6-1 博士（前期）課程

1) 看護アセスメント特論

前期

小西 恵美子、高野 政子、藤内 美保、伊東 朋子

看護アセスメントの枠組み、研究方法、そのクリティークについて教授し、次いで、各自の研究の計画と看護アセスメントとの関わりについてプレゼンテーションさせ、それについてディスカッションした。講義内容に関連したディスカッションを密度こく行い、学生の理解を深めることができた。

2) 精神保健学特論

1年次 前期

影山 隆之、大賀 淳子

前半では、精神保健看護学の研究方法について、オリジナルのハンドアウトに基づき講義し、特に研究のストーリー性について強調した。参加者各自が関心を持つ研究課題等は異なることを考え、ストレス、睡眠など、最近の精神保健学領域のトピックについて、具体的な研究例を紹介し、論文としてのまとまりから遡って研究計画を考える必要性を強調した。参加者が少人数なので、具体的に深い討論が可能であった

後半では、精神障害と運動、精神障害に対する態度などをテーマとし、先行研究の検討およびディスカッションを通して、内容を深めた。各参加者は過去の実践に基づく問題意識を有しており、活発なディスカッションとなった。

3) 基盤看護学演習

1年次

小西 恵美子、伊東 朋子、藤内 美保、高野 政子

開講せず

4) 成人老年看護学特論

1年次 後期前半

赤司 千波

成人発達とエイジングについて講義・討論、成人・老年期を踏まえた課題発表等を通して、成人・老年期の発達課題・健康問題への理解を深めるために教授した。

5) 生殖看護学特論

1年次 後期後半

宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

今年度は夜間中心に行った。課題は、これまで母性看護過程の展開では、問題解決過程を中心とした方法論がとられていたが母性看護の基本は健康増進であるため問題解決理論の応用に限界を感じている。最近、ウェルネスの視点からの理論がアメリカでは開発されつつあるため、母性看護過程の更なる検討を進めていくために、先ず標記テキストで健康増進のためのウェルネス看護診断の知識を深め、母性看護にどのように応用できるかを検討することにした。すすめ方は、テキストの抄読をし、母性看護への応用についてディスカッションを行い理解を深め、より質の高い実践力を高めることをねらいとした。

6) 母性看護学特論 1

1年次

宮崎 文子、小西 清美、工藤 節美

開講せず

7) 母性看護学特論 2

1年次

宮崎 文子、林 猪都子、佐藤 昌司

開講せず

8) 母性看護学特論 3

1年次

宮崎 文子、影山 隆之、小西 清美、松本 英雄、安部 眞佐子

開講せず

9) 母性看護学特論 4

2年次

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美、吉田 成一

開講せず

10) 母性看護学演習 1

1年次

林 猪都子、小西 清美、宮崎 文子

開講せず

11) 母性看護学演習 2

1 年次

小西 清美、宮崎 文子、林 猪都子

開講せず

12) 母性看護学演習 3

1 年次

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美

開講せず

12) 母性看護学演習 3

1 年次

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美

開講せず

13) 母性看護学演習 4

2 年次

小西 清美、林 猪都子、宮崎 文子

開講せず

14) 母性看護学実習

2 年次

宮崎 文子、林 猪都子、小西 清美

開講せず

15) 発達看護学演習

宮崎 文子

修士論文テーマについて文献検討、原書購読、研究相談・指導・助言を行った。

16) 地域看護学特論

1年次 前期後半

工藤 節美

前半は、公衆衛生看護活動の原点であるヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域看護活動を支える概念と地域看護診断の意義、方法、評価方法等を系統的に教授した。後半は、受講生の研究課題や興味・関心と関連づけた講義、受講生による課題発表、ディスカッションを通して地域看護学の理解を深めさせた。今後も受講生の背景や研究課題をふまえたうえで、講義内容、授業方法の工夫を行っていきたい。

17) 国際看護学特論

1年次 後期後半

李 笑雨、桜井 礼子、八代 利香

Course Description:

This course is an introduction to the some strategies for analyze and evaluation of a global perspective of health and nursing issues using some nursing theories. The nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing for analyze and evaluation of the international nursing and health are examined.

Course objective:

1. Explains the nature of scientific inquiry and explanation
2. Explains how the components of a theory are related and function in description and explanation.
3. Explains philosophical controversies in current thought on nursing science and nursing knowledge development
4. Applies criteria for theories to evaluation of theories used in international nursing
5. Evaluates alternative strategies for developing international nursing
6. Evaluates globalization and cooperation network for international health and nursing

Course Outline:

12/07: 2006:

Introduction to Course,

Students and faculty start to get to know each other and the class requirements

Study Questions:

1. What are your expectations and objectives for this class
2. What do you want to know about the Structure and Use of Nursing Knowledge; the structure of contemporary nursing knowledge

12/14: 2006

Implementing nursing models and theories in International Nursing practice.

As an example of theoretical development, development process of culture care is discussed

Study Questions

1. Identify and analyze one of the processes in the development of culture diversity
2. What strategies are you thinking of using for analyzing international nursing?

12/21: 2006

Analysis and Evaluation of conceptual models of nursing;

Madeleine Leininger–Culture Care: Diversity and Universality Theory

Study Question:

1. What criteria would you use to determine the effectiveness of a theory
2. What is the difference between analysis and evaluation or critics

01/11: 2007

Independent Group Work:

Comparative on the Cultural assessment tools with Leininger, Andrew, and Purnell etc.

Class time is provided for groups to meet to discuss comparative survey on the cultural assessment tools study

Study Questions:

What are the differences assessment points among these tools?

01/18: 2007

Independent Group Work:

Critics for the proposals for the nursing meta-paradigm of some theorists.

Class time is provided for groups to meet to discuss the proposals for the nursing meta-paradigm study

Study Questions:

1. What is the definition and function of each component of the structural hierarchy of contemporary nursing knowledge
2. Discuss about the proposals for the nursing meta-paradigm

01/25: 2007

Theory Evaluation

The issues for discussion are those concerning how one chooses among theories.

Students may develop their own ideas about the critical questions they would ask of nursing theory.

Peplau' s Theory of Interpersonal Relations

Orlando' s Theory of the Deliberative Nursing Process

Study Question:

1. What criteria would you use to determine the effectiveness of a theory
2. Discuss differences between Peplau and Orlando' s theories

02/01: 2007

Theory Evaluation

Watson' s Theory of Human Caring

Study Question:

What criteria would you use to determine the effectiveness of a theory

01/25: 2007

Clinical Topics and Issues in International Nursing

Group Presentation for Culture assessment Tools

Study Question:

What is globalization issues of nursing and health?

02/01: 2007

Group Presentation for Implementing Theory using Peplau' s Theory (for Poverty)

Study Question:

What strategies are you thinking of using for developing international nursing issues?

02/08: 2007

Group Presentation for Implementing Theory using Watson' s Theory (for disable)

Study Question:

How do you use Watson' s theory for the development of international nursing ?

02/15: 2007

Group Presentation for Implementing Theory using Orlando' s Theory (for nation)

Study Question:

How do you use Orlando' s theory for the development of international nursing ?

02/22: 2007

Group discussion International nursing :A Blueprint for the future
Now is the time to think of the future of international nursing development. What scope, what area, what strategies, processes should we project for the future.
What are the different possible scenarios for international nursing that may evolve.

18) 放射線保健学特論

開講せず

19) 広域看護学演習

2年次

李 笑雨、草間 朋子、工藤 節美

開講せず

20) 生体機能学特論

前期前半

高橋 敬、安部 眞佐子

生体機能学特論は1) 内部環境、2) ホメオスターシス、3) ヒエラルキーを中心に、生体を構築する「シート」形成について言及した。パワーポイントと動画を使い、フォーラム的な講義形態をとった。

21) 病態機能学特論

1年次 前期

市瀬 孝道、吉田 成一

生体の防御システムについて、特に免疫やアレルギーのメカニズムについてハンドアウトを用いて詳しく講義した。また、看護研究の中の実験的研究の進め方について講義し、我々が用いる分析手法が看護研究にも応用可能であることを理解させた。更に、生体反応学研究室で行われている研究成果、例えば、大気粉塵のアレルギー増悪作用や環境有害物質の胎児への影響等を紹介し、研究を行う意義や必要性について教授した。

22) 健康増進科学特論

博士（前期）課程 前期（昼間）・後期（夜間）

稲垣 敦

科学的な考え方から始め、看護職が臨地で健康増進活動を進める上で重要な概念や項目の解説と測定実習をおこない、レポートを作成した。

来年度は、心理学的な内容も取り入れる予定である。

23) 人間関係学特論

後期前半(昼間)・後期後半(夜間)

関根 剛、吉村 匠平

本講義では、受講生と話し合った上で、受講生の興味関心のあるテーマを選定し、プレゼンテーションを行い、それに沿った形で担当教員を交えたディスカッションを展開することで、看護学において必要とされる臨床心理学や教育心理学の知識の理解・修得を図る方法をとった。今年度、取り上げたテーマとしては、心理検査・調査の作成手順、説明・プレゼンテーションの検討、動機付けを高める方法、教師の健康管理サポートの方法など、それぞれのテーマに沿った話題を、内容によっては複数回の検討を行った。

24) 保健情報学特論

1、2年次 前期(夜間)

佐伯 圭一郎

以下の内容を取り扱った。基本的に、講義と討論、演習を組み合わせそれぞれの内容を学習した。内容はこれまでの経験を踏まえて、情報処理、統計解析などのトピックとして共通して関心を持たれ、役立つ内容を精選しているが、今回は受講生が多いため、個々の学生について、具体的なテーマとの関連を十分に深めることが困難であった。

- ・統計学、疫学の基本と研究計画における留意点
- ・サンプルサイズの設定 ・尺度の作成と評価
- ・SPSS応用と多変量解析 ・因果推論

25) 看護科学研究特論

前期前半(夜間)

草間 朋子、稲垣 敦、八代 利香

EBNの基礎となる看護科学研究の理論及び手法を概観し、研究を進める上で必要な技術的側面について教授した。8名の教員が分担し、それぞれの専門性を活かして講義した。

看護研究の意義・進め方	小西 恵美子
研究の倫理と安全	吉留 厚子
文献検索	高波 利恵
調査研究	工藤 節美
実験研究	安部 恭子
文献研究	藤内 美保
データ解析	稲垣 敦
論文の書き方・発表会	伴 信彦

26) 看護管理学特論

前期

粟屋 典子、小林 三津子、平野 亙

看護に関連した法制度、施設における看護管理の基本的理論、看護業務の安全管理、看護職の専門性と倫理責任、看護に関連した諸問題の解決に必要な基本的事項などについて教授した。本年度は受講生が少数であったことから、講義内容に関連したディスカッションができ、看護管理への理解をより深めることができたと考える。

27) 看護理論特論

1年次

小西 恵美子、伊東 朋子、藤内 美保

開講せず

28) 看護教育特論

1年次

小西 恵美子、宮崎 文子

開講せず

29) 看護コンサルテーション論

1年次

吉村 匠平、関根 剛

開講せず

30) 看護倫理学特論

1年次

小西 恵美子、平野 亙、関根 剛

開講せず

31) 看護政策論

1年次

草間 朋子、平野 亙、八代 利香

開講せず

32) 特別研究

1－2年次

各担当教員

修士論文

4名が修士論文の指導を受けて提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

1) 井伊 暢美

保健師に求められる広汎性発達障害児と保護者への支援ニーズの検討

主指導教員 平野 互、副指導教員 宮崎 文子、高野 政子

2) 尾立 智子

診療報酬制度における「看護料」の評価－看護ケア量の測定に因子評価を用いて－

主指導教員 小林 三津子、副指導教員 栗屋 典子、甲斐 倫明

3) 小野 さと子

在宅高齢者の終末期ケアの認識とQOLに関する研究－余命の認識、死の受け止め、治療決定者、生命維持治療の希望に焦点をあてて－

主指導教員 小西 恵美子、副指導教員 藤内 美保、稲垣 敦

4) 玉井 保子

先輩看護師の新人看護師への自己表現態度についての調査－アサーション的観点からの検討－

主指導教員 影山 隆之、副指導教員 高橋 敬、桜井 礼子

3－6－2 博士（後期）課程

1) 生命病態学特論

1年次

高橋 敬、市瀬 孝道

研究指導の中で炎症・免疫・アレルギー・ストレスについてゼミを行ない、これらの生体防御機構についての論文小読会等を行なった。

2) 健康増進学特論

博士（後期）課程 夜間（前期）・昼間（後期）

安部 眞佐子、稲垣 敦

開講せず

3) 保健情報科学特論

佐伯 圭一郎

開講せず

4) 精神保健学特論

前期

影山 隆之

精神保健看護学の研究方法について、概論と、実例（論文例）に基づく紹介・討論を行った。履修者が一人であったので、その実務的な課題に応じてインタビューや質的データの分析に関する方法論を特に多く扱った。

履修者は多くないことが今後も予想されるので、個々の必要に応じ柔軟に内容を考えてゆく方針である。

5) 放射線保健学特論

1年次 前期前半

草間 朋子、甲斐 倫明、伴 信彦

放射線の基礎から、最新のトピックスまでをカバーした。講義では学生との質問を交えながら行うように配慮した。評価には出席だけでなく試験を導入し、学生の理解の整理を促した。講義内容は次の通りである。（1）放射線とは何か、（2）放射線の健康影響、（3）労災補償、（4）妊娠と放射線、（5）医療放射線のリスクとベネフィット、（6）放射線従事者の健康診断、（7）緊急医療と防災

6) 看護基礎科学演習

後期

高橋 敬

乳腺の構造機能形成とリモデリングについて分子生物学的な観点から言及した。

7) 生活支援看護学特論

1学年

小西 恵美子、影山 隆之

開講せず

8) 看護管理学特論

1年次

粟屋 典子、小林 三津子

開講せず

9) 生殖看護学特論

宮崎 文子

前半はリプロダクティブヘルスにおける看護職の役割と援助のあり方について教授し、後半は受講者のニーズにそい課題を発見、問題解決の方策について探求した。

看護専門科学研究

後期

オムニバス形式

宮崎 文子：助産院等の臨地指導者と協力してリプロダクティブヘルスにおける看護職の役割を活性化し、質の向上を図るための方策・手段について追求した。

特別研究

博士論文テーマについて文献検討、原書購読及び論文の書き方（序章から総括）等の助言・指導を行った。

1) 梅野貴恵（3年次生）

(1) 「母乳育児期間と更年期症状の関係についての検討」

(2) 「授乳期の血中ホルモンの推移と更年期症状との関連」

(3) 「授乳期期女性の産後1年までの骨密度の実態」

(4) 「女性の更年期症状の発現モデルー長期母乳育児経験のある女性のデータに基づいて」

主指導教員 宮崎 文子、副指導教員 草間 朋子、甲斐 敏明

2) 大津佐知江（2年次生）

「外来看護のあり方に関する研究」

主指導教員：宮崎 文子、副指導教員：佐伯 圭一郎、草間 朋子

3) 実崎真美（1年次生）

「不妊外来における初診患者への心理的社会的支援のあり方に関する研究」

主指導教員：宮崎 文子、副指導教員：影山 隆之、大賀 淳子

10) 発達看護学特論

1年次 昼間：後期 夜間：後期

高野 政子

開講せず

11) 国際看護学特論

1年次

李 笑雨

開講せず

12) 看護専門科学演習

2年次

小西 恵美子、影山 隆之、粟屋 典子、小林 三津子、宮崎 文子、李 笑雨

開講せず

13) 特別研究

後期：1－3年次

各担当指導教員

博士論文

2名が博士論文の仮提出を行った。審査に必要な条件（学術雑誌への投稿2編）が整っていないために、審査は投稿論文の受理待って行われる予定である。論文題目および指導教員は次の通りである。

1) 梅野 貴恵

母乳育児と更年期症状との関連に関する研究－女性の更年期症状の発現のモデル化に向けて－
主指導教員 宮崎 文子、副指導教員 甲斐 倫明、草間 朋子

2) 甲斐 仁美

急性の痛みのアセスメントシートの開発－アセスメント過程の分析にもとづくアセスメントシートの作成および評価－

主指導教員 草間 朋子、副指導教員 桜井 礼子、藤内 美保

3-7 ボランティア活動（メンバーには学生を含めてください）

1) 第2回大分地区患者交流会、第12回日本ALS協会大分県支部患者・家族のつどい

伊東 朋子、高橋 敬、高橋 里江、鷹取 希美、鈴木 香奈実、高木 久美子、農山 桃子、竹下 亜希子、越智 巧太郎、田中 美智子、佐藤 里奈、浅田 哲哉、福光 麻希、後藤 成人、西平 俊哉、山口 暁子、出口 賢二、林 友里恵、赤池 直美、北住 京子、上田 治加、野口直美

神経難病研究会のボランティア活動の一環として平成18年7月9日第2回大分地区患者交流会、平成18年10月29日第12回日本ALS協会大分県支部患者・家族のつどいに参加した。

2) 自閉症児療育キャンプ

平野 亙、小野 美由紀（4年）、坂口 友香（4年）、手嶋 彬（4年）、山口 智治（3年）、衛藤 紘文（3年）、釜堀 真由美（3年）、佐藤 優（3年）、菅田 友香利（3年）、平 恵理子（3年）、出口 賢二（3年）、松信 麗（3年）、吉永 礼香（3年）、渡邊 裕美（3年）、田中 奈緒（2年）

大分県自閉症児・者親の会が主催する年少児の療育キャンプに参加した。この療育キャンプは大分市「のつはる少年自然の家」において平成18年8月19日（土）・20日（日）の1泊2日で行われ、学生は自閉症児またはきょうだい児とペアを組み、食事介助、音楽療法・運動療法やレクリエーションに取り組みながら、それぞれの児童の持つ障害の特性を理解し、保護者が学習会に参加する時間帯にはレスパイト・ケアを行ってキャンプの運営を支えた。

4 学内セミナー

4-1 英語多読教材貸し出し

この企画は、本学教職員の自己研鑽を目的として、英語多読教材を教職員に貸し出すもので、本学言語学研究室の宮内講師が中心となって行っている。英語を母語とする児童・生徒用に作られた児童書や、英語を外国語として学習している人のために語彙数、総語数、文法内容を厳選した多読教材(Graded Readers)を、自分の好みや技量に合わせて選び、読んでいくものである。読みやすい本を大量に読むことにより、英語への抵抗感や苦手意識を軽減し、同時に英文処理スピードと英語運用能力の向上を期待する。「楽しむ」ことを基本にしており、学習動機の長期維持が可能である。目標は総読書量100万語を超えること、辞書なしでペーパーバックが読めるようになることである。一年次生、二年次生に対する英語授業の一環として、この多読(Extensive Reading)が導入されている。本年度の実績は、平成19年2月末時点で、利用者数7名、総貸し出し冊数のべ382冊、最も多く利用した事例は、貸し出し冊数176冊であった。

5 学内プロジェクト研究

5-1 野津原プロジェクト

研究者 草間 朋子（学長）、桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、朝見 和佳（保健管理学）、影山 隆之（精神看護学）、稲垣 敦（健康運動学）、工藤 節美（地域看護学）、松尾 恭子（成人・老年看護学）、安部 恭子、玉置 奈保子（看護アセスメント学）、岩崎 香子（生体科学）、品川 佳満、中山 晃志（健康情報科学）

本年度は、「高齢者のQOLを向上させるための健康づくり：介護予防事業のあり方及びそれに関わる人材育成に関する検討」というテーマで研究に取り組んだ。

1 介護予防ボランティアの育成について

1-1) 介護予防ボランティアの認識や期待の検討

竹田市と協力して7回にわたりボランティア育成研修会開催し、参加者である60歳前後の男性26名に面接調査を実施し、現在、分析中である。

1-2) 運動継続要因の検討

大分市の3つのサロンの参加者140名に介護予防教室を1月おきに3回開催し、運動習慣、運動への関心・意義、介護予防運動の実施状況、運動自己効力感、運動実施による変化などを面接調査した。その結果、運動継続群にのみ運動自己効力感得点の有意な向上が認められ、また、継続群の方が非継続群よりも運動による成功エピソードが多かった。介入前の面接調査で、楽しさよりも効果を実感したい、目標を達成したいという意見が多かったことから、成功体験が得られるようなプログラムを提供することで自己効力感が高まり、運動継続につながると考えられる。

1-3) サロンの拡大と介護予防運動の普及

大分市社会福祉協議会、大分市高齢者福祉課、大分市保健所および大分県福祉保健部健康対策課を共同で介護予防事業に取り組み、サロン協力者研修会を7箇所で開催、パンフレット、ポスター、チラシ、カレンダー、ビデオの作成を行い、大分市内では指導者を300名育成し、167サロン6500名が介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」を実施した。また、県内でも十数箇所で開催した。

2 高齢者の筋力強化法について

高齢者のための腹部及び上腕部の筋力トレーニング法を提案し、その効果を評価した結果、特に腹部では6週間のトレーニングで腹筋力、起き上がり時間、上体起こしで有意な向上が認められた。

3 高齢者の体力評価について

3-1) 健診時における体力測定の実施とその活用法の提案

野津原地区60名に対して、健診時に体力測定4項目と問診（既往歴、生活習慣、ADL等）を実施した。過去のデータを合わせて、ADL等のリスク評価を行い、これを個別の保健指導に活かしてゆくシステムを提案する予定である。

3-2) 高齢者の体力評価基準の提案

高齢者の体力評価の目安として、ADLの動作が困難になるという点を設定するため、ロジスティックモデルを適用して、 $P=0.5$ の値を求めた。

6 先端研究

6-1 乱数で作成したデジタル画像のイメージ解析と生体反応定数

研究者 高橋 敬（生体科学研究室）

イメージプロプラス、フォトショップやNIHイメージ、イメージJなどを利用すると、イメージ解析から予想外の結果が得られることを日常的に経験する。画像を構成するピクセル（グレースケール）のヒストグラムや、そのビットマップをヒントにすると、もしランダムな数値から画像を作成すれば、どのようなものになるのだろうか。各種の画像データから、フラクタル次数（D）、パワースペクトラム（PS）、拡散定数（D'）、反応速度定数（k）などの検討を目的とした。その結果、画像の構造特性を示すフラクタル次数は大きいほど画像の複雑性を反映した。画像を空間周波数として分析したPSには、ランダムなノイズを特徴とした白色“ゆらぎ”（周波数fに無関係）のほか、画像に依存した各種のゆらぎ（ $1/f_n$, n : 整数や分数）が示唆された。拡散画像（サイト・パーコレーション、拡散パーコレーション）からは、フラクタル次数のほか、拡散定数や反応速度定数を求めることができた。したがって、デジタル画像は、各種の定数を決定できる要素から構成されることが示唆された。すなわち、さまざまな画像は多数のランダムな数値（初期値）が時間とともにある種の相互作用（2次元格子の確率モデルにおいて、上下左右に最近接になったら結合するなど）により構築されることを意味する。

6-2 勤労者の抑うつ症状の評価のためのDSSの有用性に関する基礎的研究

研究者 影山 隆之（精神看護学研究室）

地域や職場の健康診断でうつ状態の人を早期発見・早期支援するためのスクリーニングに使う問診票として、近年提案されたDSSは項目数をもっとも少なく、住民基本健診で成果をあげており、介護予防健診の問診票にも組み込まれた。さらにDSSは、過重労働者への医師面接ガイドラインに（厚労省）も導入されたが、実は職域におけるDSSの使用実績は乏しいので、その有用性を検討する必要がある。そこで某職場の定期健診において、DSSによる一次スクリーニングを行い、陽性者に構造化面接による二次面談を実施した。その結果、職域でDSSを単純に使うと偽陽性が多く、多くの対象者に二次面談を行う必要が生じて、スクリーニング法としては効率的でないことが示された。また、今回の一次問診票では職業性ストレス簡易調査票を併用したが、こうした既に確立している問診票を活用することで、DSSと同等以上のスクリーニングをできる可能性があり、かつその後の保健指導にも活用しやすいことが示唆された。

7 奨励研究

7-1 生体内搔痒物質によるアトピー性皮膚炎モデルマウスの作成

研究者 定金 香里 (生体反応学研究室)

アトピー性皮膚炎では、掻き崩しにより抗原や刺激物質などの環境因子が表皮から侵入し症状がさらに増悪すると考えられている。今回、生体内搔痒物質セロトニンを、アトピー素因を有するモデルマウスNC/Nga系の皮下に投与し搔破行動を誘発させアトピー性皮膚炎モデルとして有効か検討した。単回投与で高頻度に搔破行動を誘発する濃度である0.1、0.2 mmol/siteを、2日毎に1回、計8回皮下投与したが、アトピー性皮膚炎様病態はほとんどみられなかった。しかし、セロトニン1.0 mmolではダニ抗原投与よりも早期に表皮の傷害がみられた。また好酸球数の増加、総IgE量の増加もダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎モデルと同程度に認められた。以上の結果から、本モデルは環境因子が皮膚に接触後、皮下に侵入し何らかの影響を及ぼすことを想定したアトピー性皮膚炎モデルに活用できると考えられる。

7-2 口唇口蓋裂児等に発色チューインガム法による咀嚼能力測定の有用性の検討

研究者 高野 政子 (小児看護学研究室)

口唇裂児、口蓋裂児及び口唇口蓋裂児への看護職の役割は、患児の成長発達と生育に関する母親の不安や心配に適切に対応する精神的援助は勿論のこと、生活リズムを整え、生命維持のために必要な食行動など日常生活そのものを順調に過ごせるように支援することであると考え。本研究は、養育者が患児の咀嚼能力を評価できれば日常の咀嚼訓練なども行ない易いと考え、患児の咀嚼能力の現状とその評価方法について、発色チューインガム法による患児の咀嚼能力測定の有用性を検討した。簡便で小児の負担が最も少ないチューインガムは小児の好物でもあるので、小児の咀嚼能力を測る試料としては適している。測定の結果は、1) 患児群は健常児群に比べ測定値が高値を示した。2) 発色ガムの測定値と月齢は相関関係であった ($P < 0.05$)。3) ガム測定値は母親の準備する食物の固さと明らかな関連を認めなかった。発色ガム法の結果で咀嚼能力が月齢とともに高まるという結果は他の方法と同じであり、この方法の有用性が証明され、患児の母親が手軽に児の咀嚼能力を評価し確認できることが可能と考えた。

7-3 マウス白血病特異的遺伝子変異の高感度検出法の確立

研究者 伴 信彦 (環境保健学研究室)、大町 康 (放射線医学総合研究所)

放射線発がん研究に重用されるマウスの骨髄性白血病については、ここ数年の間に分子病態の理解が進み、Sfp1 (PU.1) 遺伝子の突然変異が白血病化の重要なステップであることが明らかとなった。白血病発症における放射線的作用を明らかにする上で、この変異がどのようなタイミングで生じるのかを明らかにすることが重要である。この問題について実験的なアプローチをするためには、多数の正常細胞に混在するごく少数の変異細胞を検出できなければならない。そこで本研究では、LNA (locked nucleic acid) プローブで正常遺伝子をマスクするwild-type blocking PCR、制限酵素処理によって正常遺伝子を分解するmutant-enriched PCRという2つの方法により、変異遺伝子のみを選択的に増幅・検出することが可能かどうかを検討した。

Wild-type blocking PCRでは、正常遺伝子の増幅を完全に抑制する一方で、変異遺伝子の増幅を阻害しない条件を見出した。この条件でPCRを行った場合、正常細胞中に1000分の1の割合で変異細胞が混在するサンプルにおいても、変異の検出が可能であった。Mutant-enriched PCRについては、ゲノムDNAがメチル化によって制限酵素処理耐性となっていたため、PCR反応生成物を電気泳動後にゲルから切り出して制限酵素で消化し、再度PCRをかけるという方法を試みた。しかし、過剰量の制限酵素を用いても消化は完全ではなく、また切り出しの際のコンタミネーションもあって、変異遺伝子のみを選択的に増幅することはできなかった。

7-4 養護学校における医療的ケアにかかわる看護師の役割

研究者 大島 操（地域看護学研究室）、安部 恭子（看護アセスメント学研究室）、新居 富士美

医療的ケアを必要とする子どもたちの増加に伴い、児童生徒等が安心・安全な学校生活を送るための環境作りの一環として平成16年から養護学校に看護師が配置されている。しかしこの制度は導入から日が浅く、学校という新しい分野での看護師の役割については明らかにされているとはいえない。そこで、本研究では、養護学校で医療的ケアに携わる看護師へのインタビューを通して語られた看護師の役割を検討することを目的とした。

養護学校で医療的ケアにかかわっている概ね勤務1年程度の看護師2名を対象に半構成的面接を実施した。逐語録を作成し、看護師自身が役割ととらえていると思われる部分を抽出し、帰納的に分析した。

111のコードから30の〈サブカテゴリー〉と5つの《カテゴリー》が得られた。最も多くのコードからなる《医療的ケアを実践する》では〈申し送りを受け物品を準備し待機する〉〈授業時間を確保するためにケア内容を調整する〉〈一日のケアの流れを確認する〉など日々のケアに関することが語られた。また、《保護者を支援する》では、〈母親の負担を減らす〉ことで、子どもを学校に通わせたいという保護者の〈希望をかなえる〉役割があると語った。また、〈主治医への対応をする〉、子どもが入院した際には〈病院と連携をとる〉ことで《医療関係者とかわる》役割があるととらえていた。さらに、担任へのアドバイスを行なう〈担任への支援〉や体制整備のための〈必要なシステムを要望する〉などの《学校関係者とかわる》役割があった。また、ケアに携わる者同士の関係調整が重要であるが、《関係者と連携をはかる》はコードが少なく、看護師がその中心的な役割を果たすべきとはとらえていないのかもしれないとも考えられる。今後、学校という新たな分野で勤務する看護師の役割を明らかにし、支援していく必要があると思われる。

7-5 学生からみた「よい臨地実習指導教員」とは

研究者 玉置 奈保子（看護アセスメント学研究室）、田中 真木（長野県看護大学）、安部 恭子、藤内 美保、小西 恵美子（看護アセスメント学研究室）

臨地実習における「よい・よくない臨地実習指導教員」について、学生たちの声に耳を傾け、今後の看護教育に生かしていくことを目的に、看護学生17名に半構成的面接を行い、その内容を質的に分析した。

実習に臨んだ学生は、「力を出し尽くしたい」「しどろもどろになる」「これでいいのか不安」「邪魔しているようで居にくい」「（勉強不足等で）情けない」「思い通りにできない」「病棟看護師の理不尽な指導に我慢」等の心境にある。「よい臨地実習指導教員」はそのような学生を「自分の力で乗り越えられた」「自信になった」「方向性がみえた」等のポジティブな方向に転換させることができていた。一方「よくない臨地実習指導教員」は、学生を「実習に行きたくなくなった」「個人的に嫌われているんじゃないか」「疑問が残ったまま終わった」等の気持ちや状態にさせていた。学生は「ねぎらい」「褒める言葉」「それでいいんだよと認める言葉」を心から欲しており、教員は「何かあったら私の責任だからさせない」ではなく、腹をくくって責任を引き受ける気持ちを持つことが大切である。看護の実践領域は広く深いので、一人の教員が全てを知っているとは限らず「知らない」ことは恥ではない。したがって、虚勢を張るのではなく、誠意を持って、共に学ぶ姿勢を学生に示すことが重要である。

7-6 培養細胞を用いた大気浮遊粉じんのアレルギー増悪作用機序の検討

研究者 吉田 成一、市瀬 孝道（生体反応学研究室）

大気汚染物質の一つである大気浮遊粉じんによる生体影響として、アレルギー炎症性肺障害やアレルギー増悪作用がある。これまでに我々は、*in vitro*培養細胞系を用い、大気浮遊粉じんの肺障害作用およびアレルギー増悪作用の有無を評価するスクリーニング系を確立した。そこで、本研究では、近年、アレルギー増悪作用が懸念されている黄砂について、黄砂のどの様な成分がアレルギー増悪に作用するか検討した。その結果、熱処理していない炎症性サイトカイン・ケモカイン mRNA発現量の有意な増加が認められたが、熱処理した黄砂ではそれらのmRNA発現量に有意な変動は認められなかった。このことから、ASDに付着しているペプチドグリカンやLPSがサイトカイン・ケモカイン発現誘導に関与していることが示唆された。

8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、昨年度名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第7巻1号が12月に刊行された。論文、執筆要項等は本学ホームページ (<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、ダウンロードすることができる。

第7巻1号

資料

養護学校における医療的ケアの実施者に対する保護者の望み
大島 操、安部 恭子、新居 富士美、影山 隆之

患者役割測定尺度の開発プロセス：入院患者の認識と看護師の期待から
門井 貴子、太田 勝正

高齢者のための足踏みを用いた全身持久力の間接的測定方法
高波 利恵、片瀬 由加里、草間 朋子

トピックス

ソウル国立大学校看護科学研究所第6回国際カンファレンス
影山 隆之

9 業績

9-1 著書

Kim S. J., Yatsushiro R. : International Nursing, Soo-Moon Sa Publishing Company, Seoul, 2006

Ohta S., Nakamoto H., Shinagawa Y., Kishimoto T. (Edited by Wootton R., Dimmick SL., Kvedar JC.) : Home Telehealth: Connecting Care Within the Community. Section 3: Application areas 18. Home health monitoring, 198-209, The Royal Society of Medicine Press, London, 2006

Lee S. W., et.al : Woman Stand up the Center of Sciences, Yang Moon publish com, Seoul, 2006

稲垣 敦、他 : 最新 スポーツ科学事典, 平凡社, 東京, 2006

影山 隆之 : 介護従事者のストレスと対策. 田中 秀樹 (編) : 高齢期の心を活かすー衣・食・住・遊・眠・美と認知症・介護予防ー, 239-263, ゆまに書房, 東京, 2006

影山 隆之、佐伯 圭一郎、藤野 奈緒、竹内 一夫、多賀谷 篤子、早川 東作、中野 良吾、元永 拓郎、佐久間 祐子、佐藤 純、坂本 真士、斎藤 友紀雄 : 青少年の自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究. 北井 暁子 (編) : 厚生労働科学研究補助金こころの健康科学研究事業 自殺の実態に持つ付く予防対策の推進に関する研究 平成17年度総括・分担研究報告書 I, 65-165, 国立精神・神経センター精神保健研究所, 小平, 2006

岩崎 香子 : 腎と骨代謝, 日本メディカルセンター, 東京, 2006

甲斐 倫明 (分担) : 放射線医科学ー生体と放射線・電磁波・超音波ー 大西 武雄監修, 学会出版センター, 東京, 2007

小西 恵美子 : 健康のイメージ, 34-37, 大西 和子、櫻井 しのぶ編 : ヘルスプロモーション, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2006

小西 恵美子 : 健康格差に対するヘルスプロモーションの実践, 230-233, 大西 和子、櫻井 しのぶ編 : ヘルスプロモーション, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2006

小西 恵美子 : 女性の骨粗鬆症とヘルスプロモーション, 234-235, 大西 和子、櫻井 しのぶ編 : ヘルスプロモーション, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2006

小西 恵美子 : 放射線の健康影響とその管理 : 新体系看護学別巻6『放射線診療と看護』、6-24, メヂカルフレンド社, 東京, 2007

上泉 和子 (編)、栗屋 典子 : 看護ユニットマネジメント. 10, 145-154, 医学書院, 2006

佐伯 圭一郎 : SPSSによる統計データ解析 (柳井 晴夫, 緒方 裕光編著) : 医学・看護学、生物学、心理学の例題による統計学入門, 現代数学社, 京都, 2006

9-2 翻訳

細谷 憲政、井上 倫、杉山 みち子、堤 ちはる、中島 香、三橋 扶佐子、安部 眞佐子
等：医薬品-栄養素の相互作用，第一出版，東京，2007

- Davis A. J., Konishi E. : Whistleblowing in Japan, *Nursing Ethics*, 2007 14(2), 194-202, 2007
- Bae J. Y., Lee S. W., Yoon S. H., An K. A. : Incidence of Depression among the Korean Population, 2006
- Ichinose T., Sadakane K., Takano H., Yanagisawa R., Nishikawa M., Mori I., Kawazato H., Yasuda A., Hiyoshi K., Shibamoto T. : Enhancement of mite allergen-induced eosinophil infiltration in the murine airway and local cytokine/chemokine expression by Asian sand dust., *J Toxicol Environ Health A*, 69(16), 1571-1585, 2006
- Inoue K., Takano H., Hiyoshi K., Ichinose T., Sadakane K., Yanagisawa R., Tomura S., Kumagai Y. : Naphthoquinone enhances antigen-related airway inflammation in mice., *Eur Respir J*, 29(2), 259-267, 2006
- Iwasaki Y., Yamato H., Nii-Kono T., Fujieda A., Uchida M., Hosokawa A., Motojima M., Fukagawa M. : Insufficiency of PTH action on bone in uremia., *Kidney International*, Suppl2, 234-237, 2006
- Iwasaki Y., Yamato H., Nii-Kono T., Fujieda A., Uchida M., Hosokawa A., Motojima M., Fukagawa M. : Administration of oral charcoal adsorbent (AST-120) suppresses low-turnover bone progression of in uremic rats., *Nephrol Dial Transplant*, 21, 2768-2774, 2006
- Iwasaki Y., Yamato H., Nii-Kono T., Fujieda A., Uchida M., Hosokawa A., Motojima M., Fukagawa M. : Uremic toxin and bone metabolism., *J Bone Miner Metab*, 24, 172-5, 2006
- Kazama J. J., Omori K., Yamamoto S., Ito Y., Murayama H., Narita I., Gejyo F., Iwasaki Y., Fukagawa M. : Circulating osteoprotegerin affects bone metabolism in dialysis patients with mild secondary hyperparathyroidism., *Ther Apher Dial*, 10(3), 262-266, 2006
- Miyauchi S. : Teaching Fluent Speech in English by means of Discourse Intonation
Transcription: Learners' mind in terms of Improvement and Further Issues, *EPSJ Journal English Phonetics*, No.9 & No.10, 2006
- Nakagawa K., Kanda Y., Yamashita H., Hosoi Y., Oshima K., Ohtomo K., Ban N., Yamakawa S., Nakagawa S. Chiba S. : Preservation of ovarian function by ovarian shielding when undergoing total body irradiation for hematopoietic stem cell transplantation: a report of two successful cases., *Bone Marrow Transplantation*, 37(6), 583-587, 2006
- Sadakane K., Ichinose T., Takano H., Abe M., Sera N., Yanagisawa R., Ochi H., Fujioka K., Lee K.G., Shibamoto T. : Murine strain differences in 8-hydroxy-deoxyguanosine formation in hepatic DNA induced by oxidized lard and dietary oils., *Food Chem Toxicol*, 44(8), 1372-1376, 2006
- Yoshida S., Ono N., Tsukue N., Oshio S., Umeda T., Takano H., and Takeda K. : In utero exposure to diesel exhaust increased accessory reproductive gland weight and serum testosterone concentration in male mice., *Environ Sci.*, 13; 139-147, 2006
- Izumi S., Konishi E., Yahiro M., Kodama M. : Japanese patients' descriptions of "The Good Nurse": Personal involvement and professionalism, *Advances in Nursing Science*, 29:2, E14-E26, 2006
- Shinohara M., Yoshitake Y., Kouzaki M., Fukunaga T. : The Medial Gastrocnemius Muscle Attenuates Force Fluctuations during Plantar Flexion., *Experimental Brain Research*, 169, 15-23, 2006

Suzuki K., Ojima M., Kodama S., Watanabe M. : Delayed activation of DNA damage checkpoint and radiation-induced genomic instability., *Mutat. Res.*, 597, 73-77, 2006

Takano H., Yanagisawa R., Inoue K., Ichinose T., Sadakane K., Yoshikawa T. : Di-(2-ethylhexyl) phthalate enhances atopic dermatitis-like skin lesions in mice., *Environ Health Perspect*, 114(8), 1266-1269, 2006

Yanagisawa, R., Takano, H., Inoue, K., Ichinose, T., Sadakane, K., Yoshino, S., Yamaki, K., Yoshikawa, T., Hayakawa, K. : Components of diesel exhaust particles differentially affect Th1/Th2 response in a murine model of allergic airway inflammation., *Clin Exp Allergy*, 36(3), 386-395, 2006

Yoshida S., Yoshida M., Sugawara I., Takeda K. : Mice Strain Differences in Effects of Fetal Exposure to Diesel Exhaust Gas on Male Gonadal Differentiation., *Environ. Sci.*, 13; 41-47, 2006

安部 恭子、大島 操、新居 富士美：障害をもつ子どもを養育中の母親の医療的ケアに関する考え，第37回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），132-134，2007

柿野 友美、藤内 美保、安部 恭子：臓器提供の意思とセルフ・エスティームの関連についての探索的調査，こころの健康 日本精神衛生学会誌，21（1）55-62，2006

吉武 康栄、品川 佳満、神崎 素樹、篠原 稔：児童の習慣的な運動が思春期後から調節に及ぼす影響，デサントスポーツ科学，27，145-153，2006

小西 恵美子、和泉 成子：患者からみた「よい看護師」：その探求と意義，生命倫理，16(1)，46-51，2006

甲斐 仁美、桜井 礼子、藤内 美保、草間 朋子：「急性の痛み」を伴う患者のアセスメント過程の分析，看護教育，48，3，257-264，2007

高瀬 恵子、吉留 厚子：電子レンジ、温湯、ブラシ、食器用洗剤を使用した哺乳瓶消毒方法の検討，母性衛生，47(1)，138-142，2006

高瀬 恵子、吉留 厚子：家庭における哺乳瓶消毒の実態および哺乳瓶消毒方法と児の疾患との関連，母性衛生，47(1)，134-137，2006

高波 利恵、緒環 祥子、木村 厚子、草間 朋子：基本健診で実施可能な全身持久力測定方法の検討—足踏みの際の心拍数・収縮期血圧を利用して—，保健師ジャーナル，63(6)，546-551，2007

高波 利恵、馬場 健太郎、草間 朋子：放射線診療および放射線被ばくの防護に関する看護師の知識・認識の実態，看護教育，47(6)，528-533，2006

高波 利恵、片瀬 由加里、草間 朋子：高齢者のための足踏みを用いた全身持久力の間接的測定方法，看護科学研究，7(1)，16-23，2006

今戸 啓二、池内 秀隆、三浦 篤義、伊東 朋子、大西 謙吾：簡易型腰部負担軽減具の開発，バイオメカニズム学会誌，バイオメカニズム18，2006

佐藤 純、影山 隆之：大学における自殺予防のための大学教職員向けガイドブックが備えるべき要件や留意点，こころの健康，22(1)，65-70，2007

坂本 真士、田中 江里子、影山 隆之：自殺の新聞報道の現状と問題点，こころの健康，21(2)，44-53，2006

桜井 礼子、藤内 美保、伊東 朋子：看護実践能力を伸ばす看護教育方法—大分県立看護科学大

山下 早苗、真鍋 美貴、高野 政子：外来通院している小児がん患者への告知に対する親のコーピング，日本小児看護学会誌，29号，90-97，2006

式司 美由貴、岡崎 寿子、八代 利香、宮内 信治、シャーリー・ジェラルド：臨床現場における看護職等の方言に関する体験と認識 ～大分弁体験集の作成～，九州農村医学会雑誌，15，36-42，2006

実崎 美奈、宮崎 文子、林 猪都子：拳児希望女性における不妊治療専門医受診前の心理，母性衛生，47(4)，518-528，2007

小西 清美、吉留 厚子、宮崎 文子、三苫 恵子、萱島順子、河野 富美代：授乳期における桶谷式乳房マッサージの効果，ペリネイタルケア，25(8)，2006

小西 清美、吉留 厚子、宮崎文子、神代雅晴：皮膚表面温度からみた産褥早期の乳房マッサージによる自律神経への作用，母性衛生，47(1)，99-106，2006

小西 清美、神代 雅晴、泉 博之：初学者である助産師学生の正面介助法分娩介助技術における作業姿勢および精神的負担の検討ー熟練助産師との比較，人間工学，42(4)，2006

小野 美喜：回復期リハビリテーション病棟看護師の退院援助における多職種との連携行動，日本看護学会誌，15(2)，88-96，2006

松岡 緑、川上 千普美、樗木 晶子、篠原 純子、長家 智子、赤司 千波、原 頼子：冠動脈インターベーションを受けた虚血性心疾患患者のQOLに関する因子，日本循環器看護学会誌，2(1)，24-33，2006

石井 敦子、藤内 美保、高橋 ゆか、安部 恭子：三次元解析装置を用いた熟練度の違いによる起き上がり介助動作の分析，看護教育，47(9)，814-821，2006

川上 千普美、松岡 緑、樗木 晶子、長家 智子、赤司 千波、篠原 純子、原 頼子：冠動脈インターベーションを受けた虚血性心疾患患者の自己管理行動に影響する要因ー家族関係および心理的側面に焦点をあててー，日本看護研究学会誌，29(4)，33-40，2006

大津 佐知江、佐伯 圭一郎、平野 互、栗屋 典子：看護ケアの評価尺度の1つとしての患者満足度の有用性に関する検討ーインスリン療法導入患者に対する教育に着目してー，日本看護学会誌，16(1)，123-128，2006

大塚 みゆき、高野 政子、山下 早苗、中原 基子：4ヶ月児を持つ母親の母子保健サービスの利用実態とサービスに対するニーズ，第37回日本看護学会（小児看護）論文集，119-121，2006

大島 操、安部 恭子、新居 富士美、影山 隆之：養護学校における医療的ケアの実施者に対する保護者の望み，看護科学研究，7(1)，1-6，2006

堤 雅恵、小林 敏生、影山 隆之、涌井 忠昭、澄川 桂子、田中 マキ子：要介護高齢者における睡眠・覚醒パターンと抑うつ度との関係ー認知機能の低下した施設入所者を対象とした検討ー，広島大学保健学ジャーナル，6(1)，25-31，2006

田淵 康子、宮崎 文子：子宮内膜症患者の看護の現状と課題ー看護者の問題の認識と看護に及ばず要因の分析ー，日本看護研究学会誌，29(1)，79-88，2006

渡部 綾、工藤 節美：育児不安をもつ母親の効果的介入ー家庭訪問における初期の関わりに着目して，保健師ジャーナル，63(3)，280-285，2007

梅本 恵、藤内 美保、安部 恭子：片麻痺の疑似体験装具装着時における床からの立ち上がり動作解析と筋電図変化，第37回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），321-323，2006

梅野 貴恵、宮崎 文子、河島 美枝子、関根 剛：更年期女性の更年期症状（SMI 得点）と心理社会的要因との関連－生きがい感、夫婦関係、Health Locus of Control に着目して－，母性衛生，47(1)，143-152，2006

八代 利香：韓国との教育・研究交流プログラム 国際的な視野を持った看護職者の育成を目指して，インターナショナルナーシングレビュー，29(4)，40-43，2006

八代 利香、吉留 厚子：日本と韓国における産後の母親に対する支援内容と満足度の二国間比較，母性衛生，47(4)，547-553，2007

八代 利香、松成 裕子、梯 正之：与薬エラーに関する定義－国内外の文献調査から調査票の開発に向けて－，安全医学，3(1)，31-41，2007

姫野 稔子、小林 三津子、今戸 啓二：看護動作における背負子型腰部負担軽減具の評価，日本看護学会誌，16(1)，10-20，2006

品川 佳満、岸本 俊夫、太田 茂：独居高齢者のための自動通報システムの開発と運用，医療情報学，26(1)，1-11，2006

品川 佳満、岸本 俊夫、太田 茂：季節変動に着目した独居高齢者の在宅行動データの解析，川崎医療福祉学会誌，16(1)，121-128，2006

平野 互：苦情解決とセカンドオピニオン－患者の権利オンブズマンに寄せられた相談事例から，医学のあゆみ，218(7/8)，731-735，2006

本田 裕子、安部 恭子、藤内 美保：多床室に入院している患者の年齢差からみるプライバシーの認識の違い，第37回日本看護学会論文集（成人看護Ⅱ），283-285，2007

和田 宣子、高野 政子、山下 早苗、中原 基子：1歳6ヶ月児を持つ母親の育児支援サービスの利用実態とニーズ，第37回日本看護学会論文集－小児看護－，116-118，2006

9-4 その他の論文

Ban N., Adachi N., Kai M. : Long-term radiation effects on hematopoiesis in mice, AOCRP-2 Proceedings (CD-ROM), 2006

Kai M, Kudo M, Ban N, Akahane K, Nishizawa K : Prediction of the Number of Diagnostic CT Examination and its Attributable Risk of Cancer in Japan, Proceedings of AOCRP-2 (CD-ROM), 2006

Ojima M., Ban N., Kai M. : Existence of threshold dose in the repair of radiation-induced initial DNA damage, AOCRP-2 Proceedings (CD-ROM), 2006

影山 隆之：職場のメンタルヘルスと「職場復帰」，産業保健おおいた，2006年秋号，4-5，2006

影山 隆之：騒音による睡眠への影響の評価について，騒音制御，30，435-441，2006

影山 隆之：ソウル国立大学校看護科学研究所第6回国際カンファレンス，看護科学研究，7(1)，24-26，2006

桜井 礼子：ウズベキスタン「看護教育改善プロジェクト」の活動を通して，大分県JICA派遣専門家連絡会会報，10，52-60，2006

桜井 礼子：看護ケアの質評価・改善市捨て身の運用に関する研究，看護，59(3)，40-43，2007

桜井 礼子、藤内 美保、伊東 朋子：看護基礎教育における看護技術の到達目標達成のための教育実践：「総合看護学」，看護展望，32(3)，2007

新居 富士美、安部 恭子、大島 操：消化管内視鏡検査における専門性としての看護師に求められる能力ー内視鏡部門に勤務する看護師を対象とした半構成的面接調査ー，日本看護研究学会雑誌，29(5)，103-108，2006

神志 那梨恵、吉田 智子、草間 朋子：看護基礎教育の課程で放射線防護に関する教育を受けた看護師の臨床現場での行動，INNERVISION，21(6)，84-86，2006

前田 ひとみ、影山 隆之、津田 紀子、高村 寿子、山田 美幸、加瀬田 暢子、松崎 一葉：新人看護師の離職を防止するエンパワーメントプログラムの開発，看護展望，32，791-795，2007

大島 操、安部 恭子、新居 富士美、影山 隆之：養護学校における医療的ケアの実施者に対する保護者の望み，インターネットジャーナル看護科学研究，7(1)，1-6，2006

藤内 美保：大分県立看護科学大学 第7回看護国際フォーラム「在宅看護の質向上のために」Dr. Elizabeth A. Madiganの講演から，看護科学研究，6(2)，1-3，2006

八代 利香：カザフスタン・セミパラチンスク地域の保健・医療・看護の現状と今後の課題，大分県JICA派遣専門家連絡会会報，9，4-9，2006

平野 互：はじめにーあるべき医療の姿とセカンドオピニオン：すべては患者のために，医学のあゆみ，218(7/8)，681，2006

Ban N., Adachi N., Kai M. : Long-term radiation effects on hematopoiesis in mice, The Second Asian and Oceanic Congress for Radiation Protection (AOCRP-2), Beijing, 2006. 10

Konishi E., Izumi S., Yahiro M., Kodama M. : Characteristics of the Good Nurse: Japanese patients' views and expectations, 8th World Congress of Bioethics, Beijing, 2006. 8

Arai F., Abe K., Oshima M. : Consultation Activities Concerning Physical Restraint of Elderly People with Dementia in Japan, 2007 World Congress on Aging and Dementia in Chinese Communities, Hong Kong, 2007. 3

Iwasaki Y., Yamato H., Fukagawa M. : Administration of pravastatin ameliorates suppressed bone formation in uremic rats without hyperparathyroidism., International Osteoporosis Foundation-Australia New Zealand Bone Mineral Research Joint Meeting, Australia, 2006. 10

Kageyama T., Fujii S. : The association of coping profile among managers of a company in Japan with their coping with a worker with depressive symptoms and suicidal thought, 12th Pacific Rim College of Psychiatrists Scientific Meeting, Taipei, 2006. 10

Kai M. : Biologically-based modeling for radiation carcinogenesis, International Workshop on low dose radiation effects, New York, 2006. 4

Kitazawa M., Maeda J., Takayama S., Nakamura S., Stanley G., Nosaka T., Tanaka T., Miyama T., Yoshizawa K., Fisher A., Konishi E. : Development of an assessment form and teaching tool for use by staff working in an osteoporosis screening and health promotion clinic in Japan, International Osteoporosis Foundation World Congress on Osteoporosis, Toronto, 2006. 6

Kai M., Kudo M., Ban N., Akahane K., Nishizawa K. : Prediction of the Number of Diagnostic CT Examination and its Attributable Risk of Cancer in Japan, The Second Asian and Oceanic Congress for Radiation Protection (AOCRP-2), Beijing, 2006. 10

Maeda J., Kitazawa M., Fisher AL., Konishi E., Takayama S., Yoshizawa K., Stanley G., Nosaka T., Tanaka T., Miyama T. : Developing self-evaluation risk assessment tool (version 1) for osteopenia using data mining techniques, International Osteoporosis Foundation World Congress on Osteoporosis, Toronto, 2006. 6

Ojima M., Ban N., Kai M. : Existence of threshold dose in the repair of radiation-induced initial DNA damage., The Second Asian and Oceanic Congress for Radiological Protection, Beijing, 2006. 11

Fujimoto S., Yatsushiro R. : Nurses' Job Satisfaction A Comparison; Japan, UK and US Literature Review, Resourcing Global Health Conference, Glasgow, Scotland, 2006. 6

Sadakane K., Ichinose T., Fujioka K., Shibamoto T. : Oxidized Lard and Dietary Oils Induce Liver Carcinogenesis and Formation of 8-hydroxy-deoxyguanosine, American Chemical Society 232nd National Meeting & Exposition, San Francisco, 2006. 9

Izumi S., Konishi E., Yahiro M., Tanaka M. : Who is a good nurse? A comparison of the view between patients with and without cancer, 2nd International Conference Japanese Society of Cancer Nursing, Tokyo, 2007. 2

Kudo S., Yamamoto A. : Activities and Role Perceptions of Long Term Care Prevention Project Volunteers, The 2nd International Nursing Forum Legislature and Nursing Profession in North East Asia, China Yanji City, 2006. 7

- Kamihoriuchi T., Kai H., Tsang A., Yatsushiro R. : Nursing students' perceptions about death A comparison between Japan and Hong Kong-, 2006 International Symposium Proceeding, The 2nd International Nursing Forum, Yanbian University of Science and Technology, Yanji, China, 2006. 7
- Yoshitake Y., Shinohara M. : Unintended activity in a contralateral hand muscle is greater during ballistic than steady isometric contractions, Annual meeting of the Society for Neuroscience, Atlanta, USA, 2006. 10
- Yoshitake Y., Shinohara M. : Small lateral displacement of the muscle represents low-frequency force fluctuations during voluntary contractions in humans, Annual meeting of American College of Sports Medicine, Colorado, USA, 2006. 6
- 安田 亜希子、吉留 厚子 : 分娩後1~5日目における桶谷式乳房マッサージ前後の乳房皮膚表面温度の変化, 第47回日本母性衛生学会, 名古屋, 2006. 11
- 安部 恭子、大島 操、新居 富士美 : 障害をもつ子どもを養育中の母親の医療的ケアに対する考え, 第37回日本看護学会 成人看護Ⅱ, 大分, 2006. 8
- 安部 眞佐子、薬師寺 舞、吉留 厚子、堤 ちはる : 助産師による妊婦の体重コントロール目標値の設定について, 第60回日本栄養・食糧学会大会, 静岡, 2006. 5
- 井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一 : ナノ粒子のアレルギー性気道炎症への影響 第2報, 第18回日本アレルギー学会春季臨床大会, 東京, 2006. 5
- 井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一 : ナノ粒子の経気道曝露によるアレルギー性気道炎症への影響, 第47回大気環境学会, 東京, 2006. 9
- 井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一 : ナノ粒子の経気道曝露は抗原誘発アレルギー性気道炎症を増悪する, 第46回日本呼吸器学会学術講演会, 東京, 2006. 6
- 井上 典枝、宮崎 文子、小西 清美 : 女子高校生の月経随伴症状とライフスタイル・ライフイベントとの関連, 第21回日本助産学会学術集会, 大分, 2007. 3
- 稲垣 敦 : 介護予防・転倒予防のための体力水準と評価基準, 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10
- 影山 隆之、高島 亜沙子、井上 幸子、大賀 淳子 : 介護予防の新提案—在宅高齢者のための快眠指導の効果, 第65回日本公衆衛生学会総会, 富山, 2006. 10
- 影山 隆之、前田 ひとみ、山田 美幸、津田 紀子、高村 幸子、松崎 一葉 : 新採用になった病院看護師の自尊感情と職業性ストレス・精神健康との関連, 平成18年度日本産業衛生学会九州地方会学会, 久留米, 2006. 7
- 影山 隆之、藤井 沙織、小林 敏生 : 管理職自身のストレス対処特性とうつ状態・自殺の危険が疑われる部下への対応の関連, 第79回日本産業衛生学会, 仙台, 2006. 5
- 河野 優子 小野 美喜 : 介護老人保健施設スタッフの高齢者の性に対する知識・態度と性的言動への対応, 日本看護研究学会, 別府, 2006. 8
- 梶原 千佳、宮崎 文子、梅野貴恵 : 妊娠からみた産後の生活に関する不安の実態—初経別・職業の有無別比較—, 第21回日本助産学会学術集会, 大分, 2007. 3
- 葛城 幸江、林 猪都子、宮崎 文子 : 妊娠期の女性における冷え性の実態と不快症状の関連, 第

関根 剛: カウンセリングについて, 佐伯市役所国民保険課 ヘルスコーディネーター養成講座, 佐伯, 2007. 1

岩崎 香子、岡崎 亮、菅野 三喜男、村山 寿、大和 英之、高橋 敬: 糖尿病における低代謝回転骨は腎機能低下の負荷で無形整骨症へと加速進展する, 第49回日本腎臓学会学術集会, 東京, 2006. 6

岩崎 香子、小野 奈月、高橋 敬: 脂肪細胞におけるアポトーシスの誘導と抑制に関する可溶性組織因子(sTF)の意義, 第29回日本血栓止血学会学術集会, 栃木, 2006. 11

岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史: プラバスタチンは二次性副甲状腺機能亢進症を伴わない慢性腎不全で発症する低代謝回転骨の骨形成機能を改善する, 第24回日本骨代謝学会, 東京, 2006. 7

吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、武田 健、市瀬 孝道: 気管内ナノ粒子投与によるマウス雄性生殖機能への影響, 第9回環境ホルモン学会研究発表会, 東京, 2006. 11

吉田 成一、平山 智美、高野 裕久、市瀬 孝道: 培養細胞を用いた大気中粒子状物質のアレルギー増悪因子の評価, フォーラム2006: 衛生薬学・環境トキシコロジー, 東京, 2006. 10

吉田 成一、平山 智美、平野 靖史郎、市瀬 孝道: 培養細胞を用いた大気浮遊粉塵のアレルギー増悪作用評価, 日本薬学会第127年会, 富山, 2007. 3

吉田 裕美、伊東 朋子: 気管内吸引の手技における安全・安楽に関する文献研究—挿入時の圧の有無と長さに焦点を当てて—, 第37回日本看護学会 成人看護Ⅱ, 大分, 2006. 9

宮崎 紀枝、百瀬 由美子、麻原 きよみ、梅田 麻希、大森 純子、小林 真朝、尾崎 章子、加藤 典子、長江 弘子、酒井 昌子、小野 若菜子、小西 恵美子: 学士課程における地域看護の倫理教育プログラムの開発と評価第3報: 地域看護領域の倫理的課題の特徴と理解, 第26回日本看護科学学会, 神戸, 2006. 12

宮崎 文子、斉藤 益子、一瀬 いつ子、遠藤 俊子: 医療機関における助産ケアの質に関する検討—自己点検のための評価基準による妊娠期のケア—, 日本母性衛生学会学術集会, 名古屋, 2006. 10

宮内 信治: 英語多読導入とその効果: 英語学習に対する学習者の意識の変化 Introduction of English extensive reading and its effects: Learners' psychological changes in terms of English learning, 第35回九州英語教育学会 熊本研究大会, 熊本, 2006. 11

桑野 紀子、林 猪都子、宮崎 文子: 妊娠中のカフェイン摂取の実態と喫煙との関連, 第21回日本助産学会学術集会, 別府, 2007. 3

工藤 節美、久土地 晶代: 介護予防ボランティアの特性と家庭内役割, 日本老年社会科学会, 兵庫, 2006. 6

溝越 由美子、安部 恭子、高橋 ゆか、藤内 美保: 女性の年代別骨密度変化と朝食・運動との関連, 第37回日本看護学会 成人看護Ⅱ, 大分, 2006. 8

甲斐 倫明、岡崎 昌介、伴 信彦: 血液幹細胞動態を取り込んだ白血病発症数理モデルの検討, 日本保健物理学会第40会研究発表会, 広島, 2006. 6

甲斐 倫明、伴 信彦: 原爆被ばく生存者のALL発症機構を考察するための白血病発症数理モデル, 日本放射線影響学会第49回大会, 札幌, 2006. 9

黒木 七瀬、吉留 厚子: 分娩後8日目~5ヶ月における桶谷式乳房マッサージ前後の乳房皮膚表面温度の変化, 第47回日本母性衛生学会, 名古屋, 2006. 11

- 桜井 礼子：国際協力・交流を通しての看護の人材育成 ウズベキスタン「看護教育改善プロジェクト」，第26回日本看護科学学会交流集会，兵庫，2006. 12
- 桜井 礼子、栗屋 典子：Web版看護ケアの質評価総合システムにおける患者・家族の満足度調査を用いたアウトカム評価の検討，第10回日本看護管理学会，東京，2006. 8
- 桜井 礼子、高野 政子：国際協力・交流を通しての看護の人材育成（交流集会における座長），第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12
- 山下 早苗、高野 政子、中原 基子、大塚 みゆき、和田 宣子：乳幼児を持つ母親の育児支援ニーズと利用実態に関する研究，第12回 大分県小児保健学会，大分，2006. 9
- 山岸 まなほ、小林 敏生、影山 隆之：アサーションウェブ教材の看護師の学習効果－アサーション得点変化の関連要因，第65回日本公衆衛生学会総会，富山，2006. 10
- 山岸 まなほ、小林 敏生、影山 隆之、上田 恵美子：看護師の抑うつ度、職業性ストレス要因、ストレス対処特性の検討，第26回日本看護科学学会学術集会，神戸，2006. 12
- 山田 美幸、前田 ひとみ、津田 紀子、久保 江里、影山 隆之：新卒看護師の離職に係る職務上の悩みと仕事の継続理由－2 県の新卒看護師を対象とした質問紙調査，第32回日本看護研究学会学術集会，別府，2006. 8
- 市瀬 孝道、定金 香里、吉田 成一、高野 裕久、井上 健一郎、柳澤 利枝、川里 浩明、安田 愛子：アスペルギルス、カンジダ、アルテルナリア抗原によるマウス喘息モデル，第56回日本アレルギー学会秋季学術大会，東京，2006. 11
- 市瀬 孝道、定金 香里、吉田 成一、日吉 孝子、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、川里 浩明、安田 愛子：加熱黄砂と非加熱黄砂のマウス肺アレルギー炎症への影響について，第47回大気環境学会，東京，2006. 9
- 市瀬 孝道、定金 香里、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、日吉 孝子、川里 浩明、安田 愛子：銀川市大気中から採取した自然黄砂と黄土高原黄砂のマウス肺アレルギー炎症増悪作用，第47回大気環境学会，東京，2006. 9
- 手柴 友希、吉留 厚子：カンガルーケア前後の対児感情および母乳栄養に関する意識の変化，第47回日本母性衛生学会，名古屋，2006. 11
- 手嶋 彬、平野 互：広汎性発達障害児の生活障害に関する実態調査，九州・山口地区自閉症研究協議会第31回大会，別府，2007. 3
- 小西 清美、神代 雅晴、泉 博之、樋口 善之：月経周期におけるワーキングメモリ作業成績の検討，第11回産業保健人間工学会，北海道，2006. 11
- 小西 恵美子、児玉 真木、和泉 成子：日本の患者からみた「よい看護師」とは？－東洋における看護倫理探求の一環として，日本生命倫理学会第18回年次大会，岡山，2006. 11
- 小西 恵美子、和泉 成子、八尋 道子、田中 真木：がん患者にとってのよい看護師：質問紙調査による質的研究の検証，第21回日本がん看護学会学術集会，東京，2007. 2
- 小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明：放射線誘発リン酸化 H2AX および ATM のフォーカス数の時間変化から見た DNA 損傷・修復にきい値が存在する可能性の検討，第40回 日本保健物理学会，広島，2006. 6
- 小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明：放射線誘発リン酸化 ATM を指標として捉えた低線量放射線における DNA の初期損傷の描像，第49回 日本放射線影響学会若手シンポジウム，北海道，2006. 9

小野 美喜、小西 恵美子：看護師からみたよい看護師：若手看護師の視点，日本看護科学学会，神戸，2006. 12

小野 美喜、小西 恵美子：看護師からみた「よい看護師」：若手看護師の視点，第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12

小林 三津子、前田 久美子：急性期病院におけるプリセプター&サポートシステム導入3年後の評価，第26回日本看護科学学会学術集会，神戸，2006. 12

森田 智子、桜井 礼子、草間 朋子：高齢者の転倒予防のための内転筋トレーニング方法の検討，第57回日本公衆衛生学会，富山，2006. 10

斉藤 益子、遠藤 俊子、宮崎 文子、一瀬 いつ子：医療機関における助産ケアの質に関する検討—自己点検のための評価基準を用いて—，China-Japan Medical Conference 2006 and the 12th China-Japan Nursing Conference, China, 2006. 9

前田 ひとみ、影山 隆之、山田 美幸、加瀬田 暢子、久保 江里、津田 紀子：新卒看護職者の社会心理的特性とエンパワーメントプログラムの検討，第26回日本看護科学学会学術集会，神戸市，2006. 12

前田 ひとみ、津田 紀子、長友 みゆき、大川 合子、山田 美幸、加瀬田 暢子、影山 隆之：新卒看護職者のエンパワーメントプログラムの検討，第26回日本看護科学学会学術集会，神戸，2006. 12

大賀 淳子、稲垣 敦：精神科デイケアにおけるダンベル体操の効果，第65回日本公衆衛生学会，富山，2006. 10

大賀 淳子、帆秋 善生：重症統合失調症入院患者への集団療法へのケアマネジメント手法導入の効果，第26回日本社会精神医学会，横浜，2007. 3

大森 純子、長江 弘子、梅田 麻希、尾崎 章子、宮崎 紀枝、加藤 典子、小野 若菜子、酒井 昌子、麻原 きよみ、百瀬 由美子、小西 恵美子：学士課程における地域看護の倫理教育プログラムの開発と評価第4報：MSQを使用した倫理的感受性の変化，第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12

大塚 みゆき、高野 政子、山下 早苗、中原 基子：4ヶ月児をもつ母親の育児支援サービスに関する研究，第37回日本看護学会（小児看護），広島，2006. 9

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、川里 浩明、安田 愛子、早川 和一：コーン油過剰摂取がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎に及ぼす影響について，第56回日本アレルギー学会秋季学術大会，東京，2006. 11

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、川里 浩明、安田 愛子、早川 和一：低濃度DEP抽出物塗布がアトピー性皮膚炎に及ぼす影響について，第47回大気環境学会，東京，2006. 9

田中 莉佳、赤司 千波、栗屋 典子：認知症高齢者の主介護者が一般病院の看護師に対して抱く期待，第32回日本看護研究学会学術集会，別府，2006. 8

田淵 康子、吉留 厚子：健康な女性の月経血量の個人差に関する研究，第3回大分県母性衛生学会，大分，2006. 10

藤内 美保、宮腰 由紀子：臨床判断の教育方法の開発に向けて—新人看護師および熟練看護師の判断思考構造の比較—，日本看護科学学会，神戸，2006. 12

藤内 美保、宮腰 由紀子、安東 和代：熟練看護師の健康歴聴取時における臨床判断の思考の概念化，日本看護研究学会，別府，2006. 8

梅田 麻希、酒井 昌子、小野 若菜子、百瀬 由美子、麻原 きよみ、小林 真朝、大森 純子、宮崎 紀枝、尾崎 章子、長江 弘子、加藤 典子、小西 恵美子：学士課程における地域看護の倫理教育プログラムの開発と評価第2報：倫理に対する認識や態度の変化，第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12

梅本 恵、藤内 美保、安部 恭子：片麻痺の疑似体験装具装着時における床からの立ち上がり動作解析と筋電図変化，日本看護学会（成人看護II），別府，2006. 8

伴 信彦、安達 直美、甲斐 倫明：放射線によるマウス白血病の誘発機構に関する考察，日本保健物理学会第40回研究発表会，広島，2006. 6

伴 信彦、小嶋 光明、上戸 美紀子、安達 直美、甲斐 倫明：全身照射マウスの造血系における遅延性放射線影響に関する検討，日本放射線影響学会第49回大会，札幌，2006. 9

福 浦梓、小西 恵美子：意識下手術を受ける患者のニーズと看護援助，第37回日本看護学会「成人看護I」，京都，2006. 10

本田 裕子、安部 恭子、藤内 美保：年齢差からみるプライバシーの認識の違いー高齢期患者に焦点をあててー，第37回日本看護学会 成人看護II，大分，2006. 8

麻原 きよみ、尾崎 章子、加藤 典子、宮崎 紀枝、長江 弘子、百瀬 由美子、小野 若菜子、酒井 昌子、大森 純子、小林 真朝、梅田 麻希、小西 恵美子：学士課程における地域看護の倫理教育プログラムの開発と評価第1報：プログラムの開発過程，第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一：ラテックス粒子が皮膚のバリア機能破綻時に皮膚炎に及ぼす影響，第56回日本アレルギー学会秋季学術大会，東京，2006. 11

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、市瀬 孝道、定金 香里、森 育子、西川 雅高：黄砂の経気道曝露による影響に関するGeneChipを用いた遺伝子解析，第47回大気環境学会，東京，2006. 9

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、定金 香里、市瀬 孝道、吉川 敏一：フタル酸ジエチルヘキシル (DEHP) がマウスアトピー性皮膚炎モデルに及ぼす影響[1]，第18回日本アレルギー学会春季臨床大会，東京，2006. 5

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、定金 香里、市瀬 孝道、吉川 敏一：フタル酸ジエチルヘキシル (DEHP) がマウスアトピー性皮膚炎モデルに及ぼす影響[2]，第18回日本アレルギー学会春季臨床大会，東京，2006. 5

和泉 成子、小西 恵美子、児玉 真木、八尋 道子：患者の視点から見た「よい看護師」の特性：質問紙調査，第26回日本看護科学学会，神戸，2006. 12

和田 宣子、高野 政子、山下 早苗、中原 基子：1歳6ヶ月児を持つ母親の育児支援サービスに関する研究，第37回日本看護学会（小児看護），広島，2006. 9

9-6 学術講演等

Kai M: Radiation protection philosophy and radiation risk, The 18th IEPS Symposium on Safety Management of Ionizing Radiation, Seoul, Seoul National University, 2006. 12

影山 隆之: 希死念慮や抑うつ状態を有する勤労者を健康診断でスクリーニングする試み: DSSの成績と構造化面接の結果から, 第26回日本社会精神医学会, 横浜, 2007. 3

影山 隆之: 施設職員のメンタルヘルス, 第9回九州ブロック介護老人保健施設大会in大分, 別府, 2007. 6

岩崎 香子、小野 奈月、高橋 敬: 凝固・線溶系は脂肪細胞にとってどのような意義があるのか, 第29回日本血栓止血学会学術集会学術推進SPCシンポジウム, 栃木, 2006. 11

宮崎 文子: 助産師教育における助産実践能力の取得に向けて一助産実習において妊婦健診能力をどのように身につけさせるか, 第32回全国助産師教育協議会研究会, 名古屋, 2007. 1

宮崎 文子: 今、求められている助産師の自律, 第21回日本助産学会学術集会(会長講演), 大分, 2007. 3

小嶋 光明: 放射線誘発細胞形態変化の発生過程に関する研究, 京都大学原子炉実験所専門研究会, 京都, 2006. 8

大賀 淳子: 職場のメンタルヘルスー監督者の役割ー, 新任課長補佐級研修, 大分, 2006. 5

大賀 淳子: 看護研究のすすめかた, 日本精神科看護技術協会大分県支部研修会, 大分, 2006. 9

大賀 淳子: 看護記録, 日本精神科看護技術協会大分県支部研修会, 大分, 2007. 2

赤司 千波: 平成18年度教育計画研修会, 大分県看護協会, 大分, 2006. 6

10 地域貢献

10-1 講演等

- 安部 恭子** 「医療的ケアの実際と緊急時の対応 ―医療的ケアにおけるリスクマネジメント―」, 医療的ケアに係る校内研修会 (大分県立宇佐養護学校), 大分県, 2006. 12
- 日常的・応急の手当の仕方と緊急時の対応, 医療的ケアに係る校内研修会, 大分県立宇佐養護学校, 2006. 12
- 伊東 朋子** 看護に生かすボディメカニクス, 大分県立日田高等学校 アドバイザリー・レクチャーズ2006, 日田市, 2006. 8
- 看護学概説, 放送大学, 大分市, 2006. 2
- 稲垣 敦** みんなで取り組む介護予防体操, 恩師財団母子愛育会大分県支部介護予防研修会, 大分市, 2006. 7
- 運動・レクリエーション, 大分丘の上病院Sports Day, 大分市, 2006. 6
- 運動・レクリエーション指導, 大分丘の上病院sports day, 大分市, 2006. 1
- 介護予防のための運動 (1), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 別府市, 2006. 11
- 介護予防のための運動 (2), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 別府市, 2006. 11
- 介護予防のための運動 (3), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 別府市, 2006. 11
- 介護予防のための運動 (4), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 別府市, 2006. 11
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 佐伯市介護支援専門員秋季研修会, 佐伯市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分県介護予防事業, 豊後大野市, 2006. 10
- 介護予防運動, 人生いきいきはつらつスクール, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
- 介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11

介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 中津市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 佐伯市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 宇佐市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 日田市, 2006. 11
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 中津市, 2006. 12
介護予防運動, 大分県立看護科学大学公開講座, 大分市, 2006. 5
介護予防運動, 大分県立看護科学大学公開講座, 大分市, 2006. 5
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 由布市, 2006. 5
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 由布市, 2006. 6
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 6
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 6
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 由布市, 2006. 7
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 7
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 7
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 8
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 由布市, 2006. 8
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 8
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 9
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 9
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 9
介護予防運動, 大分県介護予防モデル事業, 竹田市, 2006. 9
介護予防運動, 大分市介護予防事業, 大分市, 2007. 1
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 豊後高田市, 2007. 1
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 別府市, 2007. 2
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 国東市, 2007. 2
介護予防運動, 敷戸老人会健康教室, 大分市, 2007. 2
介護予防運動, 大分県介護予防事業, 中津市, 2007. 3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 1

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 1

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 3

介防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市介護予防モデル事業説明会, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業説明会, 大分市, 2006. 3

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防事業, 大分市, 2006. 3

健康づくりのための運動指針2006, 大分県健康増進実践指導者研修会, 大分市, 2006. 12

精神障害者のレクリエーション, 大分丘の上病院sports day, 大分市, 2007. 1

体力測定の実践と理論, 大分県保険者協議会ヘルスアップ事業, 中津市, 2007. 2

大分県介護予防モデル事業, 大分市介護予防事業, 大分市, 2006. 10

メンタルヘルス, 大分県市町村職員研修運営協議会所属長研修, 大分市, 2006. 6

メンタルヘルス, 市町村職員研修運営協議会新任所属長研修, 大分市, 2006. 7

メンタルヘルス, 大分県職員研修所行政事務能力向上研修, 大分市, 2007. 4

メンタルヘルス指針の基礎, 中央労働災害防止協会「メンタルヘルス指針基礎研修」, 大分市, 2007. 2

快眠は健康のもと, 平成18年度由布市民健康講座, 由布市, 2007. 2

職場におけるメンタルヘルスづくり, 大分県産業保健推進センター平成18年度第2回産業医研修会, 大分市, 2006. 5

職場における心の健康づくり～事例をまじえて, 大分県産業保健推進センター衛生管理者研修, 大分市, 2007. 2

職場のストレスケアと管理職の役割, 平成18年度県立学校校長研修, 別府市, 2006. 7

職場のメンタルヘルスー管理監督者の役割, 大分県新任所属長研修, 大分市, 2006. 4

睡眠と心身の健康, 平成18年度大分県精神保健福祉協会中央支部研修会, 別府市, 2006. 7

睡眠について, 佐伯市ヘルスコーディネーター養成講座, 佐伯市, 2006. 12

影山 隆之

睡眠に関する保健活動に向けて, 大分県精神保健福祉センター・睡眠に関する保健活動推進研修会, 大分市, 2007. 2

相談の受け止め方, 由布市総合相談支援センター研修会, 由布市, 2007. 7

騒音が人体に与える影響について, 大分県生活環境部環境保全課主催平成17年度騒音講習会, 大分市, 2006. 2

働く人のストレスと健康, 玖珠町役場メンタルヘルス研修会, 玖珠町, 2006. 7

働く人のメンタルヘルス, 大分県中部地方振興局「こころの健康講座」, 大分市, 2006. 11

働く人のメンタルヘルスー異動・配転でつぶれないために, 大分県職員研修所行政事務能力向上研修, 大分市, 2006. 4

病院職員のメンタルヘルス, 関愛会佐賀関病院職員研修会, 大分市, 2006. 11

相談の受け止め方, 大分県社会福祉介護研修センター平成18年度第2回相談業務担当職員研修会, 大分市, 2006. 12

関根 剛

カウンセリングテクニック, 被害者支援センターかがわ スキルアップ講座, 高松市, 2006. 7

カウンセリングの原理と実際, 大分県看護協会 実習指導者講習会, 大分市, 2006. 7

カウンセリングの原理と実際, 大分県看護協会 実習指導者講習会, 大分市, 2006. 7

カウンセリング理論と実際, 大分いのちの電話相談員養成講座, 大分市, 2006. 5

コミュニケーション・スキル, 国立佐賀病院院内研修会, 佐賀市, 2007. 2

これからの被害者支援ー犯罪被害者等基本法で何が変わるか, 和歌山県被害者対策連絡協議会担当者会議, 和歌山市, 2006. 6

スクール・セクハラの影響, 大分県教育委員会 スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修会, 大分市, 2006. 8

フリーダイヤル電話担当後のケアのための研修会, 大分いのちの電話 全体研修会, 大分市, 2006. 11

リーダーシップ研修, 井の辺病院研修会, 大分市, 2006. 8

ロールプレイ, 患者の権利オンブズマン研修会, 福岡市, 2006. 1

学校に行けない子どもたちへの対応, 大分県教育センター保護者のグループカウンセリング「ひまわりの会」, 大分市, 2006. 5

国内における被害者支援の実情と臨床心理士の役割, 山口県臨床心理士会月例研修会, 山口市, 2006. 2

事件直後の支援から長期継続的支援へ, 全国被害者支援ネットワーク公開フォーラムパネルディスカッション・コーディネーター, 和歌山市, 2006. 2

性犯罪加害者への認知行動療法プログラム(助言) (全5回), 大分保護観察所, 大分市, 2007. 3

対応が困難な電話相談への対処, 法務省人権擁護委員会, 大分市, 2006. 9

- 被害者の求めに的確に応じるには,かごしま被害者支援センター 継続研修会,鹿児島市,2007.2
- 被害者への心理的支援の基礎,ハートライン山口 被害者支援ボランティア養成講座,山口市,2006.9
- 被害者を理解するための研究会,大分地方裁判所,大分市,2007.1
- 被害者支援とは,ハートライン山口 被害者支援ボランティア養成講座,山口市,2006.7
- 被害者支援について,大分保護観察所,大分市,2007.3
- 被害者支援の歴史とこれから,紀の国被害者支援センター ボランティア養成講座,和歌山市,2006.8
- 不登校児童生徒への対応と非行少年の理解,大分市子ども教育相談センター 月例研修会,大分市,2007.3
- 分科会「週5日開設を目指す団体」コーディネーター,全国被害者支援研修会(京都),京都市,2007.2
- 面接技術,大分県看護協会 訪問看護講習会,大分市,2006.11
- 被害者の心情を理解するプログラム(全3回),大分刑務所,大分市,2007.3
- 岩崎 香子** 子どもの骨折予防のための食生活,大分県民アカデミアインターネット講座,別府市,2007.2
- 吉村 匠平** 社会福祉法人皆輪会つくし保育園 職員研修,福岡市,2006.
- 社会福祉法人皆輪会つくし保育園 相談会,福岡市,2006.
- いわゆる「対応が難しい」と言われる保護者との関係の作り方について,みそら保育園職員研修,日田市,2006.6
- コミュニケーションについて考えるためのエクササイズ,みそら保育園保護者研修,日田市,2006.6
- 避妊法の選択,第3回日本助産師会大分県支部研修会,大分市,2006.3
- 宮崎 文子** 更年期の健康と生活・環境,地域公開講座,大分市,2006.11
- 思春期の性教育ー健全意思決定のためにー,大分県立大分豊府高等学校,大分市,2006.1
- 性に関する基本的考え方、関連法規(母体保護法他)ー現状と課題ー,日本助産師会大分県支部研修会,大分市,2006.3
- 大分県立大分西高等学校,思春期の性,大分県立大分西高等学校大講義室,2006.7
- 独立行政法人国際協力機構(JICA)ウズベキスタン国看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、母性看護カリキュラム委員,,ウズベキスタン国・日本,2006.
- 工藤 節美** 家族の特性と支援の方法,平成18年度第2回訪問看護研修ステップI,大分市,2006.11
- 家族の特性と支援の方法,平成18年度第1回訪問看護研修ステップI,大分市,2006.5

- 看護学概説（地域看護），放送大学面接授業，大分市，2006. 2
- 高齢期の健康管理，大分市新町ふれあいサロン，大分市，2007. 1
- 在宅呼吸管理に関する制度等の動向と実態，平成18年度訪問看護研修ステップ2「呼吸管理」，大分市，2006. 8
- 特別養護老人ホームの看護師に期待される役割，平成18年度大分県老人福祉施設看護職員研修会，大分市，2006. 11
- 保健師教育課程，平成18年度実習指導者講習会，大分市，2006. 5
- 訪問看護過程，大分県看護協会 平成17年度第2回訪問看護研修会ステップⅠ，大分市，2006. 1
- 訪問看護過程Ⅰ，平成18年度第2回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2006. 12
- 訪問看護過程Ⅰ，平成18年度第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2006. 6
- 訪問看護過程Ⅱ，平成18年度第2回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2006. 12
- 訪問看護過程Ⅱ，平成18年度第1回訪問看護研修ステップⅠ，大分市，2006. 6
- 訪問看護実習Ⅰ，平成18年度訪問看護研修ステップⅡ，大分市，2006. 9
- 臨床における実践的看護研究，平成18年度大分県看護協会研修会 ジェネラリストⅠ，大分市，2006. 7
- 高波 利恵** 臨床における実践的看護研究，大分県看護協会研修会，大分県大分市，2006. 7
- 高野 政子** 小児看護学，平成18年度大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2006. 6
- 乳児保育の意義と乳児の特性，第18回度 大分県保育所（園）乳児保育担当保育士研修会，別府市，2006. 6
- yougo，大分県養護教諭部会基礎看護講習会，大分市，2007. 2
- そしゃくの話，大分市えのくま幼稚園PTA教育講演会，大分市，2007. 1
- 乳児保育の意義と乳児の特性，平成18年度乳児保育担当保育士研修会，別府市，2006. 6
- 桜井 礼子** Web版看護ケアの質評価総合システムの施行調査結果と今後の課題，青森県立保健大学健康科学教育センター研修，青森県青森市，2006. 9
- 介護予防事業 健康管理のための自己チェック表の活用方法，大分市社会福祉協議会 ボランティア研修，大分市，2006. 10
- 看護とは，大分雄城台高校 模擬授業，大分市，2006. 12
- 看護教育はどう変わるのか，JICA技術協力「ウズベキスタン看護教育改善」プロジェクトセミナー，ウズベキスタン国タシケント市，2006. 4
- 元気で「きいき」過ごすために，富士見が丘公民館 健康教育，大分市，2006. 10
- 転倒しないための体力づくり，転倒予防教室 大分市野津原地区，大分市，2006. 11
- 特養の看護職に期待される役割，大分県老人福祉施設協議会 特別養護老人ホーム部会，大分市，2006. 11

- 山下 早苗 「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」,平成18年度第2・3回医療的ケア研修,大分県,2006.6
- 日常的・応急的手当の仕方と緊急時の対応,医療的ケアに係る校内研修会,大分県立宇佐養護学校,2006.12
- 小西 清美 大分市立三佐小学校4年生 第2次性徴について,日本助産師会大分県支部,大分市,2006.9
- 小西 恵美子 シンポジウム 「少子高齢社会で看護が果たす役割」,第32回日本看護研究学会学術集会,別府,2006.8
- 交流集会 「成果主義の時代に、今、改めて研究の倫理を考える」,日本看護科学学会学術集会,神戸,2006.12
- 小野 さと子 いつまでもおいしく食べる秘訣!,健康講話,敷戸公民館,2007.2
- 小野 美喜 訪問看護「呼吸管理」,大分県訪問看護師養成講座 ステップ2,大分市,2006.9
- 看護力再開発「看護の対象者」,大分県ナースセンター看護力再開発支援事業,大分市,2006.10
- 訪問看護の利用者の理解,大分県訪問看護師養成講座 ステップ1,大分市,2006.5,11
- 小林 三津子 リーダーシップとは,リーダーシップ研修1(大分県立病院),大分市,2006.7
- 看護管理の基礎と副師長の役割,看護管理研修(大分県立病院),大分市,2006.9
- 実習指導計画・指導案,実習指導者講習会(大分県看護協会),大分市,2006.6
- 主任の職位と役割,リーダーシップ研修2(大分県立病院),大分市,2006.9
- 大学で看護学を学ぶとは,模擬講義(大分県立大分西高等学校),大分市,2006.11
- 大賀 淳子 学校で行う医療的ケアに関わる基礎知識,新生養護学校研修会,大分市,2006.8
- 看護記録,加藤病院研修会,竹田市,2006.6
- 記録について,日本精神科看護技術協会大分県支部研修会,大分市,2006.2
- 主な精神症状とその看護,大分県知的障害者施設協議会看護職員研修会,大分市,2006.2
- 藤内 美保 フィジカルアセスメントI,大分県看護協会主催、第2回訪問看護研修ステップI,大分市,2006.11
- フィジカルアセスメント,大分赤十字病院 レベルII研修,大分市,2006.11
- フィジカルアセスメント,大分県立病院新人看護師研修会,大分市,2006.6
- フィジカルアセスメントI,大分県看護協会主催、第1回訪問看護研修ステップI,大分市,2006.5
- フィジカルアセスメントII,大分県看護協会主催、第2回訪問看護研修ステップI,大分市,2006.11

フィジカルアセスメントⅡ, 大分県看護協会主催、第1回訪問看護研修ステップⅠ, 大分市, 2006. 6

看護過程と看護記録, 大分県看護協会主催、看護力再開発講習会, 大分市, 2006. 10

看護概説 (臨床看護師の看護実践とその理念), 放送大学, 大分市, 2006. 2

看護研究の基礎, 大分赤十字病院 新人看護師研修, 大分市, 2007. 2

呼吸器系のフィジカルアセスメント, 大分医療センター 実務研修, 大分市, 2006. 11

循環器系のフィジカルアセスメント, 大分医療センター 実務研修, 大分市, 2006. 12

八代 利香

看護・保健のグローバルイゼーションと看護職の役割, 放送大学面接授業, 大分市, 2006. 2

看護における教育管理, 諸外国の看護教育事情—韓国・米国—, 川崎医療福祉大学大学院修士課程「看護管理学」講義, 岡山県倉敷市, 2006. 8

看護における倫理的ジレンマへの対処, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2006. 7

国際保健医療, 香川大学医学部看護学科集中講義, 香川県三木町, 2006. 7

訪問看護ステップ2「呼吸管理」実習Ⅰ, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2006. 9

伴 信彦

IVRでの看護, 放射線医学総合研究所第45回放射線看護課程, 千葉市, 2006. 1

医療における放射線の影響と防護, 大分赤十字病院放射線診療従事者教育訓練, 大分市, 2006. 2

医療における放射線の影響と防護, 大分大学医学部平成19年度放射線業務従事者教育訓練講習会, 由布市, 2007. 5

医療における放射線の利用と防護, 福岡県糸島保健福祉環境事務所保健・医療・福祉総合研修, 前原市, 2007. 1

医療放射線の人体への影響, 大分赤十字病院放射線業務従事者教育訓練, 大分市, 2007. 2

効果的なプレゼンテーション, 大分赤十字病院看護部研修会, 大分市, 2006. 7

平野 亙

これからのまちづくり, 竹田市元気なまちづくりリーダー会議, 竹田市, 2006. 12

これからの健康づくり, 大分市給食施設担当者研修会, 大分市, 2006. 1

リスクマネジメント教育, 大分県看護協会 実習指導者研修会, 大分市, 2006. 7

学校と保護者の連携 —発達障がい児の生きる力を育てるために, 大分市教育委員会 特別支援教育コーディネーター研修会, 大分市, 2007. 2

患者の権利と個人情報保護法, 平成17年度国保直営診療施設看護職研修会, 大分市, 2006. 1

高齢社会と健康づくり, 大分市地域ふれあいサロン ボランティア育成研修, 大分市, 2006. 10

高齢者の権利擁護について考える, 大分県老人福祉施設協議会特養部会別枠東速ブロック研修会, 別府市, 2006. 10

親として専門家に望むこと, 大分県発達障がい者療育専門員養成講座, 大分市, 2006. 6

地域での健康づくり, 大分市ヘルスポランテニア育成講座, 大分市, 2006. 12

転倒・骨折予防 事例発表をうけて, 大分県看護協会中津地区 看護のつどい, 中津市, 2006. 12

福祉施設における人権的配慮 ー権利としての自立, 大分県福祉施設等看護職員研修会, 大分市, 2007. 3

林 猪都子

看護概説 「女性のライフステージにおける母性看護」, 放送大学, 大分市, 2006. 2

現在の産婦指導の実際, 潜在助産師キャリア再開発研修会, 大分市, 2006. 7

助産師教育課程, 平成18年度大分県看護協会実習指導者講習会 , 大分市, 2006. 5

避妊法の選択, 第3回 (社) 日本助産師会大分県支部研修会, 大分市, 2006. 3

10-2 研究指導

稲垣 敦

大分赤十字病院

関根 剛

国立病院機構西別府病院

岩崎 香子

天心堂へつぎ病院

吉田 成一

国立病院機構 大分医療センター

工藤 節美

国立病院機構大分医療センター

国東保健所 (保健活動検討会議)

高野 政子

大分市医師会立アルメイダ病院

佐伯 圭一郎

大分県立病院

桜井 礼子

国立病院機構 西別府病院

小西 清美

大分県厚生連鶴見病院

小野 美喜

大分県立病院

大賀 淳子

厚生連鶴見病院

日本精神科看護技術協会大分県支部

中山 晃志

大分市医師会立 アルメイダ病院

藤内 美保

大分赤十字病院

八代 利香

アルメイダ病院

伴 信彦

大分赤十字病院

松尾 恭子

大分県看護協会 学会委員長

10-3 学会その他の役員等

- Lee, So Woo Adviser, The Korean Society of Stress Management
Auditor, Korean Nursing Education Association
President, Korean Hospice Nurses Association
Vice President, Korean Healthy Family Movement
- 伊東 朋子 18年度大分県准看護師試験委員
JICA ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
日本ALS協会大分県支部運営委員
- 稲垣 敦 Human Performance Measurement 編集委員
Nスポーツクラブ 顧問
看護科学研究 編集委員 (幹事)
体育測定評価研究 編集委員
日本体育測定評価学会 理事
別府溝部学園短期大学 非常勤講師
- 影山 隆之 大分県こころの健康づくり部会委員
大分県介護保険審査会委員
大分県産後うつスクリーニングシステム推進検討会委員
大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員
中央労働災害防止協会「メンタルヘルス対策支援事業」支援専門家
日本学校メンタルヘルス学会運営委員
日本精神衛生学会常任理事・編集委員長
労働者健康福祉機構大分産業保健推進センター産業保健相談員
- 関屋 伸子 第21回日本助産学会学術集会企画委員
- 関根 剛 全国被害者支援ネットワーク研修委員会委員
大分いのちの電話協会スーパーバイザー
大分県こころの緊急支援体制整備連絡協議会委員
大分被害者支援センター理事
日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究編集委員
- 吉村 匠平 竹田地区学習障害児等支援体制整備事業に係る専門家チーム委員
- 吉田 成一 環境省大気汚染物質等文献レビューワーキンググループ委員
東京理科大学薬学部客員研究員
日本アンドロロジー学会 評議員

宮崎 文子	<p>全国助産師教育協議会常任理事</p> <p>大分県男女共同参画審議委員会委員</p> <p>大分県母性衛生学会副会長</p> <p>大分市男女共同参画推進懇話会委員</p> <p>第21回日本助産学会学術集会（学会長）</p> <p>日本看護協会助産師職能委員</p> <p>日本助産学会評議員</p>
工藤 節美	<p>看護教員養成講習会検討委員</p> <p>大分市社会福祉審議委員会委員</p> <p>大分市地域支援事業者選考委員</p>
甲斐 倫明	<p>アジアオセアニア放射線防護協議会事務局長</p> <p>九州大学非常勤講師</p> <p>原子力安全研究協会 放射線影響に関する懇談会委員</p> <p>国際放射線防護委員会 (ICRP) 第4専門委員会委員</p> <p>国連科学委員会国内対応委員会委員</p> <p>財団法人放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会委員</p> <p>日本リスク研究学会理事</p> <p>日本放射線影響学会幹事、評議員</p> <p>文部科学省放射線審議委員会委員</p> <p>放送大学客員教授</p> <p>名古屋大学非常勤講師</p>
高瀬 恵子	<p>第21回日本助産学会学術集会企画委員</p>
高波 利恵	<p>日本看護科学学会法人化準備委員会事務</p> <p>日本看護系大学協議会高等教育行政委員会事務</p>
高野 政子	<p>ウズベキスタン看護教育改善プログラムカリキュラム委員（小児看護）</p> <p>九州小児看護教育研究会・理事</p> <p>大分県看護協会教育委員会・教育委員長</p> <p>大分県小児保健協会・副会長</p>
佐伯 圭一郎	<p>生涯健康県おおいた21推進協議会幹事</p> <p>大分市健康づくり対策小委員会委員</p>
桜井 礼子	<p>大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員</p> <p>大分市建築審査会委員</p>

	大分市公共施設設計業務委託プロポーザル選定委員会委員
	大分市陸上競技場等指定管理予定者選定等委員会委員長
	日本看護学会成人看護Ⅱ論文選考ワーキンググループ委員
	日本看護学会成人看護学会Ⅱ抄録選考委員会委員
	日本看護協会成人看護学会Ⅱ学会準備委員会委員
山下 早苗	大分県看護協会実習指導者講習運営委員長
	独立行政法人国際協力機構（JICA）ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
市瀬 孝道	大気環境学会九州支部会理事
	大分県環境審議会委員
	大分大学非常勤講師
	独立行政法人・国立環境研究所、病態生理研究チーム：客員研究員
小西 清美	第21回日本助産学会学術集会
	日本助産師大分県支部教育委員
小嶋 光明	若手放射線生物学研究会会長
小林 三津子	大分地方労働審議会委員
	第29回大分県看護研究学会 準備委員長
	大分県看護協会 訪問看護研修ステップ1 講師（排尿に関するケア）
赤司 千波	大分県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員
	第32回日本看護研究学会学術集会企画委員
大賀 淳子	大分県医療的ケア運営協議会委員
	大分県障害児適性就学指導委員
定金 香里	大分県理科・化学教育懇談会幹事
藤内 美保	JICA ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
八代 利香	NPO大分あんしんねっと 特定非営利活動法人成年後見・権利擁護大分ネット理事
	国際看護師協会機関誌「INR（日本版）」モニター委員
	大分県看護協会教育委員
伴 信彦	国連科学委員会国内対応委員会委員
	日本放射線影響学会 UNSCEAR等担当委員
	放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会専門委員（IAEA/RASSC担当）
平野 亙	九州大学病院 心臓移植外部評価委員

大分健生病院 倫理委員会 委員

大分県 生涯健康県おおいた21推進協議会 地域・職域連携推進部会 委員

大分県発達障がい支援センター連絡協議会 委員

大分県発達障がい支援体制推進会議 委員

大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会
委員・専門部会長

別府発達医療センター 安全対策等審議委員会 委員

豊後大野市地域福祉計画策定委員会 会長

林 猪都子

第21回日本助産学会学術集会企画委員

日本看護連盟施設連絡委員

11 助成研究

影山 隆之

分担：ウェブを利用した看護職のストレス対策教材の開発とその効果評価

日本学術振興会科研費（基礎看護学、2年予定の2年目）

影山 隆之

分担：医療職者のエンパワーメントとメンタルヘルスに関する研究－新卒看護職者の自己効力感を高めるプログラムの開発

日本学術振興会科研費（基礎看護学、3年予定の2年目）

影山 隆之

分担：騒音による影響の評価に関する総合的研究

日本騒音制御工学会「騒音の影響評価に関する研究委員会」

吉田 成一

アレルギー増悪因子のスクリーニング法開発

昭和シェル石油財団（2年予定の1年目）

吉田 成一

ナノ粒子の生殖系及び内分泌系に及ぼす影響に関する研究

文部科学省科学研究費補助金若手研究A（3年予定の2年目）

市瀬 孝道、定金 香里

in vivoスクリーニングによる環境化学物質のアレルギー増悪影響評価

独立行政法人国立環境研究所

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大山町産農産物の抗アレルギー作用の検討

大分大山町農業協同組合

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

大山町産農産物のアレルギー抑制物質の開発に関する研究

大分大山町農業協同組合

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

果物によるアレルギー抑制効果の検討

株式会社クロレラ本社

中山 晃志

分担：リスク認知とリスクを規定する要因に関する調査
原子力安全基盤機構（3年予定の3年目）

福田 広美

尿中サイトカインによる看護職者の身体的疲労度の定量的評価法の開発
日本学術振興会（2年予定の2年目）

品川 佳満

分担：微弱近赤外光を用いた、健康指標としての臓器表面の血流変化に関する研究
文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B）（2年予定の2年目）

小西 恵美子

患者からみた「よい看護師」：日韓比較.
日本学術振興会平成18年度日韓科学協力事業

小西 恵美子

看護師からみた「よい看護師」に関する記述的研究
平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金

小西 恵美子

女性の骨粗鬆症予防：リスク特性と症状の国際比較に基づく生活指導
平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金

小西 恵美子

地域看護における倫理教育プログラムの開発と評価
平成18年度日本学術振興会科学研究費補助金

吉武 康栄

筋音図法を応用した力調節安定性の生理学的規定因子の解明
日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究（B）（2年予定の1年目）

甲斐 倫明

わが国におけるCT診断の患者線量と放射線誘発がんリスク推定システムの構築
文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（2年予定の1年目）

甲斐 倫明

原爆放射線の健康影響の評価に関する研究
厚生労働科学研究費補助金

江藤 真紀

高齢者の転倒発生における視知覚と姿勢制御と下肢筋力との関連
文部科学省科学研究費補助金（3年予定の2年目）

桜井 礼子、栗屋 典子

看護ケアの質評価・改善システムの運用に関する研究
厚生労働省科学研究費補助金（医療技術評価総合研究事業）

草間 朋子

総合的な判断力を持つ自律した看護職の育成ーヒト、人、人間の理解を目指してー
文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」（3年予定の3年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

黄砂の肺毒性、アレルギー増悪、酸化的DNA傷害、内分泌攪乱の影響評価に関する研究
日本科学振興会科学研究費補助金 基盤研究（B）（3年の3年目）

市瀬 孝道、西川 雅高、世良 暢之

中国メガシティの大気汚染物質によって汚れた黄砂の生体影響に関する研究
財団法人住友財団 環境研究助成金（2年予定の1年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトがん発生に関わる環境要因及び感受性要因に関する研究
国立がんセンター研究所（厚生労働省がん研究助成金16指-1）（3年予定の1年目）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

日本に飛来した黄砂の健康影響評価
独立行政法人国立環境研究所 委託研究（1年予定の1年目）

栗屋 典子、桜井 礼子（分担）

Web版看護ケアの質評価総合システムを用いた看護の質評価に関する研究
文部科学研究費補助金（基盤研究B）

12 海外研究派遣

工藤 節美

派遣先 Case Western Reserve University, Frances Payne Bolton School of Nursing, U.S.A.

派遣期間：2007年2月24日～3月24日

学部における看護教育の内容と教育方法、大学院におけるANP (Advanced Nurse Practitioner)の教育課程、教育内容と方法等について把握し、本学の学部教育及び大学院Nurse Practitionerコースの教育課程構築に反映させることを目的とした。学部教育では1・2年生を対象としたclassやlaboratoryに参加し、学生の主体性を伸ばすための教育方法としてdiscussionの重視、ITの活用、教材・教具の工夫等について学んだ。大学院ANP教育ではclassやlaboratory、practiceに参加し、さらに教育課程に関しては、MSN Program directorのCarol Savrin先生より、アメリカ合衆国、Ohio州及びCase Western Reserve UniversityのANP教育プログラムや活動の現状を紹介していただき、本学にNurse Practitioner教育課程を導入する際の助言をいただいた。日本の看護教育の現状を問い、今後の看護教育や制度のあり方を検討する貴重な機会となった。

研修内容については2007年4月27日大分県立看護科学大学にて報告を行った。

藤内 美保

派遣先 Case Western Reserve University, U.S.A.; McMaster University, Canada

派遣期間：2006年9月1日～10月7日

Case Western Reserve大学は、数多くの素晴らしいナースプラクティショナーを輩出しており、本学の姉妹校でもある。キャンパス内にはいくつかの病院があり、そこで活躍するナースプラクティショナーの活動の実態を調査した。急性期の循環器専門のナースプラクティショナーや、慢性疾患をもつ高齢者に対応する外来ナースプラクティショナーの活動などを知った。また修士課程における老人看護ナースプラクティショナーのカリキュラムを知り、講義、ラボラトリーに参加し、実際の教育現場の状況を把握した。

カナダのMcMaster大学には、2日間訪問した。Andrea Baumann教授、豊澤英子先生（元大分大学医学部看護学科教授）からカナダにおけるナースプラクティショナーやPBL教育についての情報を得ることができた。

研修内容については2006年11月1日大分県立看護科学大学にて報告を行った。

岩崎 香子

派遣先 Northwestern University, VA Chicago Health Care System, Lake Side Division, U.S.A.

派遣期間：2006年7月9日～8月7日

凝固線溶に関する著明な専門家Dr. H. C. Kwaan教授のもとで凝固線溶因子についての基礎検討を行った。制癌剤処理を施した癌細胞、血管内皮細胞より放出されるマイクロパーティクル（細胞膜断片）が凝固異常の病態発症、進展に関与している可能性を検討した。さらに本学で検討を行っている脂肪細胞における凝固線溶因子の関与についてもディスカッションを行った。

研修内容については2006年11月1日大分県立看護科学大学にて報告を行った。

13 学外研究者の受入

本学教員 甲斐 倫明

受入者 小野 孝二

所属：大分県立病院放射線科部 臨床放射線技師

研究テーマ：放射線診断における画像撮影の最適化に関する研究

受入期間：平成18年4月1日～平成19年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

所属：大分大学工学部知能情報システム工学科 助教授

研究テーマ：低線量放射線の生体影響に関する実験データへの統計的手法の研究

受入期間：平成18年4月1日～平成19年3月31日

本学教員 市瀬 孝道

受入者 大貫 繭美

所属：大分大学医学部

研究テーマ：大気環境物質の真菌アレルギーへの影響

受入期間：平成18年6月1日～平成19年3月31日

本学教員 桜井 礼子

受入者 木村 厚子

所属：大分県看護協会 大分県ナースセンター

研究テーマ：女性の健康づくりに対する支援

受入期間：平成18年5月1日～平成19年3月31日

14 職員名簿

1 専任教員

生体科学	教授	高橋 敬	
	助教授	安部 眞佐子	
	助手	岩崎 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	講師	吉田 成一	
	助手	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
	助手	吉武 康栄	
人間関係学	助教授	関根 剛	
	助教授	吉村 匠平	
	助手	佐藤 みつよ	
環境保健学	教授	甲斐 倫明	
	助教授	伴 信彦	
	助手	小嶋 光明	
健康情報学	教授	佐伯 圭一郎	
	助手	品川 佳満	
	助手	中山 晃志	
言語学	教授	G. T. Shirley	
	講師	宮内 信治	
	助手	岡崎 寿子	
基礎看護学	教授	小林 三津子	H19. 3. 31 退職
	助教授	伊東 朋子	
	助手	吉田 智子	
	助手	甲斐 博美	H19. 3. 31 退職
	助手	小野 さと子	
看護アセスメント学	教授	小西 恵美子	
	講師	藤内 美保	
	助手	安部 恭子	
	助手	玉置 奈保子	H19. 3. 31 退職
	助手	栗屋 典子	H19. 3. 31 退職
成人・老年看護学	助教授	赤司 千波	
	助手	小野 美喜	
	助手	松尾 恭子	
	助手	福田 広美	
	助手	井伊 暢美	

小児看護学	助教授	高野 政子		
	助手	山下 早苗	H19. 3. 31 退職	
母性看護学・助産学	助手	中原 基子	H19. 3. 31 退職	
	教授	宮崎 文子		
	助教授	林 猪都子		
	助教授	吉留 厚子	H18. 12. 31 退職	
	講師	小西 清美		
	講師	関屋 伸子	H19. 1. 1 採用	
	助手	高瀬 恵子		
	助手	遠藤 千昌	H18. 8. 31 退職	
	精神看護学	教授	影山 隆之	
		講師	大賀 淳子	
助手		田村 充子	H19. 3. 31 退職	
保健管理学	教授	草間 朋子		
	教授	桜井 礼子		
	助教授	平野 互		
	助手	高波 利恵		
	助手	朝見 和佳		
	地域看護学	助教授	工藤 節美	
講師		江藤 真紀	H19. 2. 1 採用	
助手		木下 結加里		
助手		時松 紀子	H18. 8. 31 退職	
助手		大島 操	H19. 3. 31 退職	
助手		一木 アサ子	H19. 3. 31 退職	
国際看護学		教授	李 笑雨	H18. 10. 1 採用
		講師	八代 利香	

2 非常勤講師

日高 貢一郎	言語表現法
西 英久	哲学入門
三舟 求真人	生体微生物反応論
西園 晃	生体微生物反応論
宮本 修	音楽とこころ
山本 光英	法学入門
大杉 至	人間と社会
合田 公計	経済学入門
吉良 國光	大分の歴史と文化
肥田木 孜	母性病態論

澤田 佳孝	美術とこころ
福元 満治	保健医療ボランティア論
佐渡 敏彦	看護と遺伝
宇都宮 隆史	母性病態論
戸高 佐枝子	母性病態論
堀永 孚郎	母性病態論
上野 桂子	母性病態論
吉河 康二	看護と遺伝
劉 美貞	韓国語
足立 恵理	文化人類学入門
ホアン・ホセ・アルタミラノ	スペイン語

3 事務職員

○事務局

事務局長	高橋 賢一	H18. 4. 1 転入
統括部長	小野 順一	
・経営企画グループ		
課長補佐	三浦 始	
副主幹	堀 潔己	H18. 4. 1 転入
主任	森 清	H18. 4. 1 転入
臨時職員	平川 昌子	H18. 4. 1 採用
・財務グループ		
主幹	戸高 晴寿	H18. 4. 1 転入
主任	伊藤 慎太郎	H18. 4. 1 転入
臨時職員	工藤 奈緒	H19. 1. 26 退職
臨時職員	池邊 尚美	H19. 2. 5 採用
・教務学生グループ		
主幹	坪崎 勝	H18. 4. 1 転入
副主幹	佐藤 俊美	
主査	足立 暢久	H18. 4. 1 転入
臨時職員	神崎 純子	H18. 4. 1 採用
・図書館管理グループ		
主査	小野 永子	
非常勤司書	牛島 聡子	
非常勤司書	中野 美佐子	

